

君が帰る場所

pwpa

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

都会に憧れてた少年と少女の物語は事故によって出来た穴から始まった

挿絵もたまに描きますが下手です

一応描いた話数はこちらにもあげておきます

私程度の絵でも羞恥心無く載せています（ゝω・★）

8話

20話

29話

35話

37話

41話

43話

ここからはまた描き次第追加します

## 目次

穴	1
始まり	4
ある意味新しい新生活①	7
ある意味新しい新生活②	11
好きな人	14
夏の思い出は甘くて苦いもの ①	18
夏の思い出は甘くて苦いもの ②	22
夏の思い出は甘くて苦いもの ③	25
夏の思い出は甘くて苦いもの ④	28
踏み出す勇気	32
夏の思い出くらい楽しくって良いじゃないか ①	36
夏の思い出くらい楽しくって良いじゃないか ②	39
日常というものはほんの少しの事で非日常へと変わる ①	43
日常というものはほんの少しの事で非日常へと変わる ②	46
日常というものはほんの少しの事で非日常へと変わる ③	50
日常というものはほんの少しの事で非日常へと変わる ④	54
学園祭	57
文化祭前って何だか付き合う奴が多い気がするけど、やっぱり気のせいじゃない	60
メイド喫茶とは中に可愛い子がいるとは限らない	63
嫌よ嫌よは結局嫌なんだから勘違いをするな	69
六花の好きな人	73
六花の好きな人〜過去〜	76

六花の好きな人〜過去〜

80

六花の好きな人〜過去〜

84

六花の好きな人〜過去〜last

87

六花の好きな人

91

そしてまたすれ違う

95

目に見えない力

99

クリスマス

103

最悪なクリスマス

109

最悪なクリスマス

113

今年の正しい終わり方

118

壊れた物の直しかた

124

## 2年目

新しく始めよう

129

どっちの料理deshow!!

134

六花の気持ちと小恋の心

138

大雅の気持ち

143

珍しい2人

150

修学旅行

153

修学旅行〜沖縄〜

155

修学旅行〜沖縄〜

159

修学旅行〜沖縄〜2日目

165

修学旅行〜沖縄〜2日目

169

修学旅行〜沖縄〜3日目

174

修学旅行〜沖縄〜3日目

177

修学旅行〜last〜

182

巻き込み	188
とつげき！昂家	191
昂家での1日	194
昂家での1日②	197
すれ違い強化	206
変わらない幸せ	219
近くに居たい存在	228
六花のいない町	237
『 』	240

## 穴

★昴side

「うえーい！Here is my castle!!」

部屋に入るなり両手を上げてベッドにダイヴ

「ぼーか、普通のアパートだろうが

にしても羨ましいよな、都会に憧れてた田舎っぺの親戚にアパート  
管理人がいたなんてよ」

「両親納得させんのに苦勞したけど、こっちに來れて良かったわ」

オレは小学生の頃や中学生の頃によく叔母さんの家に遊びに來て  
いて、こっちでも友達が出來ていた

だから引越して全然知らない高校へ入学してもぼっちになるこ  
と無く、無事に1ヶ月過ぎていった

「それで？お隣さんの顔見れたか？」

「いや、表札もつけてねえしインターフォン押してもシカト、他人と  
距離置いてんじゃねえの？でも生活音が聞こえっから誰かしら住ん  
でると思うんだけどな」

「まあ1ヶ月も挨拶なしならそのままスルーだな」

「都会って冷たいんだな」

「そんなもんだよ、お隣同士のお付き合いなんて夢見んな」

「なんもねえならそれでも良いか」

言い忘れていたけど、一緒にいるのは叔母さんの家に遊びに行くこ  
きには一緒に遊んでいた九頭竜 大雅（くずりゆう たいが）、オレに  
とってはこっちで1番の友達

ゲームをしているうちに大雅はスマホを確認すると急ぎ足で玄関  
に向かった

「つべー！女と約束があるんだった!!」

また月曜日な昴」

「おー、何股かけてるかしらねえけど刺されんなよ」

「刺すのはオレの方だろ」

親指を突き立てながら大雅はオレの城を後にした

それからしばらくすると隣の部屋から生活音が聞こえてきたが最近少しだけ疑問に思ったことがある

いくら壁が薄いからといってここまで音が漏れるのかということだ

聞こえてくる場所を探るとベッド側から音がよく漏れてきている

壁際からベッドを少しずつつ音を出さないように動かすと30〜40cm程のベニヤ板が剥き出しになっていた

「叔母さんも先に言ってくれりゃ良いのに……」

誰が聞いているわけでも無いのにそう言っただけ息をついた

隣の部屋は多分綺麗に壁紙を貼り変えられていると思う、でなければ叔母さんに苦情が入るに違いない

とりあえずこれは……見なかつた事にしよう

ベッドを戻そうと引いた時、ベッドの足が一本折れ、その反動で頭からベニヤ剥き出しの壁に突っ込んだ

痛みと何かを押し出すような感覚を感じながらそつと目を開けると一瞬見えたパンツ

その瞬間顔面に激痛が走り意識を失った

「……くん」

「……昂くん!!」

誰かに呼ばれてる気がするけど、体が動かないし体が痛い  
痛みに耐えながらも目を開けると仁王立ちしている叔母さん

「あれ？叔母さん？おはようございます」

「おはようございますじゃありませんよー」

せっかくな御昂さんの部屋の壁は綺麗に貼り替えておいたのに穴空けちゃって」

言っている意味がよく分からないまま首だけ動かして身体を確認すると、穴にぴったりハマっていた

「なんじゃこりゃー!?!」

「昂くんが自分からやったんでしょ？」

御昂さんが朝に私のところに電話くれたのよ



隣の人が穴を開けて入ってきましたって」

そう言われているうちに昨日の事を少しずつ思い出してきた

「今のオレじゃ謝ることしか出来ませんが、何でオレの部屋はベニヤのままなんすか!？」

「昴くんなら気にしないと書いたのよ、ベッドで隠れているし

そ・れ・よ・り!もしも御昴さんが出ていくってなったら、引越  
しのお金くらい出さないね」

「そりやないっすよ、わざとじゃないのに」

「それなら誠心誠意謝って穴を直さない」

「はい……」

何とかしてハマった穴から押し出された後、隣人の御昴さんという人は夜眠れなかった分、ネットカフェで時間を潰していると教えてもらえた

## 始まり

穴を今すぐ埋められるはずもなくとりあえずは物を置いてある

隣の部屋に御昴さんって人が帰ってくる音が聞こえ、お菓子を保持て急いで飛び出た

インターフォンを押してしばらくすると、インターフォン越しのやりとりなどは一切無く無防備に出てきたのはオレと同じ年か一つ二つ下くらいの女の子がドアを開けて顔を出した

「え、えっと…隣の部屋の六道っすけど」

すぐにドアを閉められそうになり片手を伸ばすと手首がドアに挟まった

「痛つてえ!!」

その言葉に驚いたのかドアを閉める手が緩まり、オレは流れるようにその子の部屋に入り込んだ…つもりだった

玄関の少しの段差で躓きその子に覆い被さるように倒れた時、後方からシャッター音が聞こえた

急いで離れて後ろを見るとオレが襲っているかのような姿がしっかりとデジカメで保存されていた

「おい！あんた!!なにすんだよ!!」

「あたしの台詞ですよ？女一人の部屋に頭から突っ込んだり、襲いかかろうとしたり何なんですか？」

「謝るために来たんだよ！それよりデジカメよこせ！」

デジカメに向けて手を伸ばしても簡単に避けられてしまう

「あー！もう!!」

この際だから単刀直入に言わせてもらおうぞ！

穴を空けたのは本当に悪かった、申し訳ない、ごめんなさい！

叔母さ…：管理人さんに君が引越すなら金出してやるようにとまで言われてるけど

オレから君に干渉しない、なんとか金を貯めて穴も塞ぐから、引越すとか言わないでほしい」

「とりあえずここで話してもってところがありますし、どうぞ入って

下さい」

服を軽く直して、手招きされるがままにその子の後を付いていった部屋にはPCとベッドとテーブルくらいしかなく、あえていうなら何もない部屋

穴には簡易的なカーテンが付けられていた

「それで、えっと…穴のことだけどき」

「大丈夫ですよ、『難あり』で安くなっていた物件ですし、直して貰えるのであればあたしは平気です

それより顔、大丈夫ですか？」

顔？

その一言で昨日の事を思い出した

あの瞬間見えたパンツは、顔を踏みつけられた時に見えたものだ「お前！オレの顔を踏みつけやがって!!」

「あー、気付いていなかったなら言わなきゃ良かったかもですね」

「そういう問題じゃねえよ!!お前も謝れ!!」

「そんな事言つて良いんですか？」

デジカメのデータはあたしのPCにあって、独自のネットワークに保存されています

今の環境でその写真が公開されたりしたら、社会的に即死しますよ？」

一瞬周りのみんなから痴漢呼ばわりされる姿が目に見えただ

「何が目的だ？」

「逆らわない従順なペットが欲しかったんですよ」

「はあ!?!つぎけんなよてめえ」

「ふざけてなんていませんよ?六道 昴さん」

こいつ、オレの名前を？

「あたしも鬼じゃありませんから、あたしの命令は1日1回だけ、それ以外隣人として以外は六道さんに干渉しません、どうですか？」

「どうですかって、断るなんて選択肢はオレにはねえんだろ」

「そうかもしれないね」

「鬼というより悪魔だな、分かったよ」

ただし、壁を直したらその関係も解消させてもらうからな！」

「はい、それで構いません」

そう言った時のこいつの笑顔にオレは一瞬見入ってしまった  
「あたしから何かしてほしい時はこうします」

カーテンを開いてオレの部屋にあるものを軽く叩いた

「その時オレがいなくてもしれねえぞ？」

「間違いませんよ？」

六道さんの生活音は駄々漏れでしたから」

これ以上話してもストレスしか溜まらないと思いきつさと帰ろうとした時、手を掴まれた

「オナニーする時はヘッドフォンくらいしてくださいね」

カーツと熱くなるのが分かったが何も言わずに部屋を飛び出した

★昴 side out

★六花 side

単純な人、こんなデジカメにそんな機能付いてるわけなのに  
でも思っていた通りの人でよかった

これからもよろしくお願いしますね、六道さん

★六花 side out

## ある意味新しい新生活①

★昴 side

コンコンと積み上げられた段ボールから聞こえるノックにビクツと反応した

居ないふりすれば……と思っていたのにノックの音が止まることはない

しんどいながらも段ボールを下ろして隣の部屋に顔を出した

「あんだよこんな遅くに」

「今日の命令だけど

なんでこの街に来たのか教えてよ」

はつきり言って拍子抜けだった、もつと酷い命令をされるのではないかと内心ビクビクしていたからだ

「大した理由なんてねーよ

ただ都会に出たいって思ってたやって来たくらいだな

お前だってそんなもんだろ？」

「そうかもねー」

あ、もういいから出て行って」

何だこいつと思いつつも強く言うことも出来ずに頭を戻していったが

もしかしたらまた呼ばれるかもしれないと、その日の夜は無駄に長く起きていた

「おっはよ昴」

「おう……」

「んだよ寝不足か？」

「ああちよつとな」

結局ほとんど眠ることが出来ず休みは終わり、学校で朝から大あくびをするほどだった

「適当な理由つけて保健室でも行きや良いじゃん」

「オレのそういう嘘はすぐバレるんだよなあ」

頭の中はダルい眠いが渦を巻いている状態のなか、クラスのみんなはほとんどと集まりはじめていた

「随分と眠たそうですね、六道さん」

「しよーがねーだ……ろっ？」

机に突っ伏している状態から少し顔を上げると、オレの机に手を置いて楽しそうにしている見たことのある顔が……

「お前！なんでここに!？」

「だって同じクラスで六道さんの前の席はあたしじゃ無いですか」

まじか!？

オレは約1ヶ月そんなことも気付かないで過ごしていたのかよ!!

「つーか寝不足なのはお前のせいだよ！

命令するって言うからどんなにか……」

オレの唇に中指を当て言葉を遮られた

「命令とか何を言っちゃってるんですか?」

女子に唇を触られるなんて……じゃねえ!!

「隣人として以外はオレに干渉しねえ約束だろ?」

周りに聞こえないくらいの声でそう言うと、こいつはケラケラと可愛らしく笑って言った

「クラスメートとして今は接しているんですよ

避けると逆に怪しまれますから

それじゃおやすみなさい、六道さん」

そう言われなくともとつと寝てやるよ!と意気込み次に起こされたのはお昼だった

「おー、飯行くぞ」

「くぁ……っ」

もうそんな時間か」

「ずつと寝てたもんなお前は」

屋上でおにぎりを噛りながらブーツとしていると大雅の口から思わぬ人物名が出てきた

「昂つてき、六花ちゃんどうい関係なんだ?」

「誰だそれ?」

「前の席の御昴　六花ちゃんだよ」

米が変なところに入り込んで思い切り噎せて、確実に脳ミソも起きた

「あー……死ぬかと思った

で？あいつが何なんだよ」

「オレが聞きてえよ、学校の可愛い子リスト上位に入る逸材と昴がどういう関係なのかって

朝見てたんだぞ？あんなに楽しそうに笑ってる六花ちゃん見たのは初めてだからな」

「ただのクラスメートだよ、そもそもあいつの連絡先とかLINEすら知らねえし」

「となると寝ぼけた昴の面が面白くて笑ってただけかあ

まあそうだよな、昴が六花ちゃんと仲良くなってるはずねえもんな」

何かバカにされてる気がするけどオレとあいつの関係がバレたら、社会的にオレが死ぬな

黙っておこう

それから約1ヶ月、大雅には上手く誤魔化しながらそれくらいの月日が過ぎた

あいつからの命令は毎日些細なことで、少し話をすることも日課のようになり、段ボールを積み上げて塞いでいた壁の穴はキャスター付きの棚に置き換えていた

大雨の降る夜、いつもより早い時間にノックの音が聞こえてきた

「なんだよこんな時間に」

風呂上がりということもあつてパンツ1枚だけど

出すのは顔だけなら問題ないだろうと棚をずらした瞬間腕を掴まれた

「ぬうああ!?!ホラーかよ!?!お前!」

「め、命令……」

ちよつとの間( )のままですって



## ある意味新しい新生活②

雷が鳴る度にオレの腕を掴む力が強くなるのが分かった  
こいつもしかして

「雷が怖いのか？」

「そんなわけないでしょ」

「とか言って手え震えてるぞ？」

そう言った瞬間近くに雷が落ちたらしく、激しい音と共に電気も消えた

「結構近くに落ちたな」

腕を掴む存在が無くなったと感じたと思ったら一気に腕が重たくなり目を凝らしてみると、オレの部屋に入り込んで腕にしがみついていた

「おいおい、命令違反だろこれ」

「別に良いでしょ……それより何か灯りの変わりになるものないの？」

とりあえずとスマホのライトをつけた

「スマホってこんなに明るくなるんだな」

腕から離れてもこいつは部屋に戻ろうとはせずオレの隣にじっと座っている

「なんでパンツだけなの？」

「うるせーな、風呂上がりなんだよ」

そういうお前もズボンくらい履けよ、目のやり場に困んだろ」

「見なきゃ良いでしょ？」

ああでも、見たいなら見ても良いよ？水着OK下着NGって考えていないから」

「見ねーよーていうかやつぱり雷が怖いんだな

いやー意外だな、お前みたいなのやつにも怖いもんがあるんだな」

雷が鳴ると少し縮こまる姿を見てこれ以上何かを言うことはやめにした

「ほれ」

「なに？この手は」

「手くらい貸してやるよ」

少し笑ってからオレの手を軽く繋いだ

小さくて柔らかくて力を入れたら簡単に壊れてしまいそうな手

やっぱりこいつも女の子なんだよな

ただ無言の時間が過ぎていつの間にか電気も復旧したけど、こいつはオレに寄りかかってぐっすり眠っていた

眠っていれば本当に可愛いのかな

そう思いながら、起こさないようそつと抱えて布団の上に乗せ、オレはその横でひんやりとしたフローリングを感じながら眠りについた

次の日の朝

顔をグニグニ踏まれる感触で目を覚ますとあいつが笑っている

「普通に呼び起こせばいいだろ」

「あたしみたいなのに踏まれるなんてご褒美みたいなものでしょ」

前言撤回、何にもかわいくねえ

「昨日のお礼っていったら変だけど、朝ごはん作ったから食べよ？」

「朝ごはんってオレの冷蔵庫に食べ物なんて殆どねえだろ」

「それくらいあたしが用意しました」

一人用の小さなテーブルに並んでいたのはフレンチトーストとコーヒーが二人分ある

キッチンには鍋が仕込まれている

「これお前が？」

「あたしが料理するなんておかしい？」

「いや、そういう事じゃねえけど」

「なんも変なものいれてねえだろうな？」

「ならあたしの方食べる？」

「お前もここで食うつもりかよー！」

「わざわざ戻るのも面倒だし、洗うのもあたしだから良いじゃん」

何を言っても無駄か……

恐る恐るフレンチトーストを口に運ぶと予想以上にオレ好みの甘さで美味しく食べた

「美味しそうに食べてもらえてよかった

賞味期限切れてたから処理に困っていたんだよね」

「はあ!？」

「アハハ、嘘だから安心して」

そう言いながら食べ終わった食器をすぐに片付け始めた

「この鍋には何が入ってるんだ？」

「野菜コンソメスープ、もう少し冷めたら冷蔵庫に鍋ごと入れちゃって大丈夫だから

食べる前にしっかりチンはしてね」

片付け終わるとドアからではなく穴から自分の部屋に戻っていった

「これで貸し借りは無しですよ、六道さん」

壁越しにそんな声が聞こえた

## 好きな人

「よっしやー！テストも終わったしカラオケでも行かねえ？」

「なーんで大雅とカラオケ行かないやなんねーんだよ」

「は？オレが女の子誘わないわけねえだろ？」

それに昴の好きな小恋（ここ）ちゃんも誘ってあるんだけどなあ  
まあ？昴が行きたくねえって言うのなら別に無理強いはしねえけどな」

こいつに話したオレがバカだった

それに好きとは言ってねえし、ちよつと気になるくらいだし

西城 小恋ちゃんとは席が隣同士というだけ、近いからこそ意識してしまう

小学生かよって笑われたけど、しょうがないじゃん、人間だもの。すばる

「じゃあしよーがねーか、別のやつ誘うわ」

大雅の肩を掴んで目を背けながら言った

「オレも行く」

「ハッハー、最初からそう言えよ」

オレは保険用に後二人くらい適当に探すからよ、昴は六花ちゃん誘えよな」

なんでオレがあいつなんかを誘わなきゃ行けねえんだ！

と言えたらどれだけ楽だったのだろうか

「断られてもオレのせいにするなよ」

「分かってる分かっているって」

悩みながら行動に移すまでの数分で大雅は男二人女の子を二人と新しく集め終わっていて、オレの方を見ながら口パクで『はやくしろ』と言っているのが分かった

「な、なあ」

後ろから声をかけるとくるっと振り返り首をかしげた

「あたし？」

「そうだよ、それで今日んだけどカラオケ行かないか？」

「六道さんと二人で…ですか？」

違うと言おうとしたところで、大雅がオレ達の間に入った

「オレもいるよー」

それと女の子3人と男が4人、今のままじゃバランス悪いしき、六花ちゃんもどうかかなーって思ったんだよね」

「そういうことですか」

スマホを見て予定を確認しているのだろうか、その後の返事には少しだけ時間がかかった

「あたしで良ければ参加しますよ」

「おっしや！それじゃみんな準備できたら行こうぜ」

はつきり言って予想外だった

オレも実際のところクラスでよく話すのは大雅くらいしか居ないけど、こいつはほとんど1人でいる

大人数でなにかするのが好きなタイプでは無いだろうと勝手に思っていた

カラオケ前にゲーセンに寄ったりして他の奴等とも少しずつ打ち解けることが出来た

多分大雅がオレをもう少し色んな人と関わるようにと仕組んでくれたんだろう…：そうであってほしい

カラオケでは大雅が席を割り振って、男女交互に座らせた

こういうのは本当に才能だと思う

「六道くんって話すと意外と楽しい人だね」

「オレも西城さんと隣の席以外で接点無かったから、こうして遊べて良かった」

冷静ぶってそんなこと言ってるけど、心臓が飛び出しそうなほど鼓動がはやくなっている

飛び出したら誰かキャッチしてくれるかな

3時間くらいだろうか、みんなワイワイしていると大雅は割りばしに数字を書いて王様ゲームをしようと言い出した

大雅の王様ゲームなんてやりたくないに決まっているけど、雰囲気

に流された

命令は、しつぺをする、LINE交換、ツーショットを撮る、デユエツトするなど予想外な程普通だった

でもそのお陰か小恋ちゃんともLINEの交換をすることができた……ついでにあいつとも

「それじゃこれがラストにするか、王様はこの大雅様でえく……」

1番と2番がポツキーゲーム！キスマでしなくて良いからお互いギリギリまでやることな

酒入ってねーのに何を言い出すんだこいつはと思いつつ自分の番号を確認すると見事なまでに1番だった

「昴1番かよ、もう少しポーカーフェイスしろよな」

なぜわかる!?

「2番はあたしですよ、六道さん」

神様のイタズラか大雅のイタズラか分からないけど全力で恨むぞ

「流石にポツキーゲームは止めない?」

「なに行つてんだよ昴、ラストくらい盛り上がろうぜ」

大雅の言葉で周りも盛り上がった

あいつも反対すれば無効になるかもしれないと思つたのに、あいつはポツキーを持ってオレの椅子の前まで来ていた

「逃げるんですか?」

「はあ!?!逃げるかよ!」

こうなつたらとことんやってやる!嫌がつて女々しい姿をさらすより1000倍マシだ、男らしいところ見せてやんよ

そう意気込んだところでこいつはオレの膝の上に腰を下ろした

「高さ調節ですよ、変な意味はありませんから」

「へっ!お前なんかが乗つても何とも思わねえよ」

クスクスと笑いながらポツキーを啜えてどうぞと言つてきた

「盛り上がってきたぜー、それじゃスタート!!」

大雅の合図でポツキーの振動が伝わって来るのが分かる、負けずに少しづつ噛り始めた

どうせギリギリで折るに決まつてる、強気に強気に……

周りから見たら上唇が触れるか触れないか分からないところでオレは首を横に振り、ポツキーを折った

「昂にしてみりや上出来だな」

「すっごいドキドキした、六道くんと六花さんキスマでするんじやないかって思ったよ」

「ていうか少し唇当たってなかった？」

「あたしはギリギリ当たってないように見えたけど」

実際は当たっていた、オレの唇に微かだけどその感覚が残ってる

あいつはオレの膝から降りて残りのポツキーを食べ、ギリギリ聞こえる声で言った

「意気地無しですね」

その後少し歌ってみんな解散したのだが、オレとこいつが一緒に帰るのは不自然に思われると考え、オレは買い物をして帰ると言い、みんなと別れた

少しすると小恋ちゃんからLINEが来ていた

『今日は楽しかったよ』

六道くんとも仲良くなれたし

これからも一緒に遊ぼうね』

嬉しすぎて何て返事をしようかかなり迷い

結局大雅に聞いてそれ通りに返した

『オレも楽しかった』

またみんなで遊ぼうぜ』

その日からクラスで話す相手も増え、無事に1学期を終えることが出来た

## 夏の思い出は甘くて苦いもの ①

夏休みに入ってすぐに隣の部屋のやつは実家に帰ったらしく普段の何気ない命令も無いとつまらなく感じる

小恋ちゃんとは何気ないLINEのやり取りをしてはいたが、なんだか物足りないような気持ちでいた

夏休みも1週間過ぎた夜に隣からノックが聞こえてきた

「なんだよ、帰ってきたならインターフォン押せばいいだろ」

なんだかんだ嬉しそうにそう言って柵をずらすと、テーマパークのチケット2枚を渡された

「あたしの父さんから友達と行ってきなさいって渡されたけど、六道さんあげるね

西城さんでも誘えば？」

それだけ言われるとカーテンを閉じられて穴正面に鏡を立て掛けられた

それからいくら呼び掛けても返事はなく、チケットを見つめて座り込んだ

ペアチケットじゃねえかよ、つーかオレあいつに小恋ちゃんのこと話してねえのになんで分かったんだ？

それ以前にオレから誘うなんて絶対に無理だ

ここは偉大なるあの御方の力を借りよう

「もしもし大雅、今大丈夫か？」

『珍しいじゃん、どうした？急に電話なんて』

「テーマパークのチケットがあるんだけどさ…」

『小恋ちゃん誘いたいんだけど僕ちゃんどうしたら良いか分かんないのーってところか』

エスパーかこいつは!!

「そ、そうだよ！悪いか」

『いや、悪くはねえけど、オレが間接的に誘うのは変じゃね？』

「それなんだけど、ペアチケットが2枚あるんだ

何とか誘ってくれねえかな」



『え？その為にお前ペアチケ2枚とったのか？』

「貰いもんだよ!!」

『そっかー、そうだよな』

危うく友達止めるところだったわ

それで？後女の子1人は誰なんだ？』

「決まってねえけど」

『何でもオレ任せかよ』

じゃあオレが責任もって小恋ちゃんは誘ってやる

ただしだ！昴は六花ちゃんを誘えよな、誘えたらオレもしつかりと誘うからよ』

「なんでお前はあいつにそこまでご執心なんだよ」

『なんていうかミスティアスな感じが堪らないじゃん』

オレからLINEしても半日とか次の日とかに既読つくし、返事もねえしき、オレ色に染めたい的な？』

「分かったよ、オレからも一応聞いてみるけど、駄目だったとしてもオレのせいにするなよ」

『そしたら小恋ちゃん誘わねえから大丈夫だ』

そう言われて電話は切られた

オレの恋を実らすためには何としてもあいつを誘わなきゃならねえ事がよく分かった

壁を叩いても反応が無いことくらい分かっている

ならば……ベランダからだ!!

ベランダから隣の部屋に侵入することは物凄く簡単に出来ると知っている

ベランダ同士の薄い仕切りを越えて隣のベランダへと侵入し少しだけ開いている網戸に手をかけて気付いた

あれ？これ不法侵入じゃね？

バレたらまた弱味握られるってパターンじゃね？

そう思った途端に全身から冷や汗が流れた

バレないようにバレないようにとそつと網戸から手を離れた時、隙間から微かではあるが妙になまめかしい声が聞こえてきた

予想は何となくついていた

見てはいけないものだとも分かっていたのに

オレはカーテンの隙間から部屋の中を覗いていた

「……………ん」

ベッドの上で服の上から胸をまさぐり、もう片方の手は下半身へとのびていた

かなり声を殺している様子ではあるけど呼吸する声までしつかりと聞こえてくる

エツチな動画で見たことはあつたはずなのに、初めて直接見るその姿に釘付けになってしまった

あいつがそのまま寝転んだ時、オレのスマホが鳴り響いた

完全に目があつた

ペタペタと歩み寄る音、オレは急いでマナーモードに切り替えて逃げようとしたが、時すでに遅く、カーテンは完全に開かれた

「覗きですか？」

「ごめんなさい」

何もかもが終わつた

叔母さんにも話しはいくだろう

流石に引つ越すだろう

怖くて顔を上げることも出来ない

「はあ……………なにか弁解したら？」

「ごめんなさい……………」

何かつて何言えば良いのか分からねえ

「……………話をするにもなんですし、とりあえず上がって下さい」

窓際から離れて行く後ろ姿が見えてからオレは逃げることを諦めてゆつくりと部屋に入った

「どうぞ」

言われるがまま座布団に正座した

「何でベランダ乗り越えて来たの？」

「壁叩いても返事が無かつたからです……………」

「ならインターフォン押すかLINEすれば良かったんじゃないの」

オレはその時初めてインターフォンの存在を思い出した

「ちよつと急いで、インターフォンの存在を忘れていました」

「壁に穴を空けるし、襲おうとするし、今度は覗き

そんなにカチコチにして本当に変態さんのようで」

サツとズボンに手を当てるがオレの息子はどうやら空気を読めるらしく、静かにしてくれていた

「と、とりあえず今回の件はオレが全面的に悪かった！

ごめんなさいだけで許してもらおうなんて思っていないから、叔母さんには話さないで下さい！」

全力でのDOG EZA

これくらいしか出来ることは無いけど誠意は見せる

「六道さんがそこまで言うのであれば、管理人さんには言いませんけど」

『けど』という言葉を気にして顔を上げると、タオルを顔面に投げつけられて、そのまま床へと押し倒された

タオル越しに伝わる柔らかい唇や舌の感触と温かい吐息に少し目眩がした

「あたしだけ見られるって不公平だから、六道さんの恥ずかしいところも見せてください」

誰がこんな奴に…という気持ちとは裏腹に、オレの息子は愛と勇氣だけしか友達がいない彼のように元氣100倍になってしまっていた

「こんな時でもこんなに元氣になるんですね」

羞恥心120%こんなことあって良いはずがない

はち切れそうな理性を制御してオレはこいつを突き放した

「この埋め合わせは必ずするから!!」

逃げるようにベランダへ向かって、1度落ちそうになりながらも自分の部屋に逃げ帰った

深呼吸をしてぐちゃぐちゃの頭の中を整理した時、ふと思い出した  
テーマパーク誘うの忘れた

## 夏の思い出は甘くて苦いもの ②

はつきり言っただけを誘うなんて出来なかった

「あんなことがあつて顔すら見れないでいて、ノックを1日無視した  
「なんでノック無視するの？」

「見せる顔がねえよ……って

なんで部屋の中にいるんだよ!!」

「鍵開いてたから玄関から入ってきたけど、無用心すぎ」

「普通は空いても入らねえもんなんだよ」

「へえ、普通の人はベランダから覗きはしないとしますよ

それともそれが六道さんの言う『普通』なのかな？」

痛いところを……

「つーか何なんだよ！お前だって無用心に窓開けて1人でしてただけ  
じゃねえか」

「こんなところで訳も分からない逆ギレとか、お子ちゃまですか？

六道さんはルール違反をしました」

「ルール違反？」

「はい、あたしからの命令の無視

つまり写真をバラ撒かれても、管理人さんに不法侵入のことを言っ  
てもなんの文句も言えませんよね」

「い、今お前がしてることも不法侵入だぞ？」

「他の人はあたしと六道さんの言葉のどちらを信じると思いますか  
？」

二人でいるときよく見せる不適な笑みを浮かべた

「あたしが出ていくとなればバイトもしなきゃいけなくなりますし、  
西城さんの時間もとれなくなりますね

それ以前にあの写真を見て西城さんは六道さんをどう思うか、それ  
はそれで面白そうですけど」

無意識のうちに握っていた拳がブルブルと震えているのが分かっ  
た

「女の子をここまで全力で殴りたいって思ったのはお前が初めてだ

よ」

「あたしも男の人にそんなに怖い顔をされるのは生まれて初めてですよ」

にっこり微笑むこいつの裏にどんな素顔が隠されているのか、ある意味恐怖すら感じた

「ところで話しは変わりますが、西城さんは誘えたのかな？」

本当に話が全く違う方向に進んだことに脳ミソがついて行けてなかった

「はえ？」

「だから、西城さんをテーマパークに誘えましたか？」

「さ、誘えてねえよ」

物凄くがっかりしているのが分かるほどのため息をつかれた

「九頭竜さんに誘いかた習ったらどうです？」

それが出来りや苦労はしないけど、これはチャンスだ！棚ぼただ!!

「お前の渡したチケットはペアだからよ、大雅も誘うからお前も行かないか？」

「あたしがワイワイ楽しむような性格に見える？」

確かにそういう性格じゃないな

「オレが小恋に告白する！それを見せてやるからお前も来いよ」

「止めておきなよ、絶対に失敗するから」

冷たく感じたその言葉に強気に言い返した

「お前にオレ達の何が分かるって言うんだよ！」

「誘えもしないあたり無理でしょ？」

「分かったよ！今ここで電話して誘ってやんよ！」

言わなきゃ良かったと思ったけど、こいつの思い通りに動くのは嫌だという気持ちが上がった

「小恋？」

『電話なんて珍しいですね、どうかしましたか昂くん』

「あのさ……テーマパークのチケット貰ったから一緒に行かないか？」

『えつと…二人ですか？』

「2枚ペアチケットあるから大雅と他に誰か誘おうと思ってるよ」

『そうですか、あたしはもう予定も済みましたしいつでも大丈夫ですが、あたしなんかと一緒に行ってよろしいのでしょうか』

「良いって良いって、みんなで楽しみたいじゃん」

『ありがとうございます』

『それでは予定が決まり次第また連絡下さいね、楽しみにしています』

それで電話を切ってあいつにどや顔をして見せた

「はいはい、おめでとうございます」

「大雅にも話すからお前も来いよ」

大雅はお前に来てほしいみたいだしよ」

「分かりました、今回は六道さんの頑張りを認めてあたしから折れま  
す

ただしルール違反と埋め合わせの件は忘れませんから」

心の中でバンザイを30回くらいしたと思う

それくらい嬉しく急いで大雅にも二人ともオレが誘ったことを連絡した

その後大雅はグループLINEを作り予定を合わせた

## 夏の思い出は甘くて苦いもの ③

テーマパークに行く当日

オレは無駄に早起きをして、誰よりも早く待ち合わせ場所に到着した

あいつと一緒に来るところなど見られたくないからだ

後30分程で集合時間となる頃に小恋も到着した

「はやいですね、昴くん」

「小恋も随分とはやいじゃん」

「お休みの日にみんなまで遊びに行くなんて久しぶりなので、早起きをしてしまいました」

「オレもそんな感じかな、こつち来てから大雅以外のやつとほとんど遊んでねえから楽しみでな」

「そういうえば昴くんは一人暮らしなんですよね

地元はどこなんですか？」

「地方の田舎だよ、自転車で10分走らないとコンビニすら無いような所」

「それだけで想像が出来ますね

でもそういう和な場所、あたしは好きですよ」

「まあホテルとかも見えるし、悪い所じゃねえんだけどさ」

「ホテルが見れるの!？」

いいなあ、あたしホテルなんて生まれてから1度も見たことありませんよ」

「それじゃあさ、それじゃあさ……」

「よう、2人ともはえーな」

なんてタイミングでくるんだよ大雅——！まだ小恋と話していたかったのに……

ってオレもしかして、さつき小恋を実家に誘おうとしてたのか？あの意味暴走前で助かったのか？

ふむ、わからんが……

「大雅も早い方だぞ」

「こんな時に男として遅れたらダメだろ」

それにしても小恋ちゃんの服装は清楚な感じがして良いね

学校の制服姿も可愛いけど、今日のその服装が見れただけで来た意味を見出させたよ

昴もそう思うだろ?」

「お、おう、すげー似合ってる」

オレは大雅のように自然と可愛いなんて言えない糞雑魚ナメクジ野郎です

「もう二人とも変なこと言わないで下さい」

「で?六花ちゃんはまだなのか?」

「オレに聞いてどうすんだよ」

「そりゃ六花ちゃんの私服姿も気になるしなー」

あいつが部屋で来ている服は文字のプリントされたTシャツしか見たことがないな、あとは制服を着ているくらいか

そう考えるとどんな服装で来るのかは気になるな

集合時間1分前くらいに深めの帽子を被り、肩の出ている緩めのTシャツとホットパンツ、スニーカーという見事なコーデであいつは現れた

「あれ?遅刻でした?」

「いや、ほとんど時間ぴったり

それにしても六花ちゃんがオフワンショルダーの服とか意外だね、ポニーテッドシユなのに可愛いぞ」

ほう、肩の出てる服ってオフワンショルダーというのか

初めて知ったというか、なんで大雅はそんなこと知ってるんだ

「御昴さん凄く可愛いよ、ね?昴くん」

オレに振る!?

「良いんじゃないねーの?」

帽子のツバで表情はしっかりと見えはしなかったが、口元は少し笑っているように見えた

「じゃあ行くうぜ」

大雅はあいつの手をとってオレらの前を歩き出した



「ねえ昂くん、九頭竜くんと御昂さんって付き合っているの？」

「それはねえと思うけど……オレらも行こうぜ」

オレは当然手なんて繋げない、ああそうさ！分かっていただろう！！

## 夏の思い出は甘くて苦いもの ④

「うっわ！流石都会だな

平日なのに人だらけじゃねえかよ」

「そりゃ夏休みだし、オレらみたいな学生も来てるしな」

ちらつと大雅と並ぶあいつを見ると繋がっていた手は離れていた  
なんでそんなことを気にしたのかは…わからん

「オレ絶叫マシン乗りたい！」

「あたし、絶叫系はちよつと」

「オレもせっかくの髪型が崩れちまう」

「あたしもパス」

なんだよこいつら！都会のやつらは乗らないのか？

あんなに並んでて楽しそうなのに！

「それよりペアでお化け屋敷行かね？」

「ここの結構怖いみたいじゃん」

「なんでわざわざペアで？怖いならみんなで入れれば良いじゃん」

大雅に後ろ頭をスパーン！と叩かれ、耳打ちされた

「こういう時は男女が接近する大チャンスなんだよ！

小恋ちゃんと仲良くなりてえんだろ？

ならオレの計画に任せろよ」

理由は分かったけど、叩かれた意味あるのか？

八百長くじを引いて小恋とオレ、大雅とあいつのペアでお化け屋敷  
に入ることになり、先に大雅ペアが突き進んで行った

昴side out

六花side

「なあなあ六花ちゃん

怖ければオレの手を掴んでも良いんだぜ？」

「九頭竜さんはどうして六道さんを応援するの？」

「あー……昴の話かよ

昴が恋愛しようとしてるところ初めて見るから、背中押してやって  
るだけだよ」

「そうなんだ」

「お化け屋敷での吊り橋効果でお互い高まり合って

今日中に付き合ってもおかしくはねえと思うが…」

「なに?」

「六花ちゃんはそれでいいのか?」

「どういうことかな」

「だって六花ちゃんも昴のこと好きなんだろう?」

あたしが?六道さんを?

「アハハハハ」

久しぶりにお腹の底から笑いが込み上げてきた

「ちよいちよい!そこ笑うところか?」

「なんだか九頭竜さんは六道さんの10倍は人を見ているんだな一つ  
て思ってる」

「そんな誉めんなよ、熱い夜しか渡せねえからよ

それで本題に戻すが、六花ちゃんは良いのか?」

「確かに好意が無いと言えば嘘になるけど

それは恋愛対象とは違うと思ってます」

「どうしてそう思うんだい?」

「あたしだって1度本気で誰かを好きになったことがあるから、その時  
の感情を忘れてないの

六道さんにはそれほどの感情はないから」

「そっかそっか、ならまだ六花ちゃんを振り向かせるのは難しそうだ  
にやー

でもさ、こんな時くらいは楽しもうぜ」

九頭竜さんの差し出された手を自然ととって、残りの道を進んで  
いった

六花 side out

同時刻

昴 side

「ほつつあああ!?!」

「ほつつあつて昴くんお化け屋敷苦手なんですか?」

「驚かされるのが嫌なんだよな

暗い道を歩くだけなら良いんだけどよ…小恋はこういうの平気なのか？」

「あたしはホラー映画とかお化け屋敷とか大好きですので、すごく楽しいです」

「意外だな…」

くそー！変な声上げて驚いてるオレってばかっこわりー

『怖いなら手を繋ぐか？』みたいなこと言いたかったのに！！

驚かされる度にビクツとする情けない姿を晒しつつもゴールまでたどり着くと、先に入った二人の姿が見当たらない

「昂くん、九頭竜くんからLINEが来ています」

そう言われてスマホを確認してみるとこう書かれていた

『オレと六花ちゃんは先に色々回ってくるから、お互い二人で楽しむぜ☆』

楽しもうぜ☆じゃねえよくそつたれ！！

ていうかあいつ大雅と付き合っただのか!?

「ど、どうしましょう」

「オレらも色々回っているうちに合流出来ると思うし、こまめに連絡しながら色々見て回ろうぜ」

「そうですね」

これは大雅がくれた千載一遇のチャンスなのか？そうに違いない  
決めたぜ！やっぱり今日中に告白してみせる！

昼飯を食べたり、ちよつとしたアトラクションに乗ったり、店を回っているうちに辺りも暗くなりパレードが始まった

その時には自然と手を繋げていて、正直今の関係のままでも良いと思っただのだが、あいつの『絶対に失敗するから』という言葉を思い出して決意を固めた

「あのさー！」

「どうかしましたか？」

「オレ小恋のことが好きだ、もしよければオレと付き合っしてほしい」

「打ち上げられた花火の音で小恋の声が聞こえなかったけど、小恋の表情と離された手で答えはすぐに理解できた」

「そうだよな……ごめん、こんな時にこんなこと言って」

やべえよ泣きそうだよ、誰か助けてくれよ

「でも昴さんの良いところもあたしは沢山知っていますから……」

格好悪いのはわかってはいるけど、その場の空気に耐えることが出来ずにオレは小恋の前から逃げ出した

「昴!!」

50mほど離れたところで誰かに肩をおさえられて振り返った

「大雅か……」

「ああ、悪いと思ってたけど少し離れたところから見ただけ、小恋ちゃんのところには六花ちゃんが行ってくれてるよ」

「ダメだったよ、いけると思ったんだけどな」

「お前にしては頑張ったほうじゃんか」

1度失敗したからって逃げ出すなよ、それを乗り越えてまた挑戦すりゃ良いだろ？」

「1度フラれてる相手にもう一度告白しても良いのか？」

「オレはあり得ねえけど、知り合いに何人か付き合えた奴もいるぞ」

励まされた訳でもなく、勇気付けられた訳でもないのに、話せたことで少しだけスッキリした

その日の夜は隣からノックの音も聞こえてくることはなかった

## 踏み出す勇氣

告白してから数日過ぎたけど、なんもやる気しねえ

大雅も気を使ってってくれるのか合コン組んでくれるけど、やっぱり簡単に気持ちは変えられねえのかな

『ピンポーン』

あいつの言う通り無理だったんだよな、きつと腹抱えて笑ってるんだろうなー……

『ピンポン』『ピンポン』『ピンポーン』

なんかムシヤクシヤしてきたな…

チャイムが鳴っても出る気がしなかったはずなのに、今回はどこにも発散できなかつた怒りをぶつけてやるつもりでドアを開けた

「うるせーなこの野郎!!」

「やつと出てきた」

長い髪をうしろで束ねていたせいか、一瞬誰か分からなかったけど、その笑顔だけは忘れなかつた

「やあやあ先走り少年、ご機嫌麗しゆう」

「何の用だよ」

「ごこじやなんだし、入らせて」

断る間もなく隙間を縫うように部屋に入り込まれた

「汚いね……カビでも生えてくるんじゃないの?」

「勝手に入ってきていきなり文句かよ!」

「あたしの部屋の穴からあまりよろしくない臭いが来てるの、つまりどういうことかわかるよね?」

そりゃ…ほとんど換気もしてないし、外にも出てないし、掃除もあの日以来してないな

「掃除して」

「今そんな気分じゃねーんだよ」

「今やらないって言う人は必ず後になっても終わらない

告白失敗してウジウジしてこんな感じに腐るなら、告白なんてしなきゃ良かったのに」

「しょうがねえだろ！理屈じゃないんだよ！

あの雰囲気でないらいいけると思ったんだ

それに、お前の思い通りに動くのは嫌だったんだよ」

「人のせいにするのは格好悪いよ

そもそも、西城さんについてどれくらい知ってるの？

誕生日、好きなもの、好きな音楽、苦手なものでもいくつか知ってる？」

言われてみればホラー系が好きということ以外は全然知らないけど

「そんなのこれから知っていけば良いだけだろ」

「目の前の事しか考えていない六道さんにそんな器用な事が出来る？

まだ言いたいこと沢山あるけど、あたしも手伝うから掃除しよ、ここじゃまともに呼吸もしたくないし、あたしの部屋まで臭くなる」

昼頃から夜にかけて掃除を進めていった

「よくもまあ数日でここまで汚したものだね」

「明日にでも掃除しようと思ってるし」

「あーそうですか

とりあえずお腹すいた、ご飯行きましょ

当然六道さんのおごりで」

「なんでそうなるんだよ！」

「だってここまでして、何にもありませんっておかしいでしょ？」

断れない……財布のなかを確認してもテーマパーク用に服を新しくしたり財布を新調したり、普段行かない美容院へ行ったりで今月はかなり厳しい

「マックで良いか？」

「は？」

「今月ピンチなんだよ……」

「この埋め合わせは必ずするーって言ったくせに何にもないのに、お金も無いと」

すごく残念そうなため息をつかれて少しだけ時間が過ぎた

「わかった、今日はあたしが出すからご飯行くよ」

「前みたいに作りや良いだろ？」

「こんな時間からそんな面倒なことしたくないの」

ちよつと待つててと言われてあいつは自分の部屋に帰り、暫くすると服に『燃料はナマ』とプリントされたTシャツに着替え、髪を下ろして戻つてきた

「お前ももう少しまともな服着ろよ」

「六道さんと出掛ける為だけにこれ以上何を着ろと？」

あー……やっぱりこいつは無理だ

そう思いながらも奢つてくれるからと付いて行つた店は、洒落た感じの個室のあるレストランだった

「高そうだけど大丈夫か？」

「ファミレスであたしと二人きりなところ誰かに見られても良いの？」

それは困るのだけど、メニューを見てもどれを頼んで良いのか分からない

あいつはメニュー見てオレを見ようとはしないし……

同じものにすれば良いか

注目する前に同じのどと伝えたのに、注目している時は別のものを頼まれていた

「なんで同じのにしねーんだよ」

「遠慮してるのか緊張してるのか分からないけど

そのどちらかだつてことはあたしにだつて分かるから」

嫌味な奴だなと思ひながらも出されたものをどんどんと口にしていく

よくよく考えればここ数日まともなもの食べてなかつたな

「それで？なんであたしが失敗するつて忠告したのに告白なんてしたの？」

「だから、雰囲気飲まれてここしかないつて思つたからだよ」

「雰囲気……ねえ……」

「だつてLINEだつて沢山してるし、笑い合えることも増えたし、パレードの時は手も繋げてたし」



「それなら六道さんの家に入ったり、一緒に寝たり、覗かれたり、ご飯一緒に食べたり：タオル越しだけどキスマでしたあたしは六道さんの彼女ですか？」

「そ、それは違うだろ！」

「そう、違うね」

だから今回のことも西城さんからしてみたら違う事なんだよ

あの後西城さんと色々と話したけど、六道さんに好意を持たれていたことに関して嫌ではなかったみたいだよ

「じゃあなんで断られるんだよ」

「ここからはあたしの憶測だけど、時間じゃないかな」

「時間？」

「パレード前までであった壁をやつと壊したところで六道さんが焦りすぎたってこと」

「だってよお……」

「まあ良い情報をあげるのであれば、西城さんは六道さんのこと嫌ってはいないですよ」

「本当に!？」

「直接話をしたしね、夏祭りでも誘って焦りすぎたこと謝りなよ」  
「また付いてきてくれたりとかは？」

「あり得ないですね、テーマパークでの人混みでも嫌なのにお祭りとか行く人みんな死ねば良いのに」

「ひどくね？」

「まああたしから言いたいのはそれくらい」

いつまでも腐ってるのは六道さんらしくないよ」

こいつなんか元氣付けられるなんてな……

「ありがとな、オレががんばるわ！」

「それと貸しが2つね」

なん……だと……!？」

やっぱりオレこいつ嫌いだ

## 夏の思い出くらい楽しくって良いじゃないか ①

スマホをテーブルの上に置いてじっと見つめること数時間

あいつには誘うべきだと背中を押されたけど

本当にあいつの言ったことが本当だったのかと、今更ながら疑ってしまう

壁を叩いて少しするとあいつは穴から顔を出した

「なに？」

「本当に誘って良いのかな、ストーカー扱いされたりとか、キモがられたりとかしないかな」

「女々しいこと言っていないで、それすら誘えなかったらテーマパークで出来た溝が一生埋まらなくなるよっ！」

「わかってるんだけどさ、なんて誘えば良いか一緒に考えてくれないか？」

「そんなの夏祭りは2日あるんだから、お互いに予定合わせれば良いでしょ？」

あたし今忙しいんだからそんなどうでも良いことで呼ばないで「そこをなんとか……」

凄く嫌そうな顔をしながらも穴からオレの部屋に完全に移動してきて、オレのスマホを手に取った

「とりあえず文章は考えるから、良ければ送信して」

「お、おう」

それからすぐにオレへとスマホが返ってきて画面を確認するとc a l l と出ている

「考えて行動するタイプじゃないのに頭で考えようとしないうこと、それじゃあね」

何かをオレが言う前にあいつは穴へと逃げて行って、それとほとんど同時に小恋が電話に出た

『す、昴くん？』

「お、おう……久しぶり……」

『うん、久しぶりです』

「えつと……んと……まつり……」

『え？なんですか？』

1度深呼吸をして気合いを入れ直した

「夏祭り一緒に行かないか!？」

『えつと……』

「と、当然二人じゃなくて前みたいに御昴とか、大雅誘ってみんなでな  
んだけど、嫌か？」

『嫌ではないですけど、あたし何かが一緒に行つてよろしいのでしよ  
うか』

「逆に来てほしいから誘ってるんだよ、今みたいにギスギスしたの苦  
手だからさ、オレが自分勝手なこと言ってるのは十分分かってるけ  
ど、小恋も一緒に来てほしいんだ」

『分かりました、また日時が決まり次第LINE下さい、待ってます』

電話が切れた瞬間まるでゴールが決まったサッカー選手並みの  
ガッツポーズをしていたのだが、痛いほどの視線に気付いてその気配  
の方向、つまり穴の方へと目を向けると、頬杖を付いてジト目をして  
いるあいつがいた

「あたしは行かないからね」

「そこを何とかお願いします!!」

「行・き・ま・せ・ん！」

それに、九頭竜さんも夏休み後半は旅行だつて言つてたでしょ？」

忘れてた!!あいつはボンボンだったんだ!

始業式ギリギリに別荘から帰つてくるとか言つてたっけな……

一応と思い電話を試してみても一言で断られた

「お願いだ！お前しか頼れる人がいねえんだよ

人助けだと思つて一緒に来て下さい」

穴に半身突っ込みながら全力でそう訴え続けること一時間、オレの  
顔面はあいつに叩かれ、蹴られ続けて見事に腫れ上がった

「ぼ、ぼでがいびまぶ（お、お願いします）」

「分かったから、もう……」

やつと折れてくれたところで力尽きた

小恋には大雅は来れなくなったことは伝えた

一応あいつもいるからデートではないよな？デートではないな、うん

安心してゐるのかガツカリしてゐるのか分からないな

「相変わらずはやいじやん」

私服で来たのはあいつだった

「お前な、浴衣で行こうって言っただろ？」

オレだって甚平来てきたのによ」

「あたしはその連絡に了承してないし」

「だからってなあ」

それからすぐにカランカランと音をたてて浴衣を着た小恋もやってきた

## 夏の思い出くらい楽しくって良いじゃないか ②

「あれ？御昴さん私服ですか？」

「面倒だしねー、それじゃ後は若い二人で楽しんで」

まだどこも回ってないというのに帰ろうとするあいつの肩をおさえたのだが、それと同時に小恋もあいつの手をとっていた

「まあ少しくらい良いだろ？折角来たんだしさ」

「そ、そうですね、御昴さんも一緒に楽しみましょうよ」

凄く嫌そうな顔はよく見ているからかすぐに分かったが、この顔を  
するときは大体折れてくれる

その予想は簡単に当たり少しだけ時間を割いてくれた

ここまでは良かった

そう本当にここまでは……

今のオレの状態は、右にあいつと左に小恋

しかも人混みではぐれないようにと、二人ともオレの甚平の袖を掴んで  
いる

他の人から見たら女の子二人連れて歩いているようにしか見えて  
いないだろう

たこ焼きを買うにもりんご飴を買うにも屋台のオヤジにはこう言  
われる

『可愛い子二人も連れてく憎いな兄ちゃん』

二人分買ってくれりやーっサービスしてやるぞ？』

はつきり言って財布がピンチのオレにはキツすぎる

ズボンに入れておいたスマホのバイブに気付いて確認すると、あ  
い  
つからLINEが来ていた

『右の甚平の袖にいくらか入れておいたから、恥ずかしい姿は見せな  
いように』

あくまで貸しだから、必ず返して』

いくら入れてくれたのか確認しようと手で探ろうとしたとき、あ  
い  
つは離れた

「あたしは先に帰るから、西城さんと六道さんは花火も見なよ

それと六道さんはすっかり西城さんを家まで送ること」

今度は引き止める間もなく人混みの中へと消えていった

「本当に行つちまったな」

「ですね」

「オレらはどうする?」

帰るって言うならしようがねえよな

「もう少しだけ、昴くんと一緒にいたいです」

心臓が飛び出たと思ったほどビツクリした

「なら花火見るための場所とつとくか」

少し暗くても小恋の頬が赤くなっているのは分かった

ああ、やっぱりオレは小恋のこと好きだ

こういう表情1つだけで見入ってしまう

「えっと、どこかオススメの場所とかないかな」

「それでしたら、妹と来たときに見つけた場所があります」

小恋に先導され、その横をゆっくりと歩いた先は、祭の会場とは少し離れているのだが、人もいない静かな場所

到着して少しすると花火が辺りを照らし出した

「本当に穴場だな、良かったのか? オレなんか教えて」

「昴くんだからです」

小恋の方から手を繋がれて緊張が全身を縛り付けた

「昴くん、あの時の告白は凄く嬉しかったです」

「うん……」

「でもまだお互い話したり遊んだり全然してないので、もう少しだけあたしに時間をくれませんか?」

「時間を……?」

「はい、頭の中をちゃんと整理して、心の中も整理出来たら、あたしから告白をさせてください」

思わず自分をぶん殴りたくなった

夢かと思えた

夢だしたら目覚めたくない、その気持ちで自分を抑えつけた

「えっと、それまで昴くんに待っていてほしいとかそういうのじやな

いです

御昴さんとか凄く可愛いですし、もしも昴くんの気持ちが変わって御昴さんにいっちゃっても文句なんて言いませんから」

「待つ!!」

いくらでも待つからさ、ちゃんと心の整理が出来たら教えてほしい」

「ありがとうございます」

その場での花火はほとんど印象に残っていなかった

ただ二人きりで手を繋いでいるこの時間がずっと続いてくれたら良いなと思った

あいつはオレの袖に封筒を入れていて中には高校生の持つ金額ではないほどの額が入っていた

帰りは小恋の家までタクシーで行って、その後は歩いて帰った

あいつの部屋の前に立ってチャイムを鳴らす

時間は23時過ぎなのに、あいつは普通に出てきた

「おかえり」

「タクシー代で5000円くらい使ったけど他は使ってねえから、魔が差す前に返すよ」

「そのままラブホにでも行くのかと思ったけど、なんとか理性を抑えたようだね」

封筒の中を見ながらそう言われたが今は特別気にしなかった

「今のオレは機嫌が良いからな♪」

その程度で怒るとかはしねえぞ」

「西城さんからある程度話は聞いたから分かってるよ、だけど西城さんも意地悪だよな、待っててもらおうことにしたって、六道さんはキープされてるだけじゃん」

「はっ」

「だってそうでしょう？まだそんな気はないのに待たせておくなんてねそれに待たされていたのに新しく好きな人が出来たら六道さんは捨てられるってことだよな」

「つぎけんな!!」

オレのことは何て言われても構わないが、小恋のことをどうこう言われたことに怒りを隠せず

襟首を掴んで玄関から引つ張り出した

「お前に小恋の何が分かるってんだ」

「何にも分かんないよ、だって他人だし」

「なら適当なこと言ってんじゃねーよ!いくらお前でも許さねえぞ」

「放してよ」

「まずは謝れよ」

舌打ちをされるだけでそれから一向に口を開こうとはしないでいる

「くそっ!」

結局オレから手を離すと、こいつは地面に座り込んだところで、やっと口が開いた

「あたしがいたら邪魔者になるでしょ

この壁を遮る柵や鏡はもう直すまで動かさない、あたし達の関係もこれで終わりにして、ただの隣人に戻ろうか」

「その方がオレにとってメリットしかねえよ」

ポンポンと服を叩いて立ち上がると微かな声で『バイバイ』とだけ伝えられてあいつは部屋に戻っていった

それから残りの夏休みは隣からは何もなく、当然LINEも来ないで過ぎていった



日常というものはほんの少しの事で非日常へと変わる  
①

「2学期も始まることですから、えー、一言挨拶します、えー、全校生徒の皆さんが大きな事故に合うこと無くですね、えー、再開できたことを喜びたいとね、思っています」

えー、生徒達は自分達がこの生徒だということを、えー……自覚して夏休みをね、えー…過ごしていたと思います

えー…」

校長の話なげえ!!!

思わず『えー』と言った回数を数えなくなるな

長い長い話を聞き終わり教室へ1番に戻るとあいつが机に突っ伏して眠っていた

「こいつめ、サボリやがったな……」

ボソツと言ったつもりだったのだが、すぐに目を覚まして、猫のように体をグツと伸ばし1度オレを確認したが、何も言わずに教室から出ていった

その後すぐに他のクラスメートも教室へと戻ってきた

「はあああ相変わらず校長の話っていうのは長いな  
ていうかさつき六花ちゃんとすれ違ったけど何かあったのか?」

「あいつと何かあるわけねえだろ」

「へえ、それにしてもあんな顔初めて見たけどな」

あいつがどうなるうがもう他人だ、オレには関係ねえ

「昴くんと九頭竜くん、おはようございます」

「お、おは→よ」

ビックリして発音おかしくなったああああ

「よっ」

「夏…祭り……ぶりだな」

なんだか直接話すのは照れる

「そう…ですね……」

あつ、夏祭り九頭竜くんも一緒に行けたら良かったのに」

「まあ来年は予定空けとくからよ、今年は悪かったな」

「いえ、怒ってるわけでは無いので謝らないで下さい

あれ？御昴さんは居ないのですか？」

「なーんで大雅も小恋もオレにあいつのこと聞くんだよ」

大雅と小恋は目を丸くしてお互い目で確認しあっていた

「六花ちゃんは何かしら昴と関わってるからだろうが」

「あたしもそう思います」

オレとあいつがお似合いとでも言いたいのかよ……

しかもよりにもよって小恋までそんなこと言うなんて

オレはその場に居たくない気持ち溢れ、二人を置いて教室から逃げ出した

★昴 side out

★大雅 side

「どうしたんでしょうか……」

あたし何か悪いこと言ってしまったのですか？」

小恋ちゃんと昴の關係に関しては昴から電話で二時間くらい聞いてるから、答えは分かっているんだけど

「腹でも痛くなつたんだろ、オレ六花ちゃん探してくるから、先生来たら適当に言い訳しといてくれよ」

答えを待たずに校内知っている限りの連中に六花ちゃんを見なかったか、どこへ向かったかをLINEで飛ばし、戻ってきた返事から場所を割り出して探し始めた

そして屋上へ出ると座って空を見上げている六花ちゃんを見つけた

「六ー花ちゃん」

「九頭竜さん……」

六花ちゃんは1度下を向いて再度顔を上げた時、無理矢理作ったような笑顔をオレに向けてきた

「面倒なことはサボろうと思っていたのに、流石九頭竜さん、バレ

「ちゃったならししようがないし教室に戻るよ」

横を通り過ぎようとした六花ちゃんの手をとった

「大丈夫、オレも面倒なことしない主義だから」

一緒に先生の話終わる頃までサボろうぜ」

「本当に良く見すぎだよ……」

オレから話しかけても態度が変わることの無かったのにな、これ結構弱ってる感じだな

回りくどいことは止めにして直接いくか

「昴から話は聞いたよ、六花ちゃんのお陰であの二人、結構良い感じになっただみたいじゃん」

「そうだね……」

「昴のやつバカだしよ、オレ達のお陰って事にして何か奢ってもらおうぜ」

六花ちゃんは首を横に振った事に対してオレの考えは確信に変わった

「だから言ったじゃん、あの時に『六花ちゃんはそれでいいのか』って」  
「あの時は六道さんのことなんて、玩具程度にしか思ってなかったから」

「それが何だかんだで世話してるうちに愛着がわいた感じか」

「そんなことまで話したんだ」

日常というものはほんの少しの事で非日常へと変わる  
②

六花ちゃんは壁に背中を預けて再び口を開いた

「九頭竜さんにはほとんどお見通しだと思っし、あたしから話すよ」

六花ちゃんから隣の部屋に住んでいること、穴を空けられたこと、

1日1回の命令があったことを聞いた時、正直驚いた

「六道さんが西城さんを気にかけているのは知ってた、ていうか分かりやす過ぎ」

「まああいつバカだからな……」

「あたしも最初は六道さんの背中を押してた

お互いがお互いを好きになる瞬間を見てみたかったから

だからあたしなりにもアドバイスはしたし、西城さんからも話は沢山聞いた」

「そこまでは六花ちゃんの手のひらの上って感じだな」

「お祭りに行った日より少し前くらいからかな、胸が痛くなつたの

六道さんが近くにいてくれると少し和らいだけど、二人が一緒にいる時は倒れそうなくらい痛くて痛くて、思わずその場から逃げた

その日の夜に六道さんが訪ねて来て、六道さんの嬉しそうな顔を見て『良かったね』って言うべきだったのに、あたしは思ってもいないことをどんどん口にした

頭では一生懸命止めてたのに口は動き続けて、止まった時にはもう全部が遅かったの」

「なるほどな」

「多分あたしは今六道さんを前にしてもいつも通り振る舞えない、仮面が被れない」

異性の恋愛の手伝いをしているうちにその異性のことが好きになるパターンか

聞いたのは初めてじゃねえけど通じるかどうか……

六花ちゃんの胸の中心を軽く押した

「まだ痛いかな？」

「話したことであつだけスッキリしたのか、今は何とも……」  
最後まで言い切る前に六花ちゃんをギュツと抱き締めた

「あとは全力で泣いて全部流し出しちゃえよ」

六花ちゃんの手がオレの前に来た

オレへの好意が少しも無い子相手だと絶対に失敗するからな、今回も無理かな？

「ダメだね、あたしって」

六花ちゃんの手はオレのワイシャツをしつかりと握つて肩を小さく震わせていた

声に出すことはないけど、涙をワイシャツ越しに感じた

「独り言だから聞き流してくれな

恋愛っていうのは争奪戦、戦いなんだよ

オレからしてみりやまだ付き合ってもいない二人を割いたところで、早々に決着をつけない方が悪いと思うな」

多分10分くらい静かに泣いていたと思う、六花ちゃんの手力は抜けていて、オレに寄りかかると同時に眠っている

そんな六花ちゃんを起ささないようにそつと抱き抱えて言った

「昴、いるんだろ」

屋上へと繋がる扉から昴は素直に出てきた

「六花ちゃんの気持ち、分かったか？」

「ああ」

「で？お前にとって聞きたくもなかった事だと思うけどよ、お前はどつうしたいんだ？」

「こいつとは、いつも通り話したりしたい」

「それはお前のワガママだ

簡単に考えろ、時間をかけて小恋ちゃんと付き合うか、すぐに六花ちゃんと付き合うか」

「オレは……」

昴はオレと六花ちゃんから目をそらした

「そっか、なら六花ちゃんはオレが貰うからな

お前の選んだ道だからオレからはなにも言うつもりは無かったけどよ、これだけは言わせてくれ

色恋絡みって簡単に日常が崩れるからな」

昴の横を通り過ぎて保健室へそのまま向かった

「九頭竜くんまたサボり？」

「まあ良いじゃん、今日は事情もあるからさ」

「変なことはいらないようにね」

六花ちゃんをベッドへ移動させてその隣に座る

やべえ、オレまで感情論であんなこと言うなんて

恋愛に慣れてねえ連中の三角関係とか厳しすぎるだろ

昴も昴だし小恋ちゃんも小恋ちゃんだ、好きなら付き合えば良いだろ

そのグダグダを近くで見せられてる六花ちゃんからしたら地獄だぞ、付き合えばその分諦めもつきやすいだろうし、オレもそのケアもしやすいのに

あれ？ていうかオレ昴に『六花ちゃんはオレが貰う』って言ったよな……更に関係を拗らせちゃったじゃん！

「九頭竜さん」

いつ目を覚ましていたのか分からないが、冷静を装った

「ん？」

「あたし六道さんを困らせたくないな」

「あらら、結構前から起きてたってことね」

返事もなくただ頷かれた

「六花ちゃんは自己犠牲なんてしなくて良いからさ」

昴の意見より自分の意思を尊重すべきだよ」

「不器用なんだよ、あたしも六道さんも

似ているからこそ少しずつ惹かれていったんだと思う」

「なら諦める？」

「うん、あたしの作った理想にあたしの入るスペースは元々設けていなかったから

だから今の気持ちは六道さんには言わない」

それに対して返す言葉はいくつか浮かんだけど、六花ちゃんの性格を考えると全て返される

それ以上に無理矢理にでも弱々しく笑って見せている六花ちゃん  
があまりにもいとおしく見え

気付いたら六花ちゃんの唇に自分の唇を重ねていた

日常というものはほんの少しの事で非日常へと変わる ③

「どういうつもり？」

「わ、悪い！変な意味はないんだ……」

ただ六花ちゃんが今まで見てきた女の子の中で一番に可愛く見えて……いや、これは言い訳だ

嫌だったよな、水買ってくるから」

立ち上がろうとしたとき、今度はオレが六花ちゃんに捕まった

「一人だとまた泣きそうだから側にいて」

予想外過ぎる答えに少し戸惑いっつも腰を下ろした

「ならぽっかりと空いた穴が埋まるまではずっと側にいてやるよ」

あれ？オレ告白みたいな事言ってるのか？

え？告白したことねえから分からねえぞ

「それは告白？」

ですよねー

「六花ちゃんがそう思ってくれてるのであれば」

「ずるいなあ、今あたしが断れるはずなのに」

「無理ならそれで良いからよ……」

オレの手の上に六花ちゃんの手が重なった

「友達として……だとしても九頭竜さんには甘えてしまうとと思う、だからあたしで良ければ九頭竜さんの彼女にして下さい」

「マジで？」

「んー……九頭竜さんはあたしの中で好きか嫌いの二択で考えると好きだし

九頭竜さんが言った通り少しずつお互いを分かり合えれば良いんじゃないかなって思うから」

なんだろう、告白ってこんなにドキドキするものだったのか

「ならば、まずはオレの事名前と呼んでみてよ」

「呼び捨ては苦手だからそれは良いよね、大雅さん」



「六花ちゃんああああん」

オレの考えでは2年目くらいに友達として名前で呼んでもらえる  
と思っていたから、嬉しさのあまりベッドに飛び込んだ

「ちよつと大雅さん!」

「ちよつとの間だけで良いからさ、ギューツてさせて」

「それは構わないけど、エッチなことはまだしないでね」

密着している腰を少しだけ浮かせた

「分かっている分かってる、オレ六花ちゃんの為に今の女関係を全部解  
消するから」

「これで六道さんは西城さんのことだけを見ていられるよね」

「また自己犠牲?」

「そうじゃない……なんて言い切れないかも」

「六花ちゃんがそう思わないようにするためにオレがいる

だから今はオレなんか時間を費やすって思っているかも知れ  
ねえけど、必ずオレで良かったと思わせるからさ」

「大雅さんがモテる理由がよく分かる」

「そうは言ってもオレから告白っぽいことするの初めてだからな」

「だろうね、何となくそんな感じしたもん」

オレも見透かされたのか、六花ちゃんもよく見ているじゃんか

それから二人で寝転がっている写真を撮って、昴に送りつけてやった  
『六花ちゃんはオレに任せておけ』それだけ文章をつけて

結局教室には戻らずに下校時間まで保健室で色々と話をしていた  
始業式ということもあって13時までしか学校にいれないという

ことが、今日初めて悔しく思えた

帰りは昴と小恋ちゃんも誘って四人で帰った

「それでは、あたしはこっちなので」

「おう、またな小恋」

「じゃーねー」

小恋ちゃんと帰り道が別れるとすぐに六花ちゃんの手を繋いだ

「なあ、六花ちゃんの家行っても良いか?」

それで夜は昴んち泊めてくれよ」

「あたしはいいけど、六道さんは？」

「オレも良いよ、穴のこと隠すのに必死で大雅のことそんなに誘えなかったからな」

「それでさ、本当にお前ら付き合ってたのか？」

「だからこうしてお手で繋いで帰ってんじやん」

「どうした？嫉妬か？」

「んなわけねえだろ！」

笑ってくれる六花ちゃんを見ると少しだけ安心するな

どうでも良い話をしながらアパートにたどり着くと本当に隣同士ということに少しだけ笑えた

「六道さん」

「んだよ」

「お祭りの日の夜はごめんなさい」

「い、いいよそんなのは、お前が謝るなんて気持ち悪いな」

「ううん、これだけは伝えておかないといけないことだから」

「まあオレの彼女だし許してやってくれよな」

「もう許してるっつーの」

「ていうかいつも通りじゃねえのはオレが嫌だからな」

「はい！そこまでー！！」

小恋ちゃんいるのに六花ちゃん口説こうとするなよ

そんじやーな昴、また後で」

昴は先に部屋に戻っていった六花ちゃんも『少しだけ片付けたい』

なんて言うこと無く、すぐに家に入れてくれた

「なんつーか、シンプルな部屋だな」

「別の言い方だと何にも無い部屋に聞こえるよ」

オレが今まで見てきた中で一番何にもねえ部屋だもん

「定番の卒アルとか見せてよ」

「無いよ？」

マジかよ……

「六花ちゃんは家にいるとき何してんの？」

「勉強？」

「なんで疑問系」

「なんだろうね、パソコンあってもスマホでなんでも出来ちゃうし、よく考えるとあたしって何にもしてないかも」

「会話がねえ……」

「出されたお茶を飲みながらただ静かに時間が流れた」

「なあ六花ちゃんはなんでオレと付き合ってくれてんの？」

「オレなら女の子の頼みは殆ど断らないことくらいわかるだろ？」

「なら都合よく使えば良かったんじゃないかな」

「大雅さんならどんなことを言っても受け入れてくれるとは思ってたよ」

「だったら尚更じゃん」

「昂と仲直りしたいとかなら喜んで手伝うのに」

「あたしが本当に大雅さんのことを好きになったら、それが絶対に罪悪感になるから」

「多分あたしはこのまま大雅さんのことを本当に好きになる」

「だからあたし自身が楽でありたい為だよ」

「でも結局は利用してるだけみたいだね、大雅さんが嫌ならこの関係を終わりにしても良いよ」

「やべえ」

「ん？」

「抱き締めたい」

「……………」

「口に出てた!!」

「それこそ遠慮しなくても良いのに」

日常というものはほんの少しの事で非日常へと変わる  
④

遠慮いらない……!?

待て待て、クールだクールになれ、ここで流されるようなのはオレじゃない

「オレが抱き締めたいって思うより強く六花ちゃんがオレに抱き締めてほしいって思わせてやるよ」

「大雅さんなら知っているとと思うけど、あたしは結構面倒で難しいよ」「なめんたって、オレだぜ?」

六花ちゃんはクスクスと笑って立ち上がり、オレの隣に座った

「あたしは誰とも付き合ったこと無いから、『恋人同士』が何をするのかなんて、漫画や小説でしか分からないの

だから大雅さんが教えてよ」

これは天然なのか?それとも狙っているのか!?

どっちにしても恐ろしいな、上目遣いで『教えて』なんて言われたら……

おつといかん、オレのペースが崩される

「あれ?でも六花ちゃん好きな人いたんだろ?」

「いるけど、それは絶対に叶えちゃダメだから」

「そいつは六花ちゃんが諦めるほどの子と付き合ってるのか……その子は女神か!!」

「さあ、どうだろうね」

六花ちゃんと昴が話している時も思ってたけど、やっぱりこういう風に笑ってる顔はなんだかそそられる

御昴 六花という人形ひとがたの謎を知りたくなる

まあ素直に教えてって言って教えてくれるはずないだろうけどなけど、全部知った上で全部包み込んでやるよ

そう意気込んで触れそうで触れられていなかった手を重ねて、そつ

と目を閉じて顔を近付けた

『ピンポーン』

「なんだよ、こんな時に……なあ六花ちゃ………」

思わず恐怖を感じるような冷たい目をしている

「も、もしかして嫌だったか?」

すぐに六花ちゃんはいつも通りの顔つきに変わって大丈夫だと返事をくれたのだが、インターフォンはまた同じように同じリズムで鳴った

「ごめんね大雅さん」

六花ちゃんはハンドバッグを持って玄関へと向かい、オレは素直に部屋に留まった

あんな冷たい目をする時あるんだな……正直ビビったわ

オレに向けられてたらどうしようかと思っただぞ

「……」

「……」

意外と長く話してるのが気になるけどこれ以上プライベートに踏み込むのもダメだよな

少しすると何か倒れるような音が聞こえて急いで玄関へと向かうと、倒れている六花ちゃんがすぐに目に入った

「六花ちゃん!!」

手でおさえていても、白い頬が赤くなっているのはすぐに分かり外へ目を向けた

「あなたは?」

「六花ちゃんの彼氏だ、そういうお前らは誰だよ」

多分30代前半くらいの女と40前後くらいの男を睨み付けた

「あらあら、流石私の娘ね、家から逃げ出したと思えば昼間っから男を連れ込んでるなんて

初めましてイケメンの彼氏さん、六花の母です

それとこの人が……今の私の旦那

これは家族間の話だから帰ってもらえるかしら」

「家族間の話だと？」

数分でいきなり娘をぶん殴るのが話なのかよ!!」

「これは躰なの」

「そうだぞ、躰は大事なんだ

それくらい坊主にでも分かるよなあ？」

男の手が近付いて来るのがスローモーションで分かった

確実に避けられると思ったのに、実際体は思うように動くことが出来ない

「やめて!!」

オレと男の間に六花ちゃんはすぐに入ってきた

「大雅さんに手を出すなら、あたしはあなた達を絶対に許さない」

「本っ当にその目は気に入らないわね、前の旦那そっくりよ」

六花ちゃんは何も言い返すこと無くハンドバッグから封筒を取り出して地面に落とすと、母親らしき人はそれをすぐに広い中を確認してクスリと笑った

「悪いわね六花、お店の売上げが上がったら必ず返すから」

「また来るかも知れねえからそんな時は頼むわ」

それだけ言い残して二人はいなくなつた

「ごめんね、変なところ見せちゃつて」

「んなことより、早く頬冷やせよ

こっちは女の子用に持つてるハンカチだから綺麗だぞ」

水で濡らしたハンカチを六花ちゃんに渡すと、いつも通りに笑つてくれた

「ありがと」

## 学園祭

あの日初めて六花ちゃんの家に行ったとき、オレは逃げた  
それだけは曲がることのない事実だ

次の日からも普通に接してくれているし、オレも普通にしてる  
いや、普通を装っているのかもしれない

「大雅さん？」

「ごめんな、少しブーツとしてた」

「らしくねえな、前に泊まりに来たときから少し様子が変わじゃね？」

「大雅くん具合悪いのですか？」

「小恋ちゃんも心配してくれるなんて、本当に具合悪くなっちゃおうかな」

「そんなこと言ったら六花ちゃんが怒っちゃいますよ」

「六花ちゃんに心配かけちゃうとダメだし」

「オレもいい加減自分を取り戻すかなー」

お昼に四人で笑い話をするのもいつも通りなのだが、六花ちゃんからあの日の事を話すことはなかった

「よし、文化祭出し物決めるぞ

決まるまで帰れねえからな、早めに決めろよ、以上！」

そんな季節か……、デートもろくにしていないう学園祭デートっていうのも良いのかもな

六花ちゃんの趣味もまだ知らねえのはちよつと遅すぎなのかな、あの時から踏み込むのが怖いつて思ってるのか？

オレが六花ちゃんを想う気持ちは多分今誰にも負けてる気がしないけど、六花ちゃんはオレの事を今でもちゃんと好きでいてくれるのかも気になる

まだ1度も六花ちゃんから「好きだよ」と聞いたことがない

色々と考えているうちに何をやるかが決まったらしい

「それじゃあメイド喫茶で決定ということ、メニューはどうする？」

「行ったことねえから知らねえよ」

「行ったことあるやついねーの?」

仮に誰か行ったことがあったとしても、誰も言えねえだろ

「所詮文化祭だし、適当な飲み物とケーキでも出せば良いだろ」

グダグダ過ぎたところで思わず口出ししたが、ウケは良かった

「ケーキなら一時間くらいで簡単に出来るのもあるから良いかもね」

「時間かかるのは限定とかにすれば良いんじゃない?」

「服とかはネットとかでまとめて買えば良いだろうしな、よし決まりだ」

オレは昴達とは帰らずに六花ちゃんと帰った

「なあ六花ちゃん」

「ん?」

「六花ちゃんはさ、オレの……」

「オレの?」

「オレのどこが良くて付き合ってるの?」

前にも同じようなこと聞いてるけどさ、後々好きになるからってよく分からねえんだよな」

よし言えた

「大雅さんカッコいいじゃん、それだけで理由にならない?」

「確かにオレはイケメンだしスポーツ万能で非の打ち所がないけど、六花ちゃんはそんなところ見てないだろ?」

「六道さんを忘れる為」

何も言えなかった

そんな答えは望んでいなかったから

「嘘だよ、嘘」

そんな顔をしないで、大雅さんはあたしの殻が割れて中が全部見えても絶対に否定しない人だっと思って思ったからだよ、実際にあんな親を見てもいつも通り接してくれてるじゃん

だからね、気を使ってくれてるのはわかっているけど、そういう優しいところ…あたしは好きだよ」



路上なのに六花ちゃんを強く抱き締めてしまった

少しだけ漏れてきた声で力が入りすぎていることに気付いたけど、  
緩めることが出来ない

六花ちゃんの言葉一つ一つで一喜一憂されている今の顔を見られ  
たくないという意味もあった

★大雅 side out

文化祭前って何だか付き合う奴が多い気がするけど、  
やっぱり気のせいじゃない

★昴side

大雅とあいつはどんどん帰りやがって、ていうか大雅のやつ友情より彼女を選ぶんだな

……いや、大雅なら普通か

寧ろ友情を選んだら本当におかしいからな

「あれ？大雅くと六花ちゃんは先に帰っちゃったのですか？」

「そうらしい、まああいつら付き合ってるんだし、オレがどうこう言うことも無いと思うんだけどよ」

「そうですか、六花ちゃん調理実習でも料理上手ですから、文化祭で出すケーキとかのお話をしたかったのですが」

「明日にでも話せば良いっしょ、オレらも帰ろうぜ」

って……二人で帰るのか!?

いくら返事待ちだっても凶々しいか？

「そうですね、あたし達も帰りましょう」

まさかまさかのオーケーいただきました！

帰る途中でどこかに寄るなんてことはしないのだけど、文化祭・メイド喫茶という話の種があるお陰で話題も途切れること無く、楽しく帰ることが出来た

だがしかし！オレはあの二人が居ない今がチャンスなのではないかと思う

聞くしかない、行け行けGOGO！

ミサイル全弾発射せよー！

「あのさ……」

「はい」

「そろそろ返事を聞かせてほしいなーって思うんだけど」

「そ、そうですね、昴くんカッコいいですから、あたしなんか時間に

をそんなに使っていられませんよね」

「ヤバイぞ！ミサイルが全弾オレの方に返ってくるのが分かる!!  
策を読み違えたと言っても言うのか!?!ちつくしよー」

「あたしは怖かったのかもしれない」

「へ？」

「あたしと付き合っても昴くんは六花ちゃんの方にいってしまいそうで」

「オレがあいつの方に？」

「無い無いと必死に否定をしたけど、小恋はフルフルと首を振った  
「女の子って気になる人のことはよく見てしまうんですよ」

「気になるって……オレのこと？」

小恋は耳まで真っ赤にして顔をおさえた

「あたし男の人とこんなに楽しく話をするのも昴くんが初めてです  
し、告白される前からずっと意識しちゃってました」

「ミサイルがまた方向を変えて小恋に飛んで行く」

「ってことは……つまり……？」

「あたしってズルいんです、少し時間をおいても昴くんが六花ちゃん  
の所にいかないことが分かるまで動けなかったんです

「もしも昴くんが六花ちゃんの方を向いちゃったとしても、友達とし  
てでもこの距離にいたかったんです」

「オレはあいつなんて眼中に無い！」

「少しズルくたってかまわない、オレは小恋の本当の気持ちが見きた  
い」

「なら、ズルいあたしのワガママ聞いてくれますか？」

「おう、何でも聞いてやんよ」

「あの時の告白をもう一度してください、そうしたらあたしはちゃんと  
と答えを出します」

「言えると思った1秒後急に恥ずかしくなったな、何て言ったっけ  
……えーっつと……」

「よし、言うぞ」

「はい」

「オレは小恋が好きだ」

「あたしも昂くんが大好きです」

もうミサイルなんてどうでも良い、どっか行ってしまえ

「やつと言えました」

「オレも何だか安心して倒れそう」

お互いの気持ち分かり合い、重なりあつた瞬間

オレ達は友達から彼氏彼女という恋人関係になつた

小恋と別れた後、家に帰り急いで大雅に電話をすると壁の穴の前にある棚を無理矢理どかさされて、大雅が顔を出した

「うるせーよアホ！死ね!!」

「死ねとか言っちゃいけませんって習わなかったのか！

ていうか聞いてくれよ、オレさあオレさあ……」

「小恋ちゃんと正式に付き合えたんか？」

「そーなんだよ、もう死ねって言われても良いくらい幸せだなあ」

「ハハ、大袈裟だな、でもまあおめでとさん」

「おう、お互いに頑張ろうぜ」

「オレは問題ねえけどさ、お前はゴム付けてしろよな」

「そっちの頑張ろうじゃねえよ!!死ね!!」

「おーい、特大ブーメランだぞそれ」

ゲラゲラ笑いながら大雅はあいつの部屋へとまた戻っていった

恋人同士なら家に入れても良いのかな？

いやいや、あいつらが早いだだけだ、オレはプラトニックにいくぞ！

そう思いつつも暫く頬が緩んでニヤニヤが治まるのにかかりの時間がかかった

メイド喫茶とは中に可愛い子がいるとは限らない

「なーんで小恋が接客なんだよー」

「しようがねえだろ、クラスで可愛い子をキャッチで使ってるけど、小恋ちゃんだと緊張して話しかけられないからよ」

「だからって……オレ以外にあんな笑顔を見せてる小恋を見ていたくねえよー」

「文句言ってるんなよ、オレだって六花ちゃんが変な男に捕まってないか心配してんだからな」

裏で仕込みをする野郎達

表で接客をする中堅クラスの女子達

外で接客をする上位クラスの女子達

このフォーメーションは中々良く、客足が途絶えること無く繁盛している

「お、おとおおお帰りなさいませ〜ご主人様」

「それにしても、小恋ちゃんの初な感じ可愛いな

何色にも染まりそうな感じとか滾ってくるわ」

「おまー小恋には手を出すなよ!!」

「出さねえよ、六花ちゃん一筋の今はな♪」

煮え切らない返事だな……

料理といってもオレですら簡単に出来るようなレシピで回転率もすこぶる良い

考案したのはあいつらしいけど

★昴side out

★六花side

んー、そろそろ時間かなつと

教室に戻り準備しておいた生地を取り出して作業に移す

「六花ちゃんの特別メニューか、今度オレにも作ってくれよな」

「大雅さんにならいつでも」

正直行ったり来たりで面倒だけど、みんなが楽しんでいる邪魔はし

たくない

これは作業や仕事と思い込んで進める

「すっげ……店で売ってるケーキみたいじゃね？」

「客に出すの勿体ねえよ」

「御昴のレシピも助かったけど、御昴自身もすごいのかな」

黙々と作業を進めたいのに周りにどんとんと人が集まる

「いい加減に……」

「はーい、六花ちゃんの邪魔はすんなよ

ほれ、散れ散れ」

大雅さんは本当に良く見ている、あのままならいい加減にして！って言っていたのに

言わせないように先に行動してくれてる、こういう何気無いことでも凄く嬉しいんだよ

「六花ちゃん？」

「ありがとね」

完成品は何かイベントやゲームをして勝てたらお金を払って食べられるというよく分からない結果になっていた

「大雅さん、あたしこれから自由時間だけど大雅さんの方はどう？」

「オレは1人戻ってくる奴がいるはずだからそいつと入れ替わりかな、戻ってきたら連絡するから先に少し回ってなよ」

「うん、それじゃ先に着替えてきちやうから」

「着替えないでそのままですよ、オレ六花ちゃんのメイド服姿はまだ全然堪能してないしや」

「んー……、分かった集客にもなるだろうし、このままでいるけど、流石に1人でこの格好は恥ずかしいから早めにね」

「分かった！今すぐオレも行くー！」

「仕事はしつかりと、ね」

先に教室から出て少しすると他校の生徒に話しかけられた

「ねえねえそこのメイドちゃん」

「はい？」

「ここに行きたいんだけどさあ」

地図を手元に出されても見えないはずがないじゃない

そう思いながらも近付いて地図を覗こうとするとカメラのシャッター音が確実に聞こえてきた

「なに撮ってるの?」

「おいおい、もっと上手く撮れよ下手くそだな」

「勝手に写真撮らないでよ、消して」

「えー、良いじゃん良いじゃん滅るもんじゃねえんだしよ」

「そうだそうだ、あんただってそんな服着て歩いてんだから写真撮られても良いって思ってたんだろ?」

「そんなわけないでしょ」

カメラを上を上げられてしまっただろう頑張っても届かない

「ほれ、消してほしけりや取ってみろよ」

ゲラゲラ笑う顔を殴り付けてやろうと思った

「そんなに怖い顔すんなよ」

「そうだ、オレらと遊んでくれたら消してやるよ」

「ふざけないで、君らと遊ぶなら全裸写真撮られた方がマシ」

「なんだと?」

「ならご希望通り全裸の写真撮ってやるよ!」

腕を掴まれた瞬間その男子生徒の腕を誰かが掴んだ

「何してんだよ」

「六道……:さん?」

「はあ!?てめえこそ何だよ!関係ねえだろ!」

「関係あんだよ、てめえらこそオレのクラスメートに変なことしようとしてんじゃないやねえよ」

「つーか、こんなところでこんなことして良いのか?」

「お前らは完全にアウェイだぜ?この学校の奴ら全員敵に回す気かよ」

他校の生徒はあたしからすぐに手を離してその場を去ろうとした

「待てよ、カメラ置いてけ、盗撮したんだろ?」

「そんなのこの女が勝手に勘違いしただけだろうが!」

オレらはそんなことしてねえ…よ?」

持っていたはずのカメラは大雅さんが既に取っていた

「へえ、こんな写真ばっかりなのに盗撮してないねえ  
ならこれ証拠に出るところまで出ようか?

なんなら金はオレが払ってやるからよ」

捨て台詞を吐いて彼らは逃げていった

「ありがと……」

まさか六道さんが来るとは思わなかった」

「オレも大雅より少し早く自由時間が出来ただけだ

小恋を待つついでだよ

ていうかお前は端から見りや可愛いんだから自覚しろよ、女のお前  
じゃどう足掻いても男二人になって敵わない事くらい分かるだろ」

「だからって何もしないなんて嫌」

「まあまあ六花ちゃんに何事も無かったんだし

それでいいじゃんか、な?」

それじゃ店見て回ろうぜ、オレ夏祭り一緒に行けなかったしさ」

半ば強引に六道さんと離された

「そういえば、あのカメラちゃんと処分した?」

「……」

「大雅さん?まさかと思うけど、大事に持っていたりとかしないよね?」

「だって六花ちゃんの写真とか1枚しかねえんだぜ?」

記念というか何て言うか欲しいじゃんよ」

1枚ってあの時の写真とつといてあるんだ……

「だったら写真部に頼んで一緒に撮ってもらおう?

どんな写真が撮られたかなんて分からないけど、それは必ず処分し  
て」

「本当に?」

「本当」

多分こんなにいるこんでいる大雅さんは初めて見たと思う

こういうところが六道さんに似ているから二人は友達でいられた  
んだ



カメラは踏んで叩いて壊されて見事に処分された

「そういえば、あいつらに他何にもされてない？」

「うん、特別何も」

「なら良かったんだけど、昴の方が先に駆けつけたのは許さねえ」

「焦ってるの？」

「そりゃ焦るだろ、だって六花ちゃんは昴のこと好きなのだし

昴も昴で六花ちゃんに告白された日には最大限に悩むと思うぞ」

「無いよ、そんなことは絶対に

あ！ほら写真部あるじゃん、撮ってもらおうよ」

そう、あり得てはいけない

あたしの中でまだ六道さんへの思いが消えない限り

数枚撮ってもらったところですぐにPCで確認してプリントしてもらった

「生徒手帳に挟んどこ〜つと」

「でもこの写真だとメイド喫茶に遊びに来た大雅さんみたいだよ」

「良いの良いの、記念は大事にしないとな」

「それじゃあたしも大切にする」

同じように生徒手帳の一番後ろに挟んだ

★六花 side out

★大雅 side

嬉死ぬ！オレ今日中に嬉死ぬかもしれない！！

本当はこれからもつというんなところ一緒に行きてえけど、六花ちゃん人の多いところ嫌いだしな

「ちよつとどこかでのんびりすつか」

「空き教室とかもあるだろうし、流石に疲れた」

やっぱりな〜

祭  
空き教室を取り敢えず見つけようとはしたけど、まあやっぱり文化

わ  
イチヤイチャしてるカップルがホテルの代わりに使用してるんだ

オレもイチヤイチャしてえのによお!!

「図書室にでも行って時間潰すか」

結局図書室でダラダラと時間を過ごす

六花ちゃんの家にいるときとさほど変わらないけど

オレはこの写真があれば何時間でも見つめていられる……つもり  
なんだけど、六花ちゃん本に夢中だし

なんだかそれは寂しいような気がしてしょうがない

「なあ六花ちゃん」

「なに?」

「キスしてもいい?」

「なんで?」

そのゲテモノを見るような目が堪らない!

でもオレはMじゃない!

「だってあの日以来キスしてないんだぜ?」

付き合って結構日が経つっていうのにさ」

それに何もないとこの関係も終わりそうな気がするからこそ繋ぎ  
止めておきたい

「また今度ね」

「また今度っていつ?」

「取り敢えず今じゃないよ」

他人に見せたいことじゃないし」

「見られてなければ良いんだ」

六花ちゃんはため息だけついてまた本に集中してしまった

嫌よ嫌よは結局嫌なんだから勘違いをするな

「六花ちゃんはなにをそんな真剣に読んでんの？」

「解体新書」

解体新書って普通の女子高生が読む本かよ!!

「べ、勉強熱心なんだな」

「そのまま知識として残るからね」

だとしても読まねえだろ、解体新書

「六花ちゃんは将来医者とかになりたいの？」

「どうなんでしょ、楽にある程度の暮らしが出来れば良いって思ってるから、働かないで投資して生活でも良いかな〜とか思ってるよ

大雅さんは？」

「オレ？」

まさか六花ちゃんにオレの事を聞かれるなんて思いもしなかったから焦った

「オレは……親父の会社を継ぐくらいしか考えてねえかな」

「ならお互いあまり将来のこととか考えてないんだ」

「まだ高1だしな」

会話が途切れてまた本に集中される

窓から吹く風で揺れる髪をただただ見つめる時間

「後夜祭って程じゃ無いらしいけど、キャンプファイアとかするみたいだからさ、六花ちゃんも行かない？」

「あたしが人混み嫌いなこと知ってるでしょ？」

「だけど一応七不思議的なもので、後夜祭で一緒に踊った二人は結ばれるとか聞いたことあるしさ」

「行かない」

「お願い、ちょっとだけでいいから」

「いや」

「先つちよだけだから、そしたらすぐ帰るから」

六花ちゃんは本を閉じて、風で乱れる髪を直しながらも笑顔で否定

された

笑っているようで圧力強いんですが……

「そもそも大雅さんはそうしないとあたしが離れていくと思っっているの?」

「そ、そういうことじゃねえけど」

「ならキャンプファイアとかで踊らなくても良いじゃん」

「六花ちゃんと少しでも長く一緒にいたいって思ったんだよ

あー！ー！もう!!オレこんなキャラじゃねえ!!

なら別に踊らなくても良いけど

ちよつとくらいイチャイチャしたい」

「図書室では静かにね」

周りの目なんて気にしない

「六花ちゃん、着替えてこよう

ほとんどの生徒が外にいるから教室もどこか空いてるだろうし」

「随分と急だね」

8割方断られることの覚悟をしたいたけど、六花ちゃんは了承してくれた

着替えも終わって教室に戻るとクラスメートの奴らは売り上げで盛り上がってる

「お、聞けよ大雅!オレんちクラスの売り上げが学校始まって以来1位みたいだぜ」

「1位ってすごくね!?

なにか良いもんくれんのかな」

「去年は食券とか配られたらしいですよ」

「聞いたかよ六花ちゃ……あれ?」

「六花ちゃんなら少しだけ笑ってどこか行っちゃいましたよ?」

なんてこった!やべえやべえ!!

……ここで帰られたなんて日にはもう学祭の思い出が最悪になる!

スマホを確認すると六花ちゃんからLINEが一件入っていた  
『あたしを見付けて』

分かるか!!

「悪い、打ち上げとかの話決まったら教えてくれ」

それだけクラスの奴らに伝えて今日一緒に回った所を走り回った  
以前のように情報を頼りにするのではなくオレ1人だけの力で

そして最後にたどり着いた屋上を開けると、屋上の金網の前に六花  
ちゃんは立ってキャンプファイアを見つめていた

「やっと思つけた」

「やっと思付けてくれたね

それにしてもこんなに汗だくになっちゃって」

ハンカチを頬にあてられて心の底から安心した

どうしたの?なんて聞かない

「キス……して良いよな」

「うん」

目を瞑って斜め上を向く六花ちゃんの唇を少し強引に奪った

走り回って息すら上がっている状態だったのに

「……ふはあ」

「足りねえ」

膝や腰の力が抜けて倒れそうになる六花ちゃんをささえながらも

口内を犯した

そしたまた口を離すと、オレの口と六花ちゃんの舌にどちらの唾液  
かわからない淫靡いんびなアーチが出来上がった

そつと手の力を抜くと六花ちゃんはペタンと座りこんだ

「アハハ、力抜けちゃった」

「オレもつと六花ちゃんを味わいたい」

返事を待たずにキスを繰り返し、思わず下半身へと手を伸ばした  
骨抜きするくらいのキスの反応だったのに、思ったより濡れてない

まあでもここまで乱れてればすぐに濡れるか

少し指に力を入れると反応は予想と全く違った

「痛っ……！」

「ごめん!!」

オレがビビって後ろに退いた

まさか処女だったとは思ってもいなかった

ていうか初めての子を相手にしたことなんて無い

「えつと……大丈夫か？」

「うん……」

すこし気持ちを落ち着かせて、今度は隣に座りただ手を繋いだ

「オレ焦ってたかもな、今まで女なんて可愛い子はエッチ出来りや良

いって考えてたけど

本当に好きな子にはそれなりのペースで向き合わなきゃな」

「らしくないね、あのまま処女卒業するかと思ってたのに」

「好きだから尚更簡単に出来ないんだよ」

初めての子を相手にしたことがないから、どうすればいいのか分か

らないなんて口が裂けても言えない

「でもなんか、凄く興奮した」

「オレの方がもっと興奮したぞ」

六花ちゃんの力が戻るまで屋上からキャンプファイアを見て学園

祭の終わりを迎えた

★大雅 side out

## 六花の好きな人

★昴side

「大雅」

「どうした親友」

「今って日曜日だよな」

「そうだぞ親友」

「ならどうしてオレの部屋にいるんだよ」

「オレは1分1秒と六花ちゃんから離れたくねえけど」

2週間に1度くらい必ず出掛けてんだよな」

「出掛けてるって、どこに？」

「さあな、踏み込んだじゃいけねえかもって思ってた聞いてないんだ」

「なるほどな」

といつてもオレも小恋となんの約束もしてねえし

ずっとマンが読んでるのも飽きる

「なあ、あいつの後つけてみないか？」

「はあ？知られたくねえことをこっそり知るなんてオレのポリシーに反する」

「でも気になるだろ？もしかしたら男とあつてるかも知れねえぞ」

「六花ちゃんに限ってそんなことあるはずが……」

煮え切らない返事を待つ

「直接聞いてみる」

大雅はそう言ってあいつの部屋へ向かってインターフォンを押し始めた

オレも何となく大雅に付いて行ったけど、大丈夫か？と思っているうちにあいつはすぐに部屋から出てきた

「大雅さんと六道さん？」

どうしたの？あたし今日は用事があるって言ったよな？」

普段化粧なんてしてないだろうからすぐに分かった

こいつは今日化粧をしてる!!大雅も気付いてるはずだ!!言ってる!!  
れ!!

「なななな何で化粧なんてしてるんだ?」

「こんなに動揺してる大雅を初めて見たぞ

「そろそろ良いかな……」

「あいつもあいつで少し申し訳なきそうな顔をしている

「うん、二人とも付いてきなよ

「あたしが隔週日曜日にどこに行ってるのか気になるんでしょ?」

大雅の答えは当然決まっていた

「ていうか大雅はともかく、オレも良いのか?」

「良いって言うてるでしょ」

適当に準備を済ませてあいつの後を付いていく

電車で一時間半くらい離れた街へ

途中で花を買って包んでもらっている最中に大雅は耐えきれなくなっただのか聞いた

「なあ六花ちゃん、誰に会うか教えてくれよ」

「あたしの好きな人」

「オレじゃねえのかよ!!」

ケラケラ笑いながらまたオレらの先を進んで行く

暫く歩いているうちにオレですらどこに向かっているのか、雰囲気  
で分かった

「墓?」

「あいつは誰かの墓の前に立って花を入れ替え始めた

「もしかして六花ちゃんの好きな人ってもう……」

目を閉じて静かに手を合わせその返事には少し時間がかかった

「一條 神(いちじょう じん)さんっていうの

「お調子者で明るくて、それでもクラスの人気者だったんだよ」

「そっか」

静かに立ち上がるとあいつはオレと大雅の手を握った

「神さん、あたし好きな人が出来ました」



今日は報告も兼ねて一緒に来ました

神さんから話し方が硬いって言われていたのに、どうしてもこの場  
じゃ慣れませんね、許してください」

なんでオレの手まで握る必要があるんだよ……

離そうと思った途端、大雅が先に手を離して墓の前に立ち言い放つ  
た

「二條 神！オレが六花ちゃんの彼氏だ！

オレは絶対に六花ちゃんを悲しませないから安心しろ

それと、これを言うのは悪い気もするけど言わせてくれ、六花ちゃ  
んとオレを引き合わせてくれてありがとな」

「帰ろっか」

「ああ」

いつの間にか手は離れていて帰りの電車に乗った

「ごめんね、日曜日なのに付き合わせちゃって」

「良いつて、オレもオレの言いたいこと言えたしな

それより帰りの間に二條と六花ちゃんの話聞かせてくれよ」

「それオレも気になるな」

「まあうん、あんまり面白くはないけど話すよ」

★昴side out

六花の好きな人〜過去〜

「御昴 六花!!今度こそお前に勝って学年1位の座を奪ってやる!」

「別に順位なんて気にしていませんが?」

「オレが気にするんだよ!!」

一條 神と御昴 六花は学校のテストだけではなく、模試の結果でも首位をキープし続けていた

「んおおおおお!また負けただと!?!」

「今回は難しめでしたし、しょうがないじゃないんですか?」

というより、順位なんてただの数字、結果知識に繋がればそれで良いのですよ」

「難しいのは同じだろ!」

小学生の頃は運動も勉強も1番だったんだよ!

だから1番じゃないと嫌なんだ」

「なら運動では間違いなく1番じゃないですか」

おめでとうございました」

パチパチと適当な拍手をして六花はいつも通り本を読み始めた

「本の虫め〜」

六花はこの頃一部の生徒から本の虫と呼ばれていたが、それについては特別気にはしていなかった

「ただいま」

「こら六花、店の方から帰ってくるなって言っているだろ」

「barなんて夜しか開かないんだから別に良いでしょ」

それより投資についてもっと教えてよ」

「そんなことよりクラスの奴と遊んだりしろよ」

オレが中学の時は寝る間も惜しんで遊んでたんだぞ?」

「時代は変わるものだよ、お父さん」

「しょうがねえな、その代わり氷買ってきてくれよな」

そんじゃこっち来い、一緒に流れを読むぞ」

六花は呼ばれるがままに父親といくつものPCの画面を同時に見始めた

「いいか、考えるのも大事だがな……」

「これについては才能がモノを言う。でしょ？」

「そうだ、1分でも1秒でも早く誰よりも先を見るんだ」

ただ真剣に画面を見つめる六花にはほとんどその声は届いていない

父親は六花に簡単だからと投資をさせたことを後悔と喜びが入り交じった

「ねえお父さんは何してるの？」

「ああオレか？」

オレはこの案件に手を出すつもりだ」

「んんん……どういう感じ？」

「オレの古い知り合いの投資に乗る感じだけだな

上手くいけば1.5倍になるし、あいつはオレの何十倍も稼いでるから元金は返ってくる」

「なにそれ！ズルい!!」

「大人はズルくて汚いんだよ

そしてズルくて汚い大人が金持ちになるように出来てるんだ

六花は取り敢えず1000万貯めてみな

そしたらまた良いこと教えてやるからよ」

六花はある意味才能がある、何となく六花に投資した額50万が今では300万を越えている

それを分かっているからこそいっぺんに何でも教えるのではなく、順を追って確実な勉強をさせる

「そう膨れてもダメだぞ

だけどな、お前はオレの賢さとお母さんの綺麗さの2つを継いだ最強で自慢の子だ、六花なら必ず貯められる」

六花の頭をクシャクシャと撫でると猫のように目を細めている

「よし、それくらいにしておけ、追いかけてすぎるのは失敗する、脳を使  
いすぎるな」

「はーい、それじゃ氷買ってくるよ」

六花はbarから出るとすぐに神に会った

「御昂 六花!?なんで飲み屋から出てくんだよ!」

「関係ないでしょ」

「関係無くない」

その場を離れようとした六花の手を神は掴んだ

「待てよ」

「だからあたしがどこ出入りしてようとも神さんには関係ないですよ  
ね

手を離して下さい」

「御…いや、六花がこんなところから出てくるのを心配して悪いかよ」

「こんなところ?何も知らないのにそんな言い方しないで」

睨み付けて手を振り払った

「知らねえよ、六花のこと何にも知らねえ

だからもつとたくさん六花のこと知りてえし、オレのことも知って  
ほしい」

「それだけの為にクラスで浮いてるあたしに話しかけていたのですか  
?」

「オレは…:オレは六花…:お前に一目惚れしたんだよ!」

その長い髪も、本を読んだるときに見せる色んな表情も見ているう  
ちにどんどんと好きが大きくなった

だから勉強が出来る共通点で話しかけてたんだよ」

六花は目を点にしていた

「いやー、青春だね」

いつの間にか話を聞いていた父親がその一言を言った

「だ、だだだだ誰だー!!」

「六花の彼氏だ!」

六花の父親は見た目通り若く、年の離れた兄弟といっても信じられ

ることもある

「ず、随分と年の離れた彼氏さんで」

でもカツコいいとは神も思っている

「それでえ？お前は六花のなんなんだ？」

「いつかお前から六花を奪う男だ!!」

オレは1番になる！六花の中でも1番になってやるからな

神はそれだけ言ってその場から走り去った

「で？お父さんは何してるの？」

「いやあ、店の前で六花と誰か男の声が聞こえたからな

ちよつとからかってやった★ミ

それにしても告白ねえ」

はつきりと物事言える良い男なんじゃねえか？」

「くっだらないね」

六花もそれだけ言って買い物へと出掛けた

「後であるの小僧にはオレから誤解解いとくか…」

## 六花の好きな人へ過去へ

次の日は神から六花に話しかけることもなく放課後を迎えた

「ねえ、校門前にすっごいバイクが止まってるんだけど」

「本当だ、誰かの彼氏かな？」

六花も嫌な予感を感じながら外を見ると間違いない父親のバイクだと確信し、急いで校門前に向かって行った

「どういうつもり？」

「いやあ、昨日の小僧に用事があったな」

「小僧って、神さんのこと？」

「そいつ以外誰がいるんだよ……」

六花が気になりこつそり後を付いて来ていたのを父親はすぐに見つけた

「六花に告白したバカ野郎発見！」

人拐いの如く神を担いでバイクに乗せるとそのまま二人でどこかへ向かって走っていった

「何すんだよおい！」

「ああ!?!何だって?」

「止めろって!!」

「聞こえねえよー」

実際風を切る音で神の声が聞こえていたかどうかは不明だったが、散々六花の父親に連れ回され、辺りが薄暗くなる頃海に見える道路脇にバイクを止めた

「速度くらい守りやがれよ……」

「そんなんじや風を感じられねえだろ」

「そんなんじやいつか六花が悲しむぞ」

「あーそれはあるかもな、オレあいつの親父だし」

「親父……? 父親だと!?!」

「ああ悪かったな、あの時からかってよ」

動揺は全く隠すことが出来ずに、頭で無理矢理理解をしようとした

「つーか六花が他人とあんなに話をしてるの久し振りに見たな……少し他人行儀なところがあるけどな」

「オレは六花と対等になって、たくさん遊びにいつて

いつか結婚して……幸せな家庭を作りたいと思って……います」

「そこまで考えてんのかよ、中坊のくせに生意気だな」

タバコを啜えながらからかうように笑う

その笑い方は少しだけ六花に重なっていた

「まあ良いんじゃないのかな

さつきも言ったけど、六花がそこまで自分に踏み入れることを許してるんだ

オレが味方についてやるよ、ただ孫の顔を見るのはもっと後にさせておいてくれよ」

「そんなくらいの節度は持つてるわ!!」

その後、六花には内緒だぞということ、好きな食べ物や誕生日等も父親から神へと伝えられた

「ねえ御昴さん」

「はい?」

「神のことフツたつてマジな話?」

「あー……、それももう今日で何回目の質問なんだろ

本当にあなた達全員が全員くだらなくて呆れてくる」

「いい加減にしなよーこの本の虫!!」

「ちよつと顔貸しな」

強引に教室からトイレへ連れ込まれ十数人の生徒に六花は囲まれた

それから六花はモツプを当てられる、水をかけられる、怒鳴られるとされ、トイレ外にも噂を聞き付けた生徒が集まる程だった

「神はあんたがクラスで浮いてるから優しさで話しかけてやってんだよ、なのに何様のつもり!」

「だから必要無いって言ったでしょ、何度も言わせないですよ」

「本当に頭に来た、ねえ誰か男子呼んできてこいつ犯させちやおうよ、

それで動画撮ってさ」

「良いかもね、性格はともかく顔はマシだし」

賛成し始めた生徒達は本当に連携良く、数人で六花を抑えつけて服を脱がし、また数人が連絡をとり始めた

「何してんだよ!!!」

「あ、神くん

今本の虫をみんなで苛めてるんだ」

「はあ!？」

「なんかこれからもっと凄いことさせられるみたいだよ」

神が噂を聞いて向かった頃には既に女子生徒の壁が出来上がっていたが、話を聞いて女子トイレだろうが構わずに突っ込んで、すぐに六花の前にたどり着いた

「神!？」

「お前ら何してんだ」

「これは……神をフツた身の程知らずを少しこらしめてやろうと、ねえ」

「うん……神可哀想だし」

「オレは六花にフラれてねえ!変な思い違いしてんじやねえよ!!!」

女子生徒はビクついて六花と神から少し距離を置いた

「でもオツケーももらえてねえのは確かだけどな、ただこれと今のは話は違うし、オレはオレで何とか出来んだよ!

とつとと出ていけ!!!」

みんな出ていくと六花は静かに服を着たが、びしょびしょなのはどうしようもない

「あとでオレので良けりヤジャージ貸してやるよ」

「うん、ありがと」

何事も無かったような顔をしている六花に神は怒った

「お前も何されるがままにしてんだよ!」

「抵抗しても無駄なことくらい分かるでしょ」



「それでもオレは嫌なんだ！」

「1人で何でも出来るなんて思わないで誰かを頼ってくれよ」

「これからはその考えも持つておきますね」

「ペタペタと水を滴らせながら歩き始めた六花を後ろから抱き締め  
た

「この前の男が父親だつてことは本人から聞いた

だからと言つて今すぐ返事が欲しいつて訳じゃねえ

オレが六花に勝てたら、その時に返事を聞かせてほしい

それまでは友達として仲良くしたい」

「友達……ね

「友達は後ろから抱き締めたりしないと思いますけど

告白はともかく良いですよ、多分神さんなら飽きないと思います  
し」

## 六花の好きな人へ過去へ

少しの間六花に話しかけようとする生徒は更に減っていたが、神が必要以上に絡んできたお陰なのか、次第に六花の周りにも友達といえる存在が増え、半年も過ぎれば神を応援する人すらも出てきた

「いやあ、やつぱり男子がいると食卓も賑やかになるもんだな」

「何でまた神さんがいるんですか？」

「そりゃ、六花の手料理食べたいからに決まってるんだろ」

それに家においても親父もお袋もいねえだろうし、そうなるとう然オレの飯が無いしな」

神はよく六花の家で食事をご馳走になるほどまで、六花との距離を縮めていた

六花も『まあ良いかな』と思うほどで、神が家で食事をすることに嫌な気持ちなどは無くなっていた

「ごっそーさん！」

「はい、お粗末様でした」

「粗末なもんか、オレは六花の料理なら嫌いなトマトだって食べれるや」

「はいはい」

父親と神はよく一緒に話をする男友達のような関係になっていて、今日も二人で食後仲良く話をしていた

「おい六花」

「何？」

「ちよつと買い物頼まれてくれねえか」

「なら食器洗っておいてね」

父親のメモを受け取って外に出ると、神も一緒に外に出てきた  
「barはこの時間から始まるんだ」

帰ってきたら裏から入れよ、それと近場だけど小僧にも付いていってもらえ」

「買い物に向かう先は徒歩3分ほどで買うものもミネラルウォーターだけ」

「神さんは今日も泊まっていられるんですか?」

「もう遅いしそうさせてもらおうと思ってる」

「六花が迷惑じゃなければ……だけどな」

「今さらなんですか?迷惑に思っていますよ?」

「えっ!マジでか?」

「はい、あたしの周りにも人が集まるようにもされるし」

「当然のように家でご飯を食べていますし、あたしの心まで乱そうとされていますからね」

「神の少し前を歩いていた六花はそう言うかと振り返り、神に見せたこととの無い自然な顔で笑っていた」

「本当に迷惑ですから、はやくあたしにテストで勝ってくださいね」

「モヤモヤが解消されません」

「お、おうよ!任せとけて」

「それとき……これ、誕生日プレゼント受け取ってほしい」

「神はポケットからネックレスを取り出した」

「チエーンは綺麗なシルバーをしているが、付いているのがよく分からない何か」

「この銀の変なのは何ですか?」

「猫だよ!工作のときハンダゴテでこつそり作ってたんだ」

「本当はもつと良いもの買ってあげたかったんだけど、オレンち貧乏だからさ、高校生になったらバイトも出来るようになるから、六花が喜ぶようなものプレゼントするからな」

「んー……何で猫なんですか?」

「あたし別に猫が好きなんて言っていませんよ?」

「なんか六花って猫っぽいなって思ったからだよ」

「そうですね、と納得したかしていないか分からない様子の六花は一歩神に近付いた」

「それなら今はこれで満足しますね、付けて下さい」

少し戸惑いつつもネックレスを六花につけようとする、かなりの小声で六花は言った

「次の模試で結果を残してください」

待つの好きではないので」

「分かってるよ」

ネックレスを付け終わると六花はまた少し離れた

「なあ六花！」

「はい？」

「いい加減硬い話し方直してくれねえかな」

もつと六花とは対等でいたいんだよ」

「この話し方は癖ですからね、でもがんばってはみますね、神さんがあ  
たしを越えられる頃までには」

いつも通りの作り笑顔を振りまいて六花と神は買い物に戻った

## 六花の好きな人〜過去〜last

数ヶ月が過ぎて試験も近くなってきた頃

神と六花はよく一緒にいることから、周りの人からはもう付き合っているのかと勘違いさせるほどになっていた

「う〜…寒いな…」

「そうですねか？去年神さんマフラーしていたじゃないですか、何で今年はずけないのですか？」

マフラー・手袋を着用している六花は防寒対策していない神より遥かに暖かい格好をしている

「流石にヨボヨボだから捨てたよ」

六花は自分のマフラーを外して神に渡した

「これあたしの手作りですから、大事に使って」

「いや、流石に悪いだろ」

「中学最後の模試で風邪引いたからなんて言い訳聞きたくないですしそれに、このネックレスのお礼だと思ってください」

神がプレゼントしたネックレスをしっかりと付けてくれていたことに神は恥ずかしく思えた

「わかったからしまってください、今見ると下手くそ過ぎて恥ずかしい」  
クスクス笑いながら制服の中へネックレスをしまった

神は六花から渡されたマフラーを巻いて叫んだ

「絶対に勝つからな〜！！」

「五月蠅い」

模試の前でも二人で勉強し、理解しにくいところは六花の父親に聞いていた

そしてお互いがベストコンディションな状態で模試試験を迎えることが出来た

「よう、どうだったよ結果は」

「まあまあかな、いつも通りだよお父さん」

「オレはいつも以上に出来たぜお義父さん」

「誰がお義父さんだあ!？」

軽く絞められながらも、神はそれなりに自信があつたらしく笑顔が途切れることはなかった

「自己採点とかしねえのか？」

「あたしはしないかな」

「オレも基本しねえかな、やったところで点数変わるわけじゃねえし」

「それにあたしは自信もって回答してるから」

「オレだって今回は自信しかねえぞ」

「って！今日は親父もお袋も家にいるって言ってたな…」

今日はこのまま帰るわ、結果楽しみにしてろよ」

返事を聞かずに走り去って行った

「なあ六花、好きなら結果なんてどうでも良いじゃねえか」

「神さんが自分で決めたルールだからね」

「あたしがそれを破るわけにはいかないよ」

「硬い考えなこと、つーか小僧に話したのか？」

「オレが海外に行ってる間のこと」

「まだ」

六花の父親は勉強のために海外に行くことが決まっていた

アマチュアレベルでピアノも弾けるので、夜のショーとして出演する代わりにプロの技を見て盗んでくるということらしい

六花はその間に今いる場所を離れて母親のところへ行くか、祖父母のところに行くか、どちらを選ぶにしてもここから出て行って、この街から離れなければならない

「小僧は小僧なりに必死で六花を追いかけたんだからよ、大切に大事なことはしっかりとお前の口から伝えてやれよ」

六花はコクリと頷いた

模試の結果が返ってくる前日、六花と神は朝から職員室へ向かうように言われていた為、六花はいつもより早めに家を出た

六花自身自覚しているのか分からないでいたが、ワクワクしていたのだと思う

「お、御昴は早いな」

「神さんはまだのようですね」

「まあ一條も楽しみにしていたんだ、すぐに来るだろう」

「そうですね」

「それにしても御昴は変わったな」

「そうですね？」

「ああ、言っちゃ悪いが入学当初は人形みたいだなんて思っていたくらいだ

「今じゃすっかりと女の子やってるじゃないか」

職員室で話をしても一向に神は現れず、電話をしても誰も出ない

「先生!!一條くんが……」

それから数分間のことは六花は覚えていなかった

ただ気付いた時には病室のベッドの上で横たわる神を六花は見つめていた

ベッドに伏せて泣いている神の両親を初めて見た時

やっと六花は理解を始めた

「あんなに楽しそうに家を出ていったのに……どうして……」

交通事故だったらしい、運ばれて来た頃にはもう助からなかった

葬儀ではクラスのほとんどの生徒は泣いていたが、六花は魂が抜けたようにただじっとしていた

「あなたが御昴 六花ちゃん？」

「はい」

「神ってば六花を紹介するからって張り切っていたの

それがこんな……」

「御冥福をお祈りします」

涙1つ流すことなく葬儀は終わり、その数日後に六花のところに神

の模試の結果が届いた

誰もいない教室で結果を見比べてクスクスと笑った

「1点差でまたあたしの勝ちですね

でもここまで追い付くなんて凄いいじゃないですか」

笑っていたはずなのに、模試の結果の上にボタボタと水滴がこぼれ落ちて来ていた

「ズルいですよ、本当にズルいです

あたしの気持ちも分かっていたのに、最後の最後まで言わせてくれなかったなんて」

ネックレスを握りしめて泣きながらそれでも笑顔で言った

「答えは決まっていたんですよ、神さん

あたしは神さんが好きです、凄く好きです

だからあたしと答え合わせをして下さい

答えが無い問題を残さないで下さいよ」

溜まっていた涙を教室で全て流した

それから父親は海外へ行って、六花は人間関係をリセットするため  
に祖父母の反対を押しきって一人暮らしを始めた



## 六花の好きな人

### ★六花 side

「まあ長くなっちゃったけど、そんな感じかな

六道さんそろそろ起こさない」と

揺すっても起きない六道さんは、そこまで気持ちよく眠っているのであれば、起こすのも悪いと決め、諦めて大雅さんと二人で降りた「それで、昴と一條って奴を少し被せて見てたって感じ？」

「そうかもね、顔が似ていたわけでもないのに雰囲気似ていたのかもしれないのかな

他の人と関わることを避けようとしていたのに、六道さんを知れば知るほどあたしから近付いていたと思う」

「なんか妬けちまうなくそんな事聞くと」

「大雅さんはあたしの気持ちを上書きしてくれるんだよね

その為ならあたしは身体も大雅さんにあげられるよ」

「女の子が軽々しくそんなこと言うんじゃない」

軽く小突かれてそつと手を握られた

「オレはオレのやり方で六花ちゃんの全部を貰う

何とかの為に何かするなんてもつてのほかだ

前にも言っただろ？六花ちゃんからオレに抱き付きたくなくなるようにするって」

そういえば大雅さんはこういう人だった

先を見据えて行動できる人、人の気持ちを誰よりも理解しようとする人

だからあたしは大雅さんに甘えているんだ

もつとちゃんと向き合うべきはあたしの方なのかもしれない

「ねえ大雅さん」

「どした？」

「この髪切っても良い？」

「まさか、髪を切るって失恋か!？」

「そうじゃないよ、ただ過去に縛られてたこの髪をこれからに向けて切りたくなっただけだから」

「ああ、そういうことか」

オレはどんな六花ちゃんでも愛せる自身しかねえから

丸坊主にしたとしてもオレの自慢の彼女だって言ってるよ」

「ありがとう」

「一緒に行きたいところだけど、楽しみは後にとつとくかな

明日楽しみにしてるから、それと話してくれてありがとうな、俄然やる気出たわ」

少し名残惜しそうに手を離され、大雅さんは見えなくなるギリギリまであたしを見送ってくれた

「いらつしやいませ〜」

「ご予約のお客様ですかあ〜」

「いいえ、いっぱいなら別行きますけど」

「は〜い大丈夫です」

大抵別に行くと言えばすぐに切ってもらえる

席に案内されて後ろに立ったのは、若い男性の美容師だった

「今日はどうのように？パーマとか？」

「ん〜、ショートボブくらいまで切っちゃってください」

「ショートボブくらい……結構幅広いけど」

「お任せします」

髪にハサミを入れる手が鏡越しに見える

「勿体無いと思うけどな、お客さん失恋したとか？」

「失恋か〜、答えを言えずに逃げられた過去と切り離すためかな」

「なにそれ、ウケる」

わからなければ『なにそれ』だよ

「それにしても結構長いのに凄く良い髪してるよ

切ってる最中言うのは変だけど、本当に勿体無いくらいにさ」

「みんなにもそう言ってるんでしょ」

「無い無い、オレは美容師の学校卒業してすぐ働いてる新米だけどさ、ここまで毛先まで綺麗な人初めて見たぜ

やっぱり細かい所にも目が届くっていうか手入れをする女性って評価高いと思うな」

色々と話しているうちにいつの間にか眠ってしまったっていたらしく、目が覚めると髪を切ってくれた男性が掃除をしていて、他には誰も目に入らなかった

「あれ？起きた？」

「はい、ごめんなさい」

「良いつて良いつて、それより鏡見てごらんよ」

長かった髪は肩にかかるかかからないかくらいで切り揃えられていて、少しだけ軽くなつた気がした

「ありがとうございます、お代は？」

「お客さんがいくら払うかはお客さんが決めることだ

満足してくれたならそれなりに欲しいし、不満があるなら払わなくても良いからさ」

「それこそなにそれ」

「店長がいたら怒られるけどさ、これがオレのポリシーなんだよ」

普段美容院なんて行かないで自分で切り揃えていたから相場が分からない

一万円を支払った時、笑われた

「満足したってことで良いのかな、御昂 六花さん？」

「どうしてあたしの名前を？」

「生徒手帳落ちてたから中見ちやつたんだ

写真あったけど、あれが元カレ？」

「流石にプライバシーの侵害ですよ」

それだけ伝えて店を出た

★六花 side out

★昂 side

「ここはどこだ!!!」

あいつらはどこだ!!!」

何でオレを置いてくんだあああああ………

そしてまたすれ違う

あいつが髪を切った時には驚いた

小恋にはどうして切ったのかオレに聞かれるし、大雅に聞いてもいまいち分からない

覚えがあるとしたら墓参り行った日の帰りか？

あの時電車に乗って10分くらいで寝てたんだよな、けどあいつも別に何か変わったわけでもねえしな

気にするのは止めよう、考えるのはオレに合わない

「そろそろクリスマスシーズンだよな

街のイルミネーションとか綺麗になってる」

「そうですね、普段は家族と過ごしていましたが

今年はみんなで過ごせると良いですよね」

え？みんなでって……

あれあれくくおかしいぞくく

どうしたの昂くん

小恋がクリスマスをみんなで過ごすって言うんだ

「えつとき、小恋はクリスマスにオレとデートとかじゃ嫌かな？」

小恋はボンツと耳まで赤くなった

「えつと…嫌ではないですけど、まだあたし達付き合って間もないので二人きりだとまだ緊張し過ぎてしまうのです」

なんて可愛い生き物なんだ、あいつにも見習ってほしいくらいの純情さだよ

「よし、取り敢えず大雅にも聞いてみるわ」

任せとけと言わんばかりに自信満々でそう言って別れたのだが

「はあ!?何で1年で1番大切なクリスマスをお前らと過ごさなきゃならねえんだよ」

「六道さんも西城さんと二人きりの方が嬉しくないの?」

「そりゃオレだって小恋と過ごしたいけどよお……」

オレの部屋での話し合いは一瞬で断られた

「正直あたしはどっちでも良いから、大雅さんと六道さんで決めてよ」  
あいつはあいつでそう言うとう自分の部屋へと帰っていった

「つーか昴は甘すぎるぞ、せつかく付き合えたのに小恋ちゃんに流されっぱなしじゃん

オレと六花ちゃんなんて買い物行ったり少しゲーセン行ったりしてるぞ？

お前ら何か発展あんのか？」

「確かになんもねーけど、大雅だってあいつに流されてるところあるんじゃないのか？

どうせあいつの事だしキスとか出来てないんだろ？」

オレも当然まだしてないけど、あの大雅だって流石にあいつ相手じゃまだのはずだ

「どつくにしたつーの

昴お前まさか……まだ………？」

「オレはお前らと違ってプラトニックなんだよ！

悪いかよ！童貞で悪いかよ!!」

「童貞が悪いとは言わないし言ってるねえよ

六花ちゃんだってまだ処女だしな」

「童貞と処女は価値が違うんだよー!!

って、大雅のくせにキスしたのにエロいことしてねえのか!？」

「その話は置いとけ、取り敢えずクリスマスは無しだ

あり得ねえぞ、好きな人と一緒以外なんて」

「だからまた四人でさ……」

「却下だ、オレ六花ちゃんのとこで飯食ってくるから、この話は終わりもし諦めがつかなければ六花ちゃんを説得しろ

六花ちゃんに言われればオレは喜んでその意見に賛成してやるから」

大雅は穴からオレの部屋から抜け出してあいつの部屋に移っていった

大雅かあいつのどちらかを説得すれば良いのは分かったけど、どち

らが簡単かなんて天秤にかけても分からない

ひとまず小恋に電話をした

『昂くんですか?』

「うん、悪いな小恋、大雅説得したけどクリスマスはやっぱり無理そうだった」

『そうでしたか、あたしのほうこそごめんなさい』

嫌な役を昂くんに押し付けてしまった』

「いやいや、小恋の期待に添えないオレが悪いんだ」

『いいえ、あたしが先に六花ちゃんに話していれば』

もしかしたら上手くお話が進んだかもしれないのに』

「けどまだ時間はあるから諦めないでみるよ」

『あたしも六花ちゃんに電話してみますね』

電話を切つてもため息しか出なかった

自分の情けなさが辛い

『だから二人で過ごそう!』って言えばただれだけ良かったか

ふと視線を感じて穴の方をみると大雅とあいつが並んでオレの様子を見ていた

「どうよあれ」

「意気地無しにもほどがありますね〜」

「だよな、なら二人でクリスマス迎えようぜとか言えないのかな」

「うるせー!!二人してオレをバカにしやがって!!」

大雅はため息をついて言った

「バカにしてねえよ、バカだと最初から思ってるし」

「なんだとう!?!」

ケラケラ笑う二人に怒りそうになったとき、大雅はまた口を開いた  
「今回だけでぞ、オレンちでイヴから集まらせてやる

年末は絶対に四人でなんて言うなよ」

「大雅さんと話し合って、今回だけという結果になったから、良かったね」

全力で土下座をして感謝した

「マジでサンキューな！」

小恋にもすぐ連絡しておくからさ、やっぱり無しとかやめてくれよ」

「土下座は謝るときにしろよ、それと男がそう簡単に頭下げんじやねえよ」

パツと立ち上がってすぐに小恋に連絡を入れ、今日ばかりは二人が神様に見えた



目に見えない力

「それで？何でオレがお前とラーメン屋来なきやならねえんだよ」

「西城さんにプレゼント買いたいから付き合ってほしいって頼んだの六道さんでしょ？」

結局選んだのもあたしなんだからそのお礼にラーメンくらい良いじゃん」

「なら1人で入れよ」

「あたしが1人でこんなお店入るわけ無いじゃん」

こんなって酷いな

といつても夕方に大雅の家に行けばいいし、小恋にもその連絡は既にしてある

プレゼントに悩んで悩んで悩み続けた結果こいつの意見を聞いて、一緒に選んでもらった結果だ

後悔はしない！

「HEY!!」

「えっと……」

「Why does this shop not have a fork!?!」

「あー……つと……」

「なんか外人がキレてるぞ？」

「ほっとけば？」

「でもあれバイトの子だろ？可哀想じゃね？」

「そうだね」

こいつ、全く興味を示さずにラーメンを口に運んでやがる

こっぴつ、全く興味を示さずにラーメンを口に運んでやがる

「Damn it!! This is why I hate a Japanese!」

「ねえおじさん、この店にフォークってある?」

「あ、ああ子供向けのなら置いてあるけど」

「お嬢ちゃん使うのかい?」

「使うかなー多分」

「こんな時に何言ってるんだこいつは!!」

「店のおじさんも困ってるじゃないか」

「はいよ」

「はい、ありがとう」

フォークを受け取ると外人のところまで行って手元にフォークを突き立てた

「Oh!!」

「Shut up. Think about a nuisanceance.

Or, Is it the common sense of your country?

Just stop harassing me.

見ていられないと思いつつも急いで止めに入った

「おい、なに首突っ込んでんだよ!」

えっとソーリーソーリー……」

「It is common to eat the noodle using this…」

「It is different in this country. Work harder.」

「HAHAHAHAHA!!」

You are an interesting girl!」

「Thank You」

外人は笑いながらフォークを手にとって少し伸びたラーメンを食べ始めた

「行くっか」

「あ、ああ」

店を出てすぐに、さっきのバイトくんが追いかけてきて割引券を渡してきた

「あの、さっきは助かりました

これ良ければ使ってください」

「マジで?!良いのかよ!!やったじゃん」

「いらない」

は？

一瞬オレ達の時間は止まった

「客を神様だと思えなんて言わない

ああいうクレーマーを自分以上になんて見たくないから

ただ、今回はあたしがいたから何とかあったけど

次回も同じように誰かに頼って割引券を渡したところで自分の成長には繋がらないよ

それと、男なんだから圧力に負けないようにしな

外人相手だろうが所詮は人間なんだから」

「こいつが受け取らないならオレも受け取れないよな

まあ気にすんなよ、あんなの急に來られたって応対出来るようなやつの方が少ないに決まってるんだから」

「でも……」

スタスタと先を歩いていくのを追いかけるようにオレもバイトくんから離れていった

「六道さんもなかなかの傍観者っぷりでしたよ」

「う、うるせえ!」

「そうだ、あたしと買い物に行ったこと西城さんには言わないようにね」

「何で?」

「そういうものなの、あたしはこのまま大雅さんの家に行くから」

「よくわかんねえけど分かった

選んでくれてありがとな」

「いいよ、あたしも暇だったし」

女心が分からねえのかあいつの心が分からないのか……まあ良い

か

## クリスマス

### ★大雅side

「どうした？今日はなんだかソワソワしてるな」

「そりゃ初めて彼女が家に来るからな」

「それより兄貴は邪魔すんなよ」

「彼女って……ああ学生証の子か」

「珍しくまだ付き合ってたんだな」

「あつたり前だろ？マイスイートエンジェルだぞ」

「っーかなんで兄貴は学生証の写真知ってんだよ」

「あー、その子の髪切ったのオレだし」

「その時ちよつと見ちゃった」

「世間狭っ!!」

話を聞いた限りでは間違いなく六花ちゃんだと思うけど、流石六花ちゃんだ、兄貴のフェロモンにやられないとは

どうこうしているうちにチャイムが鳴り誰より先に玄関へ向かって扉を開けて抱き締めた

「ようこそ六花ちゃん」

「ちよつと大雅さん、いきなりびっくりだよ」

「いやあ、もう待ち遠しくてな」

「もしもあたしじゃなかったらどうするつもりだったの」

「ifの話は無し、六花ちゃんだったんだからそれで良いんだよ、さあ入って入って」

よっし！昴達が来る前に来てくれた！

キスの4〜5回は出来るんじゃない？

下心満杯の状態でオレの部屋に案内した

「外観もだけど、中も凄く広いね」

「一応金持ちだからな、ココアとかコーヒー飲む？」

「じゃあコーヒー貰おうかな

お砂糖とミルクはいらないから」

六花ちゃん甘党に見えてブラック飲めるのか

学校だとイチゴミルクとかバナナミルクとか飲んでるのに意外だな

そう思いながらも部屋を出てコーヒーを煎れて戻ると部屋に兄貴がいた

「何でまた髪切りに来てくんないの？」

「だって自分で出来ますし」

「いやいや、プロに任せた方が良いつて

六花ちゃんの髪を切らせてもらえるならお代なんていらなから  
さ」

編み込である兄貴の髪を掴んで引つ張った

「おーい、兄貴でも六花ちゃんに手を出すなら許さないぞ」

「あだだだだ……分かった分かったよ

今日はオレも出掛けて居なくなるから安心しろ、明日の夜まで帰つて来ねえから」

部屋を出ていったと思った兄貴はまたオレの部屋に顔だけ出して  
言った

「おい大雅、ゴムはしろよ」

「死ね!!」

ドアを蹴り閉めてようやく落ち着いた

「ごめんな、あんなのが兄貴で

コーヒーまだ熱いから気を付けなよ」

「よく似てるんじゃないかな」

コートもマフラーも帽子もしっかりとたたんで隅に置いてあり、六花ちゃんもそれなりにくつろげている様子

「六花ちゃん」

「何？」

「これから呼び捨てにして良いかな？」

六花ちゃんもオレのこと呼び方変えてほしい」

「大雅さん……大雅……大雅くん？」

頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいるのが何となく分かった、だけど呼び方だけで距離はまた縮まる

神って野郎もさん付けで呼ばれてたなら

『くん』もしくは呼び捨てで呼ばれる方が優位に立てる気がする

「大雅……うん、あたしも敬称無しで呼ぶようにするね」

「六花……」

「大雅」

「ハハハハ、なんか照れるな

基本みんなからタイガーだの大雅だの呼ばれてんのに」

やべえ、今どんな顔してるのか自分でも分からねえ

鼻の下伸びたりしてねえかな、真っ赤になってねえかな

「大雅？」

落ち着け！オレは昴とは違う！こんなんで狼狽えるな

「六花、今オレはキスしたい」

「良いよ」

このキスだけでエッチする何倍も意味がある気がする

もう唇の当たる寸前くらいでドアが開いた

「お待たせー……」

「遅くなりました……」

お前ら空気読め!!!

「えつと……邪魔しちやった感じか？」

「えつとあのその……お二人はもうそんな関係にまで」

六花は少し目を開くとオレの襟を引っ張って六花からキスをしてきた

「焦らされるのは好きじゃないの

それと六道さんと西城さんもこんにちは」

嬉しいけど！嬉しいけど!?!こいつらが後30分遅れて来たら大人の階段ルルル♪だったんじゃないか？

「えつと、親父さんが通してくれてさ、部屋にいるからどうぞって」  
「あの糞親父め」

「六花ちゃん大人ですね…」

「キスなんて今時の小学生でもするよ」

「まあ最近のガキは進んでるからな、気を取り直すか、お前ら何か飲むか？」

「オレも小恋もココアで、来る途中で話してたからな

大雅の家のココアは旨いって」

「あつそ……それじゃ準備してくるわ」

「あたしも手伝うよ」

六花はそう言ってオレの後を追ってきた

「大雅のお父さん今日は家にいるの？」

「まあな、母さんもいる」

「良い家族じゃん」

おつと……六花の前で母親の話はしない方が良かったか？

「お父さんに挨拶だけしたいけど大丈夫？」

「あいさつってそんな堅苦しいことしなくても良いよ」

「マナーとして、第一印象も大切だしね」

六花の手元にはしっかりと包みまで用意されていた

「それじゃ先にあいさつしとつか

顔は怖いけど中身はそうでもねえから、あんまり緊張すんなよ」

先に親父の部屋へ向かった

「君は？」

「はじめまして、大雅さんとお付き合いさせていただいています御昂

六花です

あいさつが遅れてしまって申し訳ございません

これ良ければ食べて下さい」

六花から受け取った小包をその場で開き始めた

「 Galler のミニバーか」

ガレーのミニバーか、無難なところ突いてきたな



「チョコレートは嫌いでしたか？」

「いや、出来過ぎたくらいのお嬢さんだ

大雅みたいなちゃんぽらんの彼女は疲れるかもしれないがこれからも大雅のことをよろしく頼む

よかつたな大雅、今日私の所にあいさつにこなければ『二度と敷地を跨ぐな』と言うところだったぞ」

あつぶねー……

「そんな非常識なことするわけ無いじゃないですか」

六花は後ろ手に別の包みを持っていったけど、それについては何も触れないでいた

それから少し話をした後でココアを準備し部屋に戻った

「それじゃまずはせっかくの冬休みだつてのに宿題を出しやがったかな、それをみんなで写し合うか」

六花と小恋ちゃんのノートをオレと昴で必死に写して、二時間ほどで全て終わることが出来た

「これからは自分達でやらないとダメですよ」

「まあまあ小恋ちゃん、そんな固いことは無しにして今からは楽しもうぜ

それじゃまずはどこ行くか」

「大雅の家でだらだらしてれば良いんじゃないか？」

「夜なら親父は寝たら朝まで起きねえし、母さんは仕事で出掛けるから騒いでも問題ねえけど、今はなに言われるか分かんねえからな」

「そつか…取り敢えず腹減ったな」

「それじゃ飯食いに行くか」

個々に準備を済ませて家から出ると、外はクリスマス色で染まっている

「そうだ六花、早いけどクリスマスプレゼント渡したいから、手を出して」

六花の出した左手の薬指に指輪をはめた

「あたしの指のサイズ良く分かったね」

「よく手を繋いでるからな」

「流石大雅、誰かさんとは大違い

あたしは何も考えてなかったなあ……これでも良い？」

六花は今巻いているマフラーを掴んで聞いてきた

「もちのろん！」

わざわざ胸元の空いた服を着てきたのはこれが目的なのだ、神に渡してオレに渡さないのは許されない

「ちなみにこのマフラーって六花の手作り？」

「そうだけど？チクチクする？」

「家宝にする！」

少し長めのマフラーを巻くと、少しまだ六花の温もりを感じる事が出来た

「お、オレも小恋にプレゼントがある！」

「あたしにですか？」

「これ、お揃いの腕時計何だけど、これからも同じ時間を同じように歩いて行きたいから、付けていてほしい」

「ありがとうございます、嬉しいです」

小恋ちゃんからも昴はネックレスを貰っていて、嬉しそうにデレデレしているけど、あの昴があんな言葉を言えるなんてな、六花が何か助言でもしたのか？

「なあ六花、昴に何か言ったのか？」

六花に耳打ちすると、六花も小声で答えた

「面白い物に付き合ってたし、渡すときの台詞も考えたよ」

ちよっぴりジェラシー、昴も人の彼女を誘うなら一言あっても良いんじゃないか？

「ヤキモチ？」

「そうだよ、六花を誰にも渡したくねえし」

「大丈夫、嫌いな人とキスなんて出来ないもん」

腕にしがみついてきた六花の頭を撫でて、昴も嬉しそうだし水に流すことにした

## 最悪なクリスマス

★昴side

腕時計も渡せた、これだけで最高のクリスマスだ

あいつにも少し感謝しなきゃな

「いつまでニヤニヤしてんだよ」

「し、ししししてねえよ」

それより飯行こうぜ飯」

前に行ったような高いところには入らずにファミレスで他愛もない話をしながら食事を始めた

「そういえば六花ちゃんってどうして髪を切ってしまったんですか？

綺麗だったのに勿体無いです」

「邪魔だったからだよ、それに大雅だって短くても良いって言うてくれまし

それに西城さんだって毛先とか綺麗に切り揃えているじゃん」

「六花ちゃん分かってくれた？

昴くんは、そういう少しの変化も気付かないとダメですよ」

「昴にはちと難しよな、でも腕時計の渡し方とかはかっこよかったぜ  
同じ時間を歩みたいだったか？」

「うるせーな、小恋が可愛すぎてまだ直視出来ねえんだよ」

「のろけんなよ、六花の方が可愛い」

「いや、小恋だ」

「六花だろ」

「これだけは譲れねえぞ

「あのさ、本人達を前にしてそれで言い争わないでもらえるかな」

「そ、そうですよ」

どつちに転んでもうれしくありません」

怒られてしまった……

「あたしは昴くんの中で一番ならそれで良いですから」

ニコツと笑う小恋に少しだけ罪悪感を感じた

買い物のことやっぱり言うべきじゃないだろうか、小恋のことを想って一緒に買いに行つたけど、隠すのはなんだか気持ち悪い

「あのさ、そのプレゼント何だけど、実はこいつと買いに行つたんだ」「やっぱりな、昴がそんな気の利いたプレゼント渡せるはず無いし、そんなこと相談できる友達もいねえしな」

あいつはコーヒークップを音をたてて置いて席を立った

「六花?どこ行くんだ?」

「お手洗い」

「そっか」

そう言つてオレを横切る時、「馬鹿」と小声でそう言われた

「六花ちゃんと一緒に買いに行つたんですね、でも嬉しいです」

良かった、ちゃんと笑つてくれてる

「そうなんだよ、あいつオレが選ぼうとするものにセンスが無いとか文句ばかり言つてさ」

別にあいつに渡す為に買う訳じゃねえのにかなり大変だったんだぜ」

買い物の際に言われたこと等面白おかしく話しているうちに小恋は立ち上がった

「もう止めてよ……」

「へ……オレ何かまずいこと言ったか?」

大雅の方を見ても腕を組んでため息をついていた

「あたし二人と一緒に買い物してたこと本当は知ってたんです、偶然ですけど見かけてしまいました」

「だけどそれがプレゼント用だと知つて昴くんならしょうがないかなつて思っていました」

「な、なら良いじゃん」

取り敢えずほら、座ろうぜ?」

「どうして……どうして昴くんはあたしという時より六花ちゃんという時や六花ちゃんの話をする時の方が楽しそうにするんですか!」

そんな昴くんからのプレゼントなんてあたし要りません!!」

小恋は腕時計を外してテーブルの上に置いて泣きながらファミレスを出ていった

「やっぱりこうなった」

トイレからいつの間にか戻ってきていたあいつはオレの後ろの席に座っていて、それだけ言うとおれの前に移動しておもいつきりビンタされた

「人の気持ちくらい少しは考えなよ」

「つてえな!!何すんだよ!!」

「やめろ昴、六花に手を出すなら許さねえぞ」

それより今は小恋ちゃんを優先しろ、会計は済ませてやる

追いかけてそれで謝ってこい、謝る理由については追いかけてながら考えろ」

はつきりしない気持ちのまま小恋を追いかけた

「何で追い付くの……」

「このままにしていたら小恋が離れたまま戻ってこないって思ったから」

「昴くんは本当にあたしのこと好きなのですか？」

「当たり前だろ、プレゼント選んでる時だって常に小恋の笑顔だ想い続けて選んできた」

渡したとき喜んでもらえて本当に嬉しかった

オレはバカだからさ、小恋が怒ってる理由まだしつかりと理解できてないけど、小恋を想う気持ちは誰にも負けねえ」

「そうだとっても、やっぱり昴くんは六花ちゃんを無意識かもしれないませんが意識していますよ」

近くで昴くんを見続けてきたからこそ分かってしまいます」

どうすれば良いんだ……

こんな時何て言うのが正解なんだよ……

「西城さん、あたしとまた少しだけ話しよう、今日は遅いしあたしの部屋で」

「六花ちゃん……？」

後から追いついた大雅とこいつはオレと小恋の間に入った

「まあ女同士での話もありだろうし、小恋ちゃんも少しだけしんどいかもしれないけどさ、六花と話して落ち着きなよ」

イヴに初めてオレは小恋に部屋が隣同士だということを知られた

## 最悪なクリスマス

### ★六花side

「あたしからも謝るよ、本当にごめん」

「六花ちゃんは何だかんだで断れない人ですから

それに、あたしや昴くんの話聞いてあたし達を引き合わせてくれましたし」

大雅と六道さんからLINEが入っていたのをこっそりと見て笑った

無茶はするな、小恋を頼む

どっちを優先するべきかなんて分からないけど、あたしはあたしのやり方で戻してあげるよ

「そんなのさ、楽しいからに決まってるじゃん

だってあたしが言ったように彼って行動するんだよ？

そんな面白いこと止められると思う？」

「えっと……嘘……ですよ？」

鏡を動かして隣に繋がる穴を見せた

「今は向こうの部屋に棚が置かれてるから壁が出来てるけど、ずらせばすぐそこに六道さんがいる」

動揺しているのはすぐに分かる

「ねえ西城さん知ってる？あたしと六道さんが初めて会った時のこととか」

「知らないし、そんなこと今はどうでも良いじゃないですか」

「まあ聞きなよ、六道さんってば頭からこの穴に突っ込んできたあたしの下着姿見たんだよ

それといきなり押し倒してきたから写真撮って脅してたんだよね」

「脅してたって……」

「あたしの従順なペットになるようにって、それでね」

「もう聞きたくない！」

耳を塞ぐ手を押さえて話を続けた

「なら別の話をしようか、六道さんってオナニーして絶頂迎えるときにこれでもかかってくらい上向くの、しかもオカズは巨乳モノばかりで」

「止めてって言うてるでしょ!!」

頬を叩かれよろめき倒れたとき、穴の前に立て掛けていた鏡にぶつかり、鏡は割れて瞼を少しだけ切った

ポタポタと血が流れていくあたしを心配したのか西城さんはすぐにあたしの肩を抱いて心配してくれた

「別に大袈裟に心配する必要はないよ

それにしてもあたしだけ血を見せることになるなんてね

よかつたら初めては六道さんの部屋でやりなよ

あたしも西城さんの初めて流れる血が見てみたい」

「六花ちゃんはそのんこと言う子じゃ無いです」

西城さんの腕を掴んで耳元で囁いた

「あたしは六道さんにとって大切な人を盾にして、主従関係や穴のことを秘密にしてきたんだよ」

掴んでいた手を逆手に引っ張られてベッドへ押し倒された

「あたしの知る六花ちゃんはそんな人じゃない

無理して変なこと言わないで下さい」

「あたし好き好きな人が死んで、もうどうでも良いって思ってた時期があつたんだよね、でも六道さんを目で追い始めてから、六道さんで濡れるようになったんだよ

六道さんのオナニーする声を聞いてあたしも声を押し殺してオナニーしていたの

そういえばあたしから押し倒したこともあつたかな、主従関係のルール違反とか言つて六道さんを感じたことがあつたんだ

それでも六道さんってばあたしに手を出そうとしないんだよね、西城さんが好きだからかもしれないけど黙っていれば好きなことやりたい放題なのに、六道さんは腰抜け種無しの子キン野郎だよ」

「昂くんの悪口言わないで!!」

ベッドに押し倒されたまま何度も叩かれた



「折角友達になれたと思ったのに、突然そんなこと言われて……あたしはどう捉えれば良いの!？」

あたしは昴くんも六花ちゃんも大雅くんも信じていたのに、それが違うって裏切られたらあたしは……!」

「あたしだけを嫌って恨めばいい」

1度西城さんの手は止まった

「本当にあたしは六花ちゃんのこと恨みますよ」

「うん、それで良いよ」

「裏切り者……最低……昴くんは絶対に渡さないから!!」

再び西城さんが手を上げた時、その手を六道さんが止めて

大雅はあたしを抱き起こした

「す、昴くん?」

「黙っていたことは本当に悪かった

さつきこいつが言っていたことが真実なんだ

それでもオレは……オレは……!!

小恋、お前のことが好きだ」

「昴くんは何も悪くありません、悪いのは全部六花ちゃんです、昴くんは六花ちゃんに操られていただけです」

六道さんはあたしと大雅に頭を下げ、西城さんの肩を抱いて部屋を出ていった

救急箱から絆創膏や消毒液を取り出しながら大雅は深くため息をついた

「急にため息?どうしたの?」

「六花がなに話していたか聞いてたんだよ」

「ごめんね、大雅にも秘密にしていたこともあったから」

「そんなことオレが気にすると思うかよ」

オレはそれ以上に六花を悪者役にしてしまったことを後悔してんだよ、他にもっと小恋ちゃんを納得させる方法があったんじゃないやねえかって

こんなに叩かれて、血まで流して、ボロボロになって誤解されたま

まなのは、解決なんかじゃないだろ」

「解決してるよ、間違った答えだけど解は出ているから

もう他に答えを導き出す必要なんて無いの」

「それは自己犠牲にした自己満足だ」

「自己満足……そうかもね」

でも六道さんと西城さんの仲は戻ってる」

「六花と小恋ちゃんの関係は崩れた」

「あたしはあたしだけを見てくれる人がいればそれで良いの」

時計の針が0:00を刺した

「こんな状態だけどクリスマス一緒に迎えられたね」

「本当にこんな状態だけだな」

少し腫れた頬を撫でられた途端に少しだけ涙が流れた

「おかしいな、泣くようなことはしなかったのに」

「今は泣いとけ、でもこれからは絶対に泣かせねえ

だから六花、今度はオレを信じろ

前にも言ったかもしれないけど、自己犠牲なんてさせねえ、六花が

そう思っただけでもオレがそう思うことはさせねえから」

「ズルいな、こんな時に優しくされたら全部持つてかれちゃうよ」

「オレは最初はなからそのつもりだからな」

ハハハハと笑う大雅の手を自分の胸に移させた

「ならもう全部持つていってよ」

「くっ……………」

大雅は歯を食い縛って片手で胸を押さええる手を退かした

「したくないの?」

「すげーしたいに決まってるだろ!!」

「だからして良いよ」

「でもこの流れは違うんだよ、本当はクリスマスの夜はアツイ夜に

しようとしてたけどさ」

「えっと……女の子に恥をかかせるつもり(棒)」

……………

「なんで棒読み何だよ」

「言い慣れてないから」

「風呂入って頭を冷やしてきなよ、それで今日は寝ときな

オレも母さん呼んで迎えに来てもらうから」

「帰らないで!!」

何でそう言ったのか自分でも分からない

ただ一人になりたくないとか心から強く思った

「分かったよ、それじゃ今日は泊まるから、明日デート行こうぜ、約束な」

「うん」

その日はお風呂から出るとそのまま泥のように眠ってしまった  
ただいつもと違うのは確かな温かさがすぐとなりにあつたこと

## 今年の正しい終わり方

★大雅 side

「なあ六花、初日の出とか見に行かぬ？」

「行かないよ、寒いし疲れるし」

「だよなー、そう言うと思ったわ」

六花はクリスマスからオレに対して変わることなく接してくれる無理をしている様子でもないし、気にしている様子でもない  
顔の腫れも引いていて、瞼に絆創膏だけが残ってる

「ごめんね大雅、四人で集まること出来なくなっちゃって」

「オレは1に六花、2に六花、3・4が無くて5に六花だからな  
そんなこと気にしちやいねえよ

それに時間が経てば小恋ちゃんだって分かってくれるさ」

クシャクシャと頭を撫でて、心の靄は取れない  
正直、何で六花が傷だらけにならなきゃいけないのか

理解出来てるけど理解しきれていない部分もある

「たー！いが、また眉間にシワ寄ってるよ」

「ああ、悪い悪い……」

「初日の出を見に行くつもりもないし、初詣も行きたいなんて思っていないけどさ」

年末はこたつに入って、面白い番組見て、お菓子とか食べながらだらだら一緒に迎えたいな」

「一緒についてオレと？」

「それ以外誰がいるのさ」

あーもう滅茶苦茶可愛いなあ！なんであの夜に誘いに乗らなかったのか不思議なくらいだ

そんな話をしつつもプリクラを撮り終えた

「オレ達が付き合って大体3ヶ月かあ」

「どうかしたの？」

「いや、オレって女の子とその日限りとかでしか遊んでなかったからさ、相手もそれを同意してたんだけど、こういうの何か新鮮だなーって思ってる」

「その発言あたし以外の人の前で言わない方が言いと思うよ」  
「へへっ、最低だろ？」

「でもその女の子は幸せだったんだよね」

「なら大雅は最低なんかじゃないよ」

「マジで？」

「好き嫌いは割れそうだけどね」

プリクラに落書きをしながら笑う六花を見て染々思う

初めて撮った時なんて全部真顔で落書きもしなかったのに今じゃ立派なJKしてんだなって

ゲームセンターから出て少し歩いていくと、買い物帰りの昴と鉢合わせた

「よ、よう大雅」

「おう昴」

「お前も…久しぶり」

「久しぶりだね、六道さん」

はつきり言ってぶん殴ってやりたい

握り締めて力込めていた拳を六花にそっと押しえられた

「久しぶりに少し話そうぜ」

久しぶりといっても数週間会っていないわけじゃないけど、毎日どうでも良い話で盛り上がっていたオレ達のLINEのグループはあの一件以来凍りついている

河川敷まで移動して3人並んで座った

「それで？小恋ちゃんとはどうよ」

「一緒に初詣に行く約束もしてあるよ」

「そっか……」

少しだけ沈黙が続いたが、昴は立ち上がってオレと六花の前に来て深々と頭を下げた

「あのさー！オレお前らに謝らなきゃならないってずっと思ってたんだ！！

オレがなんも考えないで余計なこと言っただけ関係拗らせちゃって、本当に悪かった……申し訳ない……」

「それで許してやるって言われると思ってるのかよ」

「何も言えない方がよっぽど嫌だったんだよ」

その言葉と共にオレは昴の襟を掴んで立ち上がらせた

「てめえが楽になりたいからって今さら謝ってんじゃねえよ」

「大雅！」

止めようとした六花にオレは初めて強めの口調で言い放った

「止めんな、いくら六花の頼みでも聞けねえんだよ」

「気が済むまで殴ってくれて構わない、オレが出来るお前らへの償いなんてそんなもんだ」

誰かを全力で殴ったのは初めてだった

初めてなのにどこを殴るつもりでどう殴ったのか頭の中では冷静に分かっていた

倒れた昴の上に座ってまた襟を掴み上げた

「オレらへの償いだ？次の日でもその日のうちでも謝れたのに逃げていた自分への償いだろうが！！」

「そうかもしれないけどな、オレは小恋を選んだんだよ

小恋を泣かせるような事はしたくねえんだ、最低な答えだとしてもそれがオレの答えなんだよ」

「なら六花がいくら傷付いても良いって言うのかよ！！」

もう一度拳を振り上げた時、六花はオレに突っ込んできた

「六花？！」

「これ以上はダメだよ、大雅まで戻れなくなる」

「六花は何で怒らねえんだよ！！」

何でそこまで平然でいられるんだよ！！」

「あたしは大雅も好きだけど」

六道さんも西城さんも好きだから、だからこれ以上この関係をバラにしたくないの」

「わっかんねえよ!!そんなの全然わかんねえよ!!」

何でオレらの事を想ってるのに六花は自分を傷付けられるんだよ」

「あたしにも分からないや」

困った顔をしながらも笑う六花にこれ以上何も言えなかった

「おい昴」

「なんだよ」

「小恋ちゃんの誤解を解いてやってくれ

これは多分オレにも六花にも出来ねえことなんだ」

「時間……時間かかるかもしんねえぞ」

「出来ないとは言わないんだな」

「当たり前だろ、オレが撒いた種だ

自分でなんとかしないと格好悪いだろ」

「今でも随分と格好悪いけどな、あの一発でオレは全部許してやるよ

あー……手え痛いな、人って何でこんなに堅いんだろうな」

「殴られたオレはそれ以上に痛いけど、こいつ……御昴の傷は更に痛いんだよな」

「ようやくと理解したか、ほれ」

昴に手を差し出すと座り込んでいた昴は手をとって立った

「信じてるぜ、親友」

「任せておけよ親友」

昴から離れて六花の手を取り直した時、昴は六花に言った

「御昴、本当にごめん、それとありがとな」

「お礼なんていらないよ、あたしはこんなやり方でしか出来ないだけだから」

「御昴も大雅を悲しませるなよ、その逆もだ」

「当たり前だ」

「当たり前でしょ」

そう言っつてオレ達と昴は分かれた

「六花の部屋でのんびりするのにはクリスマス以来か」

「だって寒いのに大雅は色んな所に行きたがるんだもん」

六花の部屋で買ったばかりのこたつに入って、買ったばかりのテレビを見て過ごす

「姿見は捨てたのか？」

「割れちゃったしね、結構お気に入りだったんだけどさ」

「そっか」

少しすると蕎麦を準備して六花は戻ってきた

「年越しそばって年を越す日に食べるのか、年を越す瞬間に食べるのかよく分からないよね」

「そういえばそうだな、蕎麦は食べるけどいつ食べるかはいまいちわかんねえよな」

対面に座った六花はこたつに入ると言葉の通りとろけ出した

「おーい六花、果てしなく不細工になってるぞ」

「こたつに入ると魂まで持っていかれそうになるよね」

「そういえば大雅、手を見せて」

オレは左手を六花に見せようとすると、六花は首を横に振った  
「右手」

「今はダメ」

鼻を殴った時に歯が当たったのか皮が剥けて血が出てる

「こんなの見せられるわけがない」

「いいから見せて」

オレの隣に移動した六花に無理矢理手をとられた

「やっぱり血が出てる」

「こんなの舐めておけば治るから、気にすんな」

「そういうと六花がオレの手を舐めた」

「りりりりりり六花!?!」

「舐めれば治るんでしょ?」

「ほ、ほら、血をなめるのは危険性があるんじゃない」



「大丈夫だよ」

手を舐められるのってこんなに気持ち良かったのか？

「まあ冗談はこれくらいにして、はい」

絆創膏を貼られた

「お風呂入るときそのままじゃ滲みるでしょ」

「うん、そうだねー」

「なにがっかりしてるの……お蕎麦食べよ」

あぶねえ、大雅のベビータイガーがキングタイガーになるところだった

そのあとは本当にだらだらとした時間を過ごして年を越した

「1年終わっちゃったね」

「これからまた始まる、今度は途中からじゃなくって最初から六花とな」

「うん」

その時だけは小恋ちゃんや昴のことなんて本当に気にならないくらい六花だけを想い続けた

## 壊れた物の直しかた

### ★昴side

「初詣も人が多いんだな」

「毎年こんな感じですよ、昴くんおみくじ引きましょ」

「おお、良いねえおみくじ」

小恋と一緒におみくじを引いた

大概こういう場合のおみくじとかいうものは普通以上の結果が出るもんだ

「あたしは吉でしたね

金運、恋愛運共に良さそうです」

やっぱりな、オレも悪くて小吉だろうし

少しワクワクしながら開いた

『最悪最凶暗黒大魔凶』

.....

さいあくさいきょうあんこくだいまきよう……

何だろうこれは、でもこれは見なかったことにしたい……

「昴くんはどうでしたか？」

チラツと見られた時は小恋も固まった

「は、ははははは……」

悪戯にしてはやりすぎだよなあ……」

「で、ですよね」

とつとと枝に縛って神社を後にした

「昴くんはどんなお願いをしたんですか？」

「そういう小恋はどんなことを？」

「あたしは、今年1年昴くんと一緒に過ごして、来年もまた一緒にお詣りさせてくださいってお願いをしました」

「そうか、それなら叶うだろうな」

小恋の手をしつかりと握りながらオレは再び口を開いた

「オレはまた四人で集まれますようにって願った」

「四人でって……」

「オレと小恋、それに大雅と御昴の四人だ」

「あ、あはははは」

何を言っているんですか、六花ちゃんにまた何かされたんですか？

「そうですよね？」

「違うよ」

「弱味をまた握られてるんですか？」

「だから違うんだよ」

「ならどうしてまた六花ちゃんの名前が昴くんから出てくるんですか」

「場所を変えてゆつくり話そう」

「今日は家族と出掛けますから長くならないのであれば平気です」

オレはバカだからこの先何て言えば良いのかなんてわかってないけど、あいつだけが傷付いてオレは何もなのはおかしいことくらい分かってる

ファミレスに入って御昴が小恋に言ったことをなぞるようにオレも話した

「これまでのことを全て

「六花ちゃんから聞いたこととほとんど同じですけど、昴くんはどうしてほしいのですか？」

「オレは……オレを叱ってほしい、それで小恋がまた御昴と友達に戻ってほしい」

「叱ることは出来ますけど、戻ることは出来ません」

「すぐじゃなくても良いんだ」

「どうしてそこまで六花ちゃんにこだわるの？」

「オレは小恋と付き合えて本当に良かったと思ってるし楽しいけどさ、やっぱりあいつらが一緒の方がもっと楽しいんだ……何気ないLINEのやり取りでも、ただ話してるだけでも

だから今すぐに御昴を許してやってほしいなんて言わないけど、少

しずつ戻って行ってほしい」

「ダメですよ、だってあたし六花ちゃんにあんなにも酷いこと言ってしまうましたし、何度も叩いてしまいました」

心が揺らいでるのか？

これならあともう少し押せば……………

いや、オレが焦るとダメなことくらいは学習した

「時間を置いてもう一度二人で話し合ってみてほしい

オレさ、正直四人でいるとき想像してたことがあるんだよ」

「想像……………ですか……………？」

「ああ、大人になってもまた四人で集まって、酒を飲み交わしながら一緒に笑い合えたら良いなって

それでさ、あいつらの間にはもう子どもが出来ていて、オレと小恋で笑ってやりたいんだ

バカの考えるようなバカげた妄想かもしれねえけどさ…、オレはそういうことが出来る関係を崩したくないんだよ」

小恋は少しだけ笑ってくれた

「おかしな想像ですね」

「そうだろうな」

「でも、そういう関係も良いかもしれません」

!?

「またあたしに少しだけ時間を下さい

心の整理が出来るまで、どれだけかかるか分かりませんが」

「それでも…良い…ありがとうございます…」

「ちよつと昂くん？泣かないで下さい」

小恋に言われて初めて泣いていることに気が付いた

「あれ？何でオレ泣いてんだ？変だな…ハハハハ

そうだ、これ」

オレは小恋にスマホ用のストラップを渡した

「これ最初にオレが選んだ小恋へのプレゼントなんだ

御鼻にセンスがないって言われちゃったものだけど、受け取ってほしい」

そつと手にとつてまた笑われた

「本当にセンスが無いじゃないですか」

「う、うるせえな……可愛いなって思ったんだよ」

「でも昴くんがあたしの為に選んでくれたものですから大事にしますね

それと、腕時計はまだ残っていますか？」

オレは少し気まずそうに頷いた

「それもください、六花ちゃんがあたしと昴くんを想って選んでくれたんですから」

「意外と強いんだな、小恋は」

腕時計を渡すとしつかりとつけてくれた

「ありがとうございます、この後あたしはこのまま家族と出掛けますので……あたしもあたしなりにがんばりますから、六花ちゃんに負けないくらい」

ファミレスに入った時とは真逆くらいなテンションで小恋はお金を置いて出ていった

「ふう……………」

とりあえずやれるだけのことはやったのかな

「あ?!?!?!に負けないように何を頑張るんだろうね」

「さあ、けどまあ時間はあまりかからない様子だったんじゃないかね?」

「お前ら!いつからそこに!?!」

「お!?!?!たつに入りすぎって大雅に怒られて、お昼は外に出ることにしたの!?!?!」

「つーかバレないかオレがドキドキしてたぞ

それにしても、オレと六花がデキ婚とかとんだ妄想野郎だな」

「さすがのあたしでも吹き出しそうだったよ」

「うううううううるせえな!」

バカな妄想だつて言っただろうが!?!」

恥ずか死ぬ!!

「話を聞いてたならわかると思うけどな、小恋から話があると思うからちやんと聞いてやれよ! いいな!!」

「分かってるよ」

六花はコーヒーを啜りながらオレの方を見もしないでそれだけ返事をされた

ある意味信用しがたい返事だが、これ以上また一緒にいられるところを見られたらたまったもんじゃねえ

「それじゃ任せるからな!!」

支払いを済ませてオレは逃げるように帰った

## 2年目

### 新しく始めよう

#### ★六花 side

「六花、また同じクラスだしよろしくな」

「あたしらの学科は2クラスしかないんだから

大抵同じクラスになるようにするでしょ、修学旅行もあるんだし」

「それもそうだけどさ、やっぱり嬉しいじゃん

昴や小恋ちゃんとも同じクラスみたいだしよ」

「そっか」

「この後の始業式どうする?」

「どうするって……」

「面倒だしフケちまおうぜ」

「賛成」

あたしと大雅は全員が講堂へ集まるなか別の場所へ行って時間を潰した

「小恋ちゃんからなにかあったか?」

「あれから何にもないよ、チラチラ見られていたから話しかけようとはしてくれてるみたいだけど、一歩踏み出せない感じなのかな」

人によって心の整理をつける時間は異なる

あたしだって神さんを引きずり続けたからこそよく分かっているつもり

「六花から話しかけてやれば良いんじゃない?」

「それは逆だよ、しっかりと頭の中も整理しきって話し合わないと」

「そんなもんかね」

春風をまだ少しだけ冷たく感じながらも二人屋上で時間を潰した

教室へ戻って自分の席を確認しようとする誰かにぶつかった

「つと、ごめんなさい」

「あ、こちらこそ……あーっ!!」

五月蠅い

突然指を差されて叫ばれたから、その向けてきた指を曲げてはいけない方向へ曲げた

「誰か知らないけど人に指差すなんてマナーがないね」

「いつてえーっなって、オレだよ！オレ!!」

「はあ？多分はじめましてだと思っけど、興味がない人の顔を覚えるつもりなんてないので

それとオレオレ詐欺なら電話くらい使いなよ」

「あのラーメン屋でバイトして外人に絡まれてた」

「ああ、あの時のバイトくんか」

「まさか同じ学校で同じクラスになるなんて

ちなみにオレはバイトくんじゃなくて二階堂<sup>にかいどう</sup> 大和<sup>やまと</sup>」

「あつそ」

「ちよつと待つてよ、きみの名前は？」

「じゃあ山田花子で」

「いや、いくらオレでもそれが嘘なのはわかるよ」

そんな話をしてしているとすぐに大雅はやってきた

「おい大和、六花に何のようだ？」

「おや？知り合いかな？」

「九頭竜こそ何だよ、オレがその子に話しかけちゃいけない理由なんであるのか？」

「別にねえけど、六花はオレの彼女だからな

ちよつかい出されてるのを見て見ぬふりは出来ねえだろ？」

「九頭竜の彼女？」

「今まで1度も女の子とまともに付き合ってない九頭竜の？」

「オレの噂すげえ酷いな」

「まあ本当のことなんだししょうがないんじゃないの？」

「あ！でもそうか」

何か納得したかのように腕を組んで頷き始めた



「お前もオレのバイト先に来たときは別の男と来てたしな、そうか、お互いがそれを許しあってるんだよね」

「ああ、六道さんのことか……下らないなあ」

「行こう大雅、こういう勘違いバカは相手にしたくない」

「お、おう……」

指定された席は既に把握出来ているし、こういうバカに関わると良いことは無い、さっさと逃げておこう

★六花 side out

★大雅 side

「で？何で大和のバイト先に六花と昴が行ったんだよ」

「西城さんへのプレゼントのために付いて行ったお礼みたいなものだよ」

それ以上でも以下でもないから」

「それでも、流石に彼女が内緒で別の男と買い物に行くのはなんだかちよつと……」

「相手は六道さんだよ？」

「昴だから尚更なんだよ」

「大雅つてさ、たまにすぐーく女々しい時あるよね」

「それだけ六花が好きだつてことだつーの！」

思わず赤面した六花を見てオレまでも赤くなった

「大雅から好きなんて言われることほとんど無かったから、ちよつとビックリしちゃった」

「六花も予想外の反応すんなよな……」

多分端からみればバカップルみたいな感じなのでは無いだろうか

「お前ら本当に付き合っているようだね」

「大和!?いつからいた!?!」

「さっきだけどき、1番に言うべきこと忘れてたんだ

えっと六花だっけか、あの時はほんとうにありがとう

助けてもらえたし、あの店に来る外国人の客も増えた

面白い日本人がいるって噂になってさ」

「それだけ？」

「あ、ああまあそうだけど……」

「そう、残念だけど多分2度と行かないと思うから

樽が消えて客足が減っていくのを日々の楽しみにしなよ」

「味にだって自信あるさ!!」

「へえ、あの程度の味ならあたしにだって作れそうだけど？」

「嘘言うなよ」

「ま、まあまあ」

「九頭竜は首を挟まないでほしい、これだけは許さない」

「許さない？人を頼るしか出来ないきみが？」

「ああ訂正しろよ」

「嫌だ」

「ならあそこのラーメン屋で本当にオレら以上のラーメンが出来るのかやってみせてよ」

「だから嫌だつてば、やる必要がないもん」

「出来ない言い訳？なら最初から噛み付こうとするなよ」

「へえ、面白い」

あー……この顔の六花は多分止まらねえだろ

でも六花がラーメン作るところなんて見たことねえけどな

「そつちの店にあるもの使わせてもらえばいいよね、あと無さそうなものはあたしで準備するから

日時は合わせるから、決まったら教えて」

「わかった、オレより旨かったら何でも言うことを聞く

オレ以下なら訂正して謝ってくれよな」

「それでいいんじゃない？」

大和と六花の話は終わって、やっと六花とのんびり話せる

「本当に大丈夫か？」

「まあ大丈夫でしょ」

適当な返事なのに大丈夫だと思わせられるのが六花の凄いところだよな

特別心配することはねえと思うから、オレは六花と小恋ちゃんの環

境作りでもこっさりやるかな

## どっちの料理deショウ!!

★大雅side

「今日帰り飯食いにいかねえ? 当然小恋ちゃんも」

「金がねーよ」

「そんならいオレが払ってやるからよ、小恋ちゃんからも言ってやれ」

「気持ちはありがたいのですが、六花ちゃんも来るんですよね?」

「いや、来ねえよ」

嘘じゃない、決して嘘ではない

「今日は六花が予定あるみたいだから先に帰ったしき」

なあいいだろ? じゃないとオレぼっち飯になるからよ」

「わかったからくつつくなよ」

「はい! 決まり♪」

六花と大和の勝負は2時間でどちらが多く注文を受けれたかということらしい、少し心配だからオレと昴と小恋ちゃんの3票も入れさせてもらおう

しかも複数人だろうが、六花が小恋ちゃんと向き合えるチャンスでもある

大和のいるラーメン屋に付近にはまあまあな大きさのポスターが貼られていた

『どっちのラーメンが食べたいか!!』

伝統の味VS素人

どっちの料理deショウ!!』

おいおいおい………

こんなもん作られたら六花でも怒るぞ?」

「なんだこれ?」

「ああ、クラスに大和って奴いるだろ?」

そいつの実家ラーメン屋なんだ、そこで勝負するらしいから参加し

ようぜ」

「大雅のおごりならもつと良いもん食いたいけどな」

「小恋ちゃんはこういう店に入らなさそうだし、少しは楽しみだろ？」

「は、はい、誰かとラーメンを食べに行くとなっても、チェーン店が主なので、こういうお店は初めてでドキドキします」

あー、小恋ちゃん可愛いわー

「おい大雅!!小恋に鼻の下伸ばしてんじゃねえよ」

「のばしてねえよ!」

駄弁りながらもラーメン屋に到着すると昴はため息をついた、当然その理由はわかる、六花と二人で来たラーメン屋に再度小恋ちゃんとも来るからだろう、オレに内緒で行った罰だと思え

「っしやーせー!!」

「ヤッホー、来ちゃったよ」

一瞬驚いた顔を見せたけど、すぐにいつもの顔に戻った

「何で来るのかな……」

「だってこんな面白そうなことしてるのに、行かない理由がないだろ？」

で?途中結果はどうなったんの?」

昴と小恋ちゃんはまだ状況を掴めていない様子でいたから、簡単に経緯を説明した

「あたしはゼロ、素人のラーメンにお金払えないってさ、完全にアウエイで気分悪い」

「言い訳か?御昴

だけど約束はしっかり守って貰うから」

「まあまあ、オレらから始まれば良いんだろ?」

六花のラーメン3つ良いかな」

「はいはい」

六花が目の前でラーメンを作ろうとしている姿は他の客も当然のように見ていた

3人分を別々だけど同時に作る姿はラーメン屋ならではの豪快さは無くとも動作の一つ一つは目を奪われる

「はい」

「サーンキュ」

多分オレら全員が一口食べて同時に思った

「旨っ!？」

「あっさり系のスープなのに少しだけとろみがある不思議な感じだな」

「六花ちゃん凄いです!初めての感覚ですよ」

それだけで十分だったはずなのに六花は更にラーメンの上にドデカイ肉を乗せてきた

「御昂!?経費は決められた範囲って言っただろ?」

「ん?これはお肉じゃないよ?」

オレですら肉かと間違える見た目に驚きながら六花に聞くと、簡単に答えてくれた

「これは植物性タンパク質、大豆だね」

「大豆?大豆って納豆とかの?」

「そそ、それを固めたものを照り焼きにしたものだから、経費なんてほとんどかからないし健康的」

周りの客もラーメン屋に似合わない匂いにつられて、六花への注文が一気に殺到した

それもそうだ、安い値段なのにこんな肉っぽいものを乗せられたら食べたいに決まってる

それから2時間もかからず六花の材料は見事に無くなった

「はい、あたしの勝ち」

結果は同情してやりたくなるほどの差が出来上がっていた

「何で…何で負けたんだ…」

「そんなの、あたしの作った方が美味しかったからでしょ」

きみ程度になにか命令するのもつまらないし、賭けは無しにしてあげるよ、帰ろっか」

多分味だけで見れば大和だって凄いとわ思うけど、六花は味だけでなく、料理を魅せにきたところが決め手だろう

出来上がるまでの一連の流れを目で追ってしまいうくらいだったからな

「来てくれてありがとう」

「当然だろ」

「六道さんも西城さんも来てくれなきゃ注文を取れずに負けるところだったし、本当に感謝してるよ」

「似合わねえこと言うなよ、調子狂うな」

「六花ちゃん、この後少しだけ二人で話したいけど大丈夫ですか？」

六花はスマホを見て時間を確認するとすぐに答えた

「じゃあどこか寄って行こうか、大雅と六道さんは先に帰ってなよ」

小恋ちゃんもしっかり言えたじゃんか

心配する昴の肩を組んでオレと昴は先に帰った

オレは心配なんてしてない、六花なら大丈夫だと信じている

## 六花の気持ちと小恋の心

### ★六花 side

「何か暖まるもの頂戴、西城さんは？」

「あ、あたしも六花ちゃんと同じもので……」

「適当な頼みかたなのに店員はしっかりと答えてくれた

「でしたらこちらのジンジャーミルクティやハニージンジャーミルクティがおすすりめです」

「じゃあ前者の方で、それと何か食べる？」

「随分と緊張してる様子だね、こんなんで話が出来るとかな

「あ、あのあたし今、持ち合わせそんなにないので……」

「ああ、大雅と来たときはそんな心配してなかった

「彼女にも同じものをお願い」

「かしこまりました」

「店員は綺麗なお辞儀をしてあたしらの注文をとり終えた

「あたしお金をそんなに持っていませんよ？」

「いいよ、あたしが払うから

「……さ、大雅に教えてもらった場所なんだけど良い雰囲気でしょう？」

「でも……」

「お酒は口を滑らかにする、そして甘味は頭を整理できる、だから呑まれない程度にお酒を飲みながら甘いものをつまむのが話するのに最適なんだって、よく父さんが言ってたけどさ」

「あたしらは甘味のみで頭の中整理しながら話そうよ」

「西城さんが次の言葉を探しているうちに頼んだケーキと飲み物が運ばれてきた

「食べてみなよ、あたしですら美味しいって思えたくらいのもんだ」

「少し戸惑いながらも視線はケーキの方をしっかりと捕らえている

「ならあたしから話そうか」

「フォークを皿に少しだけぶつけて音を出して西城さんの視線を



奪った

「は、はい」

「まずは本当にごめんね、あたし六道さんのこと昔好きだった人と重ねて見ていて、そのうちに好きがどんどん強まった

いつそのこと襲われて既成事実でも良いかもって思えるくらい」

「その……六花ちゃんが好きだった人って」

「前にあたしの部屋で話したでしょ、もう死んじやったよ」

「ごめんなさい……」

「あやまらないで、六道さんは西城さんを選んだっていう事実は結構前から受け入れていたし、しっかり祝福していたから」

「じゃあ……じゃあ何であの時あたしに恨まれるようなことを言ったんですか？」

「あの時あたしが別のことを言っていたらさ、西城さんは六道さんと別れてたでしょ、それでいてあたしと六道さんが付き合えば良いとまで思うと分かっていたから

だからあたしだけが嫌われれば済む解決策を選んだの」

「あたしの心を計算したってことですか？」

「いや、人の心は分からないから、見えるところから消去法で消していった感じかな」

「それで六花ちゃんの導きだした答えが……」

「六道さんの幸せ」

「ズルいですよ、そんな事……」

「そうだよ、ズルいんだあたしは、父親譲りでね」

ケーキに切れ目をいれて一口サイズを口に運んだ

「西城さんは六道さんのことをまだ信じられないでいるの？」

「あたしは、あたしを好きだって言ってくれた昴くんを信じています」  
「ならそれで良いんだよ」

ミルクティを飲み終えて次にコーヒーを頼んだ

「あたしからの話も良いですか？」

「いいけどその前に、ケーキ食べなよ」

不安そうな顔をしていたのにケーキを食べた途端に雰囲気が出る

くなつたのが分かつた

「美味しかった？」

「はい、とても……ではなくて、あたしの話も聞いてください」

「はいはい」

「あの時たくさん叩いてしまつて本当にごめんなさい」

「あれは正解だよ」

「それは六花ちゃんだけの答えです、あたしは六花ちゃんを嫌いになつて昴くんからも遠ざければ良いつて簡単に考えていましたけど」

「ずっと心がチクチクしていました、四人で集まっていたあの時がどれだけ楽しかったか昴くんと話してようやく気付いたんです」

あたし達には六花ちゃんが必要だつて」

まっすぐ大きな瞳で見られながらそう言われた

「流石に恥ずかしいね、そんな直球ど真ん中で言われると」

「そんなつもりで言ったんじゃないですよ」

「でも良かったよ、西城さんとはまだ仲の良い友達でいられそうで」

「でも昴くんは譲りませんよ」

「あたしには大雅がいるから、もう六道さんは諦めているよ」

「本当ですか？」

「本当に」

「本当の本当ですか？」

「本当の本当に」

西城さんは力が抜けるようにテーブルに両腕を置いて安堵の息をついた

それにしても、テーブルに乗つかる程の胸というのはどういう事なのか

あたしはテーブルに乗つかるどころかかかする程度しか無いのに

「ねえ西城さん」

「西城さんなんて硬い呼び方は無しにして下さい」

あたしは六花ちゃんのこと全部許しますから

大雅くんみたいに小恋ちゃんとか昴くんみたいに小恋って呼んで下さい」

「それじゃあ小恋っておっぱいのサイズいくつ？」

「きゅっ……急に何てこと聞くんですか!？」

「いや、羨ましいなって思ってる」

「気にしているんですから、そういうことは聞かないでください」

「なら聞かないから触らせて」

「余計嫌です!」

「ケーキもう一個頼んでも良いから」

その一言は小恋の苦渋の選択のようで、悩ましている

「服の上からちよつと触るだけですよ」

計画通り

「すみませーん、テラス席移動しても良いですか？」

店員は快く受け入れてくれ、テラス席で嬉しそうにケーキを食べる小恋の胸を凝視した

大雅や六道さんがあたしの誘惑に乗らないのってやっぱり胸かな？

あたしもあれくらいバインバインなら良かったのに

「それじゃさっそく」

「ちよつとだけですからね、まだ昴くんにも触らせたこと無いんですから」

六道さんにそんな度胸が無いことくらい知ってる

服の上から軽く撫でるように触って、自分の胸も触る

「あ——————!!」

おもいつきり揉みしだいてやった

「なんだこれは……あたしと同じ人間なの？」

どうしたらこんなに成長するのだ」

もう軽くなるとどころではなく、両手で鷲掴みにして揉み続ける

……

「ちよつと……」

……

「六花ちゃ……………」

……

「ちよつと触るだけって言ったじやないですかあ」

「そのつもりだったんだけどさ、Dカップ御馳走様でした」

「な、何で分かるんですか？」

「そりや揉んだし？」

「酷いです酷いです！」

「アハハハハ、無いものこそ欲しくなるんだよね

あたしのも揉んでおく？」

「六花ちゃんの揉むほどないじやないですか」

「人には言つて良いことと悪いことがあるんだよ？」

そのあとは適当に謝り合いながらも大雅といるときとは違うたのしい時間を過ごすことができた

部屋に戻ると穴から六道さんが顔を出していた

「なに？」

「どうだったよ」

「小恋に聞けば良かったんじゃないの？」

まあ大丈夫だったよ、問題はないから」

「そっか、それはそれと小恋から連絡が来てな

お前に汚されたってあつたけど何かしたのか？」

「さあ？…(´▽｀)想像にお任せしますよ

それと大雅もいるんでしょ？…こっち来なよ」

出ていた顔はすぐに大雅に変わって穴からこっちに移動してきた

「おかえり六花」

「うん」

## 大雅の気持ち

### ★大雅 side

チャイムの音と同時にドアを開けて六花を出迎える

「相変わらずのはやさだね」

「オレのセンサーが六花を感知するんだぜ」

「なにそれ」

六花もちよこちよこオレの家に来るようになり、その度に何かと手土産を持ってきてくれている

そのお陰か母さんからはは中々の好評で娘に欲しいとまで言われていた

「別に何も持ってこなくても良かったのに」

「そういうわけにはいかないの」

「だってオレは何も持って行ってねえじゃん」

「そのかわりに大雅からはたくさんの気持ちを貰ってるから」

すげー嬉しい、心から好きな子にこんなこと言われると本当に嬉しいんだな

少し浮かれながらもいつも通りコーヒーを準備していると親父に話しかけられた

「大雅、お前も2年生になったならそろそろ将来のことを考えろよ」

「はあ？ 兄貴は自分の好きなことしてんのにオレにはそんなことまた言うのかよ」

「あいつは必ず後悔する、大雅にはそうなってほしくないから口を酸っぱくして言っているんだ」

「オレは六花と別れねえぞ」

「傷口が浅い内にけじめはつけておくんだ」

「うるせえ!!!」

母さんは六花の家族のこと聞いても何も言わなかったのにてめえはそこまで家柄が大事なのかよ!!

ふざけてんじゃねえぞ!」

六花の為に買ったコーヒーカップが落ちて割れた

「チツ……、てめえの後継ぎなんてオレはしねえぞ

そんな事言ってる限り絶対な」

割れたカップを拾いながらそう言った

「誰のお陰でこんな暮らしが出来てると思ってるんだ!!」

お前の気持ちはよく分かった、なら私から話をしておこう」

オレの部屋に向かおうとする親父を意識したせいかカップで指を少し切ったが、その指を抑えることなく親父の後を追いかけた

「入るぞ」

「勝手に入ろうとするんじゃないよ!!」

言い合いながら部屋に戻ったオレに六花は少し驚いた様子でいた

「大雅のお父さんまでどうしたの?」

「大変言いにくいのだが、大雅と別れてほしい」

その言葉に六花の眉が少しだけ動いた

「あたしが何か気に触ることをしましたか?」

「こんな奴の話を聞く必要はねえよ六花」

「ううん、あたしが聞いておきたいの

でも大雅にも一緒に話を聞いてほしい、それは構わないですよね」

六花の返事に親父も頷いた

「大雅には以前から言っているのだが、婚約者がいるんだ」

「そうなの?」

「オレはキツパリ断ったって言っただろうが」

実際に会って断ったのは事実だ、オレには今とても大切な人がいるからこの気持ちは変わらないと伝えてある

「大雅もこう言ってる聞かないんだ、だから君から大雅と別れるように話してほしい

頭の良い君なら分かるはずだ、私も有数のグループ企業で社長をし

ていて、相手方も同じように有数の企業の社長をしているんだ」

「なるほど、確かにお互いWinWinの関係になるお話ですね」

「分かってくれるか」

「あたしのような凡人が大雅には不釣り合いということですよね」

「んなことはねえから、六花はオレの側にいろ」

親父はオレの方を見ることなく六花の答えに気まずそうになりながらも頷いた

「それとな、これはまだ大雅にも話していなかったのだが、相手方の娘さんも大雅に好意があるらしくてな、近々転校して来ると言っていた」

「その時にあたしと大雅が付き合っているとこを見られて関係が拗れる危険性がある、そうなつてくると会社全体にその影響が及ぶ可能性が考えられるというわけですね」

「ああ、言つては悪いが君では大雅と釣り合いはとれない、釣り合いがとれない人同士は絶対に上手くいかなくなる時が来る、傷が深くなる前に別れるのが賢い選択だ」

「話は分かりました、大雅と二人で話をさせてください」

「良い返事を期待している」

オレから何か言う事はほとんど無く親父は部屋から出ていった

「六花……」

「ごめんね大雅、コーヒー貰えるかな」

「あ、ああ」

言われるがままに準備していたコーヒーを部屋まで持っていった

「最近の大雅のお父さんの態度を見ていたら何かしらあるかなーって思ってたけど、まさかこんなこととはね」

「嫌な思いさせちまったな」

「でも大雅は家のことを考えるべきだよ、あたしはもう大丈夫だから」

少しだけ目を背けながら言っているのはすぐに分かった

コーヒーを持っているからではなく、別の気持ちが六花にはあると  
いうことが

「六花……オレの子を産んで欲しい」

「急だね」

「既成事実でも何でもいい、オレは六花と別れたくない」

「それは自分の親の会社のこれからを一切無視したやり方だよ」

「そうだろうが会社がどうなるかがオレは構わない、ここでただ流されたらオレは多分一生後悔する」

それがオレの気持ちなんだ」

六花は少し笑っていつも通り『なにそれ』って返事を返された

六花をオレから離れられないようにしたいって思っていたはずなのに今ではオレが六花から離れたくないとまで思わされている、そう思うと自分でも軽く笑えるよな

「まだ子作りはしたくないけど、大雅の気持ちは分かったよ

一緒に説得してみよ？あたしもこんな形で大雅と別れるなんて嫌だしさ」

「いや、親父は一度言い始めたことは滅多なことじゃ曲がらねえ、最悪な場合オレが監禁されるかもな」

「逃げるの？」

「でもそれは格好悪いだろ、オレが何とか納得させてみせるから、だからオレを信じていてほしい」

六花は安心した顔で頷いてくれた

親父の部屋に入りオレがどれ程六花を大切に想っているかを話した、頭で考えるよりも口が先に動き続けた為か、何を話したかなんてほとんど分からないが

最終的に出た親父の答えは

「もういいー勝手にしろ!!」

ただ私が言った通り傷付く結果になることだけは覚悟しておけ!!

相手方の娘さんが転校してくることはもう変わらんからな!あの娘がいかにか自らが無力な存在か知れば諦めもつくだろうしな!!」

「その言葉忘れんなよ」

親父の部屋を出ると目の前に六花がいた

「うわっービビったあ」



「ちよつとだけ心配だったからさ、聞き耳立てるつもりはなかったんだけど」

「もしかして全部聞いていたのか？」

「ほとんど……」

「恥ず!!なにこれ?!超絶恥ずかしいんだけど!!」

「嬉しかったよ、そこまで想ってくれてたなんて」

「キャーキャー!!もう止めて!!オレのライフポイントはゼロよー」

「そう思ってたよ、そこのポイントが六花からオレの胸に飛び込んできた」

「本当に嬉しい」

「どうしたんだよ急に、六花らしくないな」

「大雅の気持ち凄く伝わったから、だからこの気持ちを忘れないようにしたいの」

「にしたいの」

「そう言ってくれるのは嬉しいんだけどさ……」

「落ちて着けオレ!六花はまだ子作りしたくないって言ってたじゃんか」

か

「良いよ」

「こんな雰囲気なのに良いのか？」

「あやし達のこと見せつけてやろうよ」

「もう否定なんてしなかった」

もう否定なんてしなかった

部屋の鍵をかけて六花を出来る限り優しくベッドへ押し倒した

「あやし初めてだから、どうすればいいのかよく分からないけど」

「大丈夫だよオレだぜ?」

「大丈夫だよオレだぜ?」

上着を脱がすと六花は恥ずかしそうに胸を抑えた

「あやし小恋みたいに大きくないから……」

「誰の胸かが重要なんだよ、大きさは二の次だ」

正直なところオレは巨乳好きだって思ってたけど、小さくても良

いじゃないか六花のもの

思ったよりも小さい体は、慎重に扱わないと壊れてしまいそうだと

思えるくらいだった

どのくらい時間をかけたのか分からない  
ただどれだけの時間を費やしても六花のすべてを感じたい  
そう思っていた矢先、オレの肩に置いてある六花の腕に力が入った  
のが分かった

「もういつでも良いよ、大雅の優しさは分かったから」  
「分かった」

さて、暴れん棒タイガーの出番だが…  
慌てるな、慎重に優しく、今日だけは暴れん棒じゃなくてジエント  
ルタイガーになれ

少し押し当てただけで六花はビクついた  
「まだ怖い？」

「うん、でも大丈夫だから」

あたしはちゃんと大雅を受け入れられる」  
「痛かったら言えよ」

六花は小さく頷きながらもオレをまつすぐに見てくれていた

ゆっくり優しく六花を包み込んだ

ただの行為ではなく言葉にするのは難しいのだけど、なにか今まで  
してきた中で1番特別な感じがした

「どうだった？」

「……………」

「六花？」

布団にくるまったまま六花は眠っていた

「ハハハ、疲れて眠っちまったか」

一旦風呂に行って戻ってくるのと六花は目を覚ましていた  
「起きたか？」

「うん、ごめんね眠ってたみたい」

「のんびりしてりゃいいさ」

「それにしても痛かった」

無防備過ぎる格好で起き上がった六花の頭を軽く撫でた

「悪かったよ、優しく出来なくて」

「ううん、痛くなくなるまで頑張るからさ、ちゃんと付き合っただけ」

「毎日でも良いぜ」

「痛いからまだ無理」

初めて見たその笑顔は多分…いや、絶対に忘れない

『これだけのために頑張れる』そんな下らないことは無いって思っていたのに、今この時だけは理解することが出来た

## 珍しい2人

### ★小恋side

六花ちゃんが髪を切ったとき、凄く綺麗な長髪をバツサリ切っちゃって勿体ないなあって思いました

その時は少し幼く見えていたはずなのに次第にあたしよりもずつとずつと年上のように思えてきます

可愛いのは分かるけど、それだけではなく内側で光る何か六花ちゃんにはあるんだなあって思います

その何か六花ちゃんの誰にも負けない魅力の1つ……

「小恋？」

「な、何？六花ちゃん」

「この前のお礼ってことでファミレス来たのにずっとブーツとしてるんだもん、小恋ちよつと変だよ？」

六花ちゃんのコーヒを飲む姿に見とれていたなんて言えません！

「えっと、六花ちゃんこそ最近大雅さんと距離が縮まった感じがしますが、何かあったんですか？」

「そんなこと聞きたかったの？」

「はい」

「特別な事なんて何にもしてないよ、ただ恋人としての距離が小恋よりも少し縮まるのが早いだけ

お互い無理のないペースで進めるのが1番良いんじゃないかな」

「そうなんですけど、あたしまだ昴くんとキ、キキキキスも出来ていませんし、六花ちゃんから見たあたし達ってどんな感じですか？」

「六道さんと小恋の関係ねえ」

「はい」

「仲の良い小学生みたいかな」

「小学生……ですか」

あたし達と六花ちゃん達は付き合い始めた日はそんなに変わらな

いはずなのになあ

「六花ちゃんはえつと…あの…キスを何回くらいしたの…?」

「数えちゃいけないよ、今までどれだけ歯を磨いたか覚えてるかどうか聞くようなものだよ?」

「そうなのかな…」

「あたしからすればそんな感じ、ていうか小恋はあたしと違って立派な武器があるじゃん

それを使えば六道さんなら喜んで飛び付いてくるよ」

「武器ですか?」

「うん、その胸」

「コーヒートを混ぜるために使っていたスプーンが胸へ向けられた

「ちよつ…ちよつと何を言っているんですか!」

「そのままの意味

「少しくらい触らせてあげても良いんじゃないの?」

「六道さんは絶対に自分から手を出せるような人じゃないってことくらい分かっているでしょ?」

「まあそれが優しさともいえるだろうけどね」

「大事にされているのは分かっていますけど、昴くんから来てくれるのを待つというのは難しいのでしょうか」

「ちなみに最初にエッチするときはあたしから誘ったよ

「大雅は慣れていると思うけど、大事にされているからこそ我慢させてるって思えたからさ」

「大人ですね」

「あたしがもつと近くにいたかったから自分を見せただけ、あたしはただのワガママだ」

「六花ちゃんはコーヒートを飲み終わるとすつと立ち上がった

「さつきも言ったけどさ、お互いのペースを大切にすることが何よりも大切だとは思うかな、デートを重ねるだけでもお互いの距離は確実に縮まるから

「ごちそうさま、あたしはそろそろ行くよ」

やっぱり六花ちゃんはすごい、常にあたしの数歩先を歩いてる感じがする

「まって六花ちゃん、途中まで一緒に帰ろう」  
「うん」

別れ道までいろんな事を話せました

あたしもまた少し進めた気がします

「またお話ししましょうね」

「予定が合えばね」

## 修学旅行

★昴side

「修学旅行そろそろだよな♪」

「そうですね、沖縄楽しみです」

「オレは女の子達の水着が見れるのが楽しみだな

当然六花の水着姿も楽しみだけだよ」

「お、オレだって小恋の水着楽しみだ」

「昴さんの期待に応えられるように可愛いの準備しますね

近々でいいので六花ちゃん水着を買いに一緒に行きませんか」

小恋もなんだか嬉しそうだ、やっぱり雑誌とか見ると女物の水着ってたくさんあるしな、こういうのも楽しみの一つなんか

「買い物に付き合うのはいいけどさ、あたし修学旅行行かないよ？」

「はあ!？」

小恋ですら驚いてる、ていうか普通の反応だ

高校生活で最も楽しみで最大のイベントに参加しないというのだから

「なんで行かねえんだよ、大雅なんて放心状態じゃんか」

「え?だって時間の無駄じゃん」

少し意識の飛んでいた大雅が戻ってきて御昴の肩を掴んだ

「せっかく泊まり掛けでイチャイチャ出来るのに何で!？」

「それなら二人で旅行に行けば良いだけでしょ?」

「それも悪くない……けど違う!」

ほら小学生の頃とか中学の時とかみんな旅行に行って、たくさん楽しい思い出とか作ったりしたろ?」

「大雅のくせに良いこと言うな」

「くせには余計だ」

「あたしの修学旅行の思い出?」

みんな自由行動しているときバスの中で1人本を読んでいたことと、一緒に部屋で良いって人がいなかったから先生の部屋で寝た思い





## 修学旅行く沖繩く

★大雅 side

「沖つ縄くく!!」

「うるせえな、この程度ではしゃぐな」

「だつてさ、あんな鉄の塊がオレらを運んだんだぜ? スゲー感動的じゃんか」

「昴くん子どもみたいです」

「六道さん頭のなかガキだしね」

「うっせー!」

「お前がうるせえよ、んで? 初日はどこ見るんだっけ?」

「なんだよ大雅、そんなことも忘れてんのか?」

最初はひめゆりの塔だろ」

「あー……どうするよ六花」

「見てもつまらないし米軍基地でも行く?」

「その方が数倍楽しそうだな」

「だ、ダメですよ二人とも、修学旅行なんですから」

研修活動も兼ねてみんなでひめゆりの塔行きましょう」

そういえば修学旅行って元々はそんな意味だったっけ、ていうか何で昴はこんなひめゆりの塔を楽しみにしてるんだ?」

「ねえ六道さん、ひめゆりの塔で何したいの?」

「そんなもん塔っていう程だしスゲー高いんだろうし、てっぺんまで登って写真撮るに決まってるだろ」

「ばーか」

小恋ちゃんまで口を抑えて笑っていたし、オレですら吹き出した

「な、なんで笑ってんだよ」

「はあ……じゃあ行こうぜ」

昴がひめゆりの塔を慰霊碑だと理解したのは到着してからしばらくしてからだった

「で？良い写真は撮れたか？」

「うるせー！誰でも塔って聞いたら登りたくなるだろうが！」

「バカと何とかは高いところが好きらしいからね」

「六花ちゃん、隠せてないです……」

「バカとなんだよ高いところが好きって」

そんなバカ話をしながら時間まで記念公園でブラブラして、またク  
ラスの集団へと戻った

そのあとはよくわかんねえ寺に行かされたりと微塵も面白いと感  
じることのない時間が無駄に過ぎていった

「やっとホテルか……」

「スゲー！なんつーか……スゲーな、大雅」

「それでもねえだろ」

沖縄に来て昴からスゲーって言葉をこれでもかってほど聞いた気  
がする

いい加減うるせえな

ホテルの部屋はオレと昴と大和で1つの部屋

ちなみに六花と小恋ちゃんも同じ部屋で振り分けられているらし  
い

「なあ大和、なんでわざわざオレらと同じ部屋希望してきてんだよ」

「別に良いだろ、そんなことよりさ売店見に行かねえ？」

「オレだって好き好んで大雅と同じ部屋になった訳じゃないけどな、  
昴に誘われたところに大雅が居ただけさ」

「まあまあ大和もそういうこと言わないでさあ」

六花に負けてお情けまで貰ってる大和は何だか気に入らない

だけど昴のやつがいつの間にか仲良くなっていたらしく断るに断  
れなかったのはオレも悪い

だからって仲良く出来るかと言われても『はい、出来ます』なんて  
答えは無いだろう

少しモヤモヤしながらも売店に3人で向かっていくと他の生徒の  
中に六花と小恋ちゃんもいた

オレが声をかけようとするよりも速く、大和が六花に話しかけた  
「御昴、オレはお前が欲しい！」

オレの嫁になってくれ」

多分他の生徒にも聞かれていただろうが、六花は恥ずかしがることなく真顔で答えた

「死ねよ」

「いや、よく考えてみてほしい」

オレと御昴が協力すれば敵うラーメンなんて無い

そうすれば国内どころか海外にまで拠点を置くことが出来るようになるんだ」

「いや、死ねよ」

「父親にも話した、そういう未来像があるって……!?!」

話の途中で六花の蹴りが大和の股間をえぐっていた

思わずオレの玉ちゃんもキュツとしてしまった

「なんでこんな人と大雅が同じ部屋で明日から一緒に回らなきゃいけないの?」

「昴に言ってくれ……」

そういう昴は小恋ちゃんと楽しそうにお土産を選んでいた

「そういえばさ、こんなの見つけたよ」

六花が笑いながら見せてきたのはパイナップル味のコンドーさんだった

「なんつーもん持ってんだよ、はやく元あった場所に戻してきなさい」

「もう買っちゃったし」

「……」

これはあれか? 修学旅行中でもヤっちゃっていいともーってことか?

六花……御主もなかなか……エロよのお／＼

「なに鼻の下伸ばしてるの? 今の太雅超絶不細工だけど」

「だってそれオレと使うためだろ? 嬉しいに決まってんじゃん」

「あたしが痛がるから太雅が満足しきれずにいることくらい分かっているつもりだからね」

「ただど修学旅行中にしようとは思ってないよ、そんな見境無くやる猿になるつもりは無いから」

嬉しいけどちよつとガツカリな気持ち

「そう言われて箱でコンドーさんを渡されて六花と小恋ちゃんは部屋に戻っていったが」

これだけで終わらないのが修学旅行なんだよなあ

## 修学旅行く沖繩く

★大雅side

「よっしゃー！そろそろ行こうぜ」

「は？どこにだよ」

「どこって女部屋に決まってるだろ？」

「バレたら停学だぞ？そんなリスク背負って行かなくても明日また一緒に行動できんじゃないん」

「バレたら停学だから面白いじゃんか

まあ昴が来ねえならそれでいいけどな、オレは3Pでも良いし♪  
そう言うとすぐに昴は飛び付いた

「小恋に変なことしないか見張るためにオレもついていくからな！」

「建前が立派なものだな、さて女部屋はこの階の1つ上、エレベーター前には教師が交代で立ってる」

「く、詳しいんだな」

「抜け出して誰が捕まったかは随時連絡しあってるからな、オレの情報網ナメんなよ」

「じゃあどうやって抜け出すんだよ」

「まあもう少し待てよ、そろそろ次のやつらが捕まる

その時非常口から一気の上に行くからよ

六花には連絡してあるし、オートロックも外して貫ってるからな」

六花のいる部屋は非常口のすぐ隣、つまりオレらのいる階さえ抜け出せばゴールは見える

少しするとベランダから抜け出す生徒がいるとの情報を受けたらしい教師は外へも見回りへ向かった

「よし、人数が少し減ったな

後は我慢できなくなった奴らの負けだ、息を潜ませてる教師の的になつてくれる誰かが……」

予想通り教師に捕まった生徒の声が聞こえた瞬間部屋を飛び出して非常口へと全力疾走した

「はあはあ……な？簡単だったろ？」

「なにがだよ、寿命縮まったぞ」

「スリルが良いんだろうが、そんじや行くか、ゴールはすぐそこだ」

読みは正しかったらしく非常に非常口前に教師はいないで簡単に六花達の部屋に入る事が出来た

「六花!!」

「ん〜……」

「昴くんと大雅くん!」

寝ていたらしい六花と眠ろうとしていたところをびっくりしながら飛び起きた小恋ちゃん

やっぱりこの二人は点数高いわ

「遅かったじゃん」

「タイミングは大切だからな」

「どどどどうして?」

「大雅に連れて来されたんだよ、別にやましい気持ちがあつた訳じゃないぞ」

「んだよ昴、結局付いて来たのはお前だろ」

「そんなことよりはやくこっち来なよ」

六花はベッドをポンポンとしてオレを隣に座らせてくれた

その流れでか昴も小恋ちゃんのベッドの上に座つたのだが、二人の

隙間が気になる

「昴と小恋ちゃんももつとくつつけよ」

「オレはプラトニックなんだよ」

「ダメダメ、小恋からもつと頑張らないと」

六道さんなんだからさ」

六花の言葉で予想外にも小恋ちゃんから昴に少し近付いた

「あたしも六花ちゃん達みたいにもつと親密になりたいって言ったら昴くん怒りますか?」

昴はこれでもかかってほど首を横に振っていた

それを笑い合いながら四人でだらだらと話をして時間が過ぎていった

ガチャガチャという音

「やべ!!オレとしたことが女部屋の見回りの時間を考えてなかった」

「オレらの部屋は大丈夫なのかよ」

「その辺は抜かりないぜ」

とりあえず隠れて寝たふりだ」

急いで六花の布団に潜り込んで身を潜めた

鍵を開ける音と同時に近付いてくる足音

怖いというよりやっぱりわくわくしてしまう

それが男って生き物なんだろう

ちゃんと寝ているのを確認できたのか教師は部屋から出ていった

「ふう……つて昴は？」

「ここだよ……」

上を見上げると天井の角にベツタリくっついてる昴がいた

「忍者かお前は」

「小恋の布団に入ったらオレはじつとしていられない自信があるからな」

「どこに隠れたのかドキドキしました」

「もう遅いしオレらも戻るか」

「そうだな、オレの心臓がもたない」

「いつてもまた誰かが見つかるまで待たなきゃいけないんだよな

「帰りは大丈夫なの？」

オレの考えを予想していたかのような六花の質問に素直に答えた

「なるほどね、ならここで寝れば？」

「ちよつと待てよ御昴」

「なに？」

「オレはどうすんだよ」

「小恋のベッド使えば良いじゃん心配しなくても小恋はあたしと一緒にベッドで寝るから」

「まあそれが無難だな、小恋ちゃんのベッドでオレらは寝てようぜ」

安心の土台は完成、六花と寝れないのは残念だけどまだ修学旅行は始まったばかりだしな

一時間もすればあれだけ嫌がっていた昴は爆睡していた、ある意味うらやましい性格でもある

こうやって環境が変わってもすぐに眠れる凶太い神経が隣のベッドでどちらかが起き出したのが分かった

ベランダへ出て数分戻って来ない

「どうした?」

「ああ大雅、起きてたんだ」

「六花だったのか、なかなか戻って来ないからどちらか分からなかったけど心配して見に来たんだよ」

「なにそれ、もしも小恋だったらあたしだって少し嫉妬するよ」

「六花が嫉妬する姿を見てみたい気もするけどな」

一緒にベランダへ出てみると地元じゃ見られないほどの星が全体に広がっている

「昴じゃねえけど、すごいな」

「うん、吸い込まれそうなくらい」

ねえ大雅、あれからお父さんとはどう?」

「冷戦みたいな感じだな、でも後悔はしてねえし、これからするつもりもねえ」

「あたしは大雅が本当に幸せになるには手を引くべきなんじゃないかなって少し思うこともあったけどね」

「別れたら多分泣くぞ」

「あたしも大雅が泣くところ見てみたい気もするけどね」

楽しそうに笑う六花を思わず抱き締めた

「オレの幸せはオレが自分の手で掴みとるから他の奴にオレの幸せの定義は決めさせるつもりはねえよ」

それでオレの幸せには六花が必要だからな」

「ごめんね、こんなことで悩んでて」

六花から少し離れたけど手だけはしっかりと繋いだ



「これ以上くつついてたらしたくなる」

「紳士的じゃん」

「修学旅行中は我慢するんだよ、だから貰ったゴムも持ってきてない」  
「そっかそれは残念、代わりに口でしてあげよっか？」

六花の小さな口から出てきたその言葉はオレを屈服させるには十分過ぎる程だった

「本当に良いのか？」

「したことないから下手かも知れないけど、それでも良いなら」

「お願いします」

45。の完璧なお辞儀、ベランダに座り込んで既に元気100倍タ  
イガーマンがこんばんはした

「改めて見ると面白いね、別の生き物みたい」

「キヤー恥ずかちい」

初めてというわりには躊躇なく口をつけた

やばっ!!これ今までできて貰ったなかで1番キク

こういう素質あるんじゃないのか？

結構頑張つて耐えたつもりだったのに、あっけなく果てた

「わ、悪い六花、外にペッてしちゃえ」

六花は少し苦しそうに上を向いて飲み込んだ

「六…花…:…?」

「ケホツケホツ…:…本に書いてあつた通りで変な味

だけど大雅の味覚えたよ」

「無茶すんなよ」

ペットボトルのお茶を差し出すとお礼と一緒に六花はお茶を飲ん  
だ

「でももう飲むのはしたくないかな」

「ハハハハ…:…」

それはそれで少し残念

「あたし達も寝よっか

ソファアール空いてるから一緒に」

「そうだな」

オレと六花は一人用のソファ―に無理矢理二人身を寄せあつて眠りについた

## 修学旅行く沖繩く2日目

★昴side

「昴くん、あたしを捕まえて下さーい」

「ハハハ待て待てく〜」

「アハハハハ」

「ウフフフフ」

「エヘヘヘヘヘ」

「デュフフツウエヘヘ」

「昴くん？」

あれ？オレ確か小恋とビーチでイチャイチャしてたような気がしたんだけど

「昴くん大丈夫ですか？」

「あ、あー…うん、ていうかなんでオレの家に小恋…」

思い出した!!修学旅行中だったんだ!!!

ていうことはさっきのは夢かよ!!

「おはよう小恋」

「おはようございませす昴くん」

時間を見るとまだ5時半、7時起床の8時朝食だったよな

なんでこんな時間に起こされたのだ

「昴くん見てください」

少しだけ楽しそうにオレの腕を引っ張ってソファの方へ移動させられると、大雅の上で丸まって眠っている御昴を見せられた

「なんでこいつらここで寝てんだ？」

「あたしも起きたとき六花ちゃんがいなくなつてびっくりしましたが、この姿を見たときなんだか可愛らしく思えまして昴くと気持ちの共有したいなって思っちゃいました」

なんだか六花ちゃん高名が作ったお人形さんみたいです」

確かにこいつつて黙ってればかなり可愛いんだよな、目が大きい上

にまつ毛も長いし、顔も大雅が一目置くほど整ってるんだ、小恋がそう思う理由も分からなくはないけど

本当に残念だな、こんなひねくれてるのは

「ちよつと昂くん、六花ちゃんのことみつめ過ぎですよ」

「ごめんな、でもオレは御昂と比べられないくらい小恋が好きだからな」

「そ、そういうのは反則です」

真つ赤になる小恋を見て完全に脳ミソまで目を覚ました

なにキザな台詞言っちゃってるのオレは、少し寝ぼけてたからってキモすぎだああ

「少しだけお散歩しませんか?」

オレの袖の裾をチマツと摘まむ小恋、断る理由なんてあるはずないだろ

急いで顔を洗って大雅達にバレないようにそつと部屋を出た

「流石にこの時間じゃ誰もいないな」

「そうですね、とつても静かです」

オレの心臓はうるさいけどな

「手を繋いでも良いですか?」

「繋ごうか」

目的地も無いのにあちこち一緒に歩き回って、昨日の夜見れなかった物を見て回った

手を繋いで歩いているだけなのに幸せだ、大雅達に唆されないのも良いものだ

途中自販機で飲み物を買ってのんびりしていると、教師も数人見かけ始め、担任に見つかり話しかけられた

「お?六道と西城か、朝早くからデートとは若いな」

「からかわないで下さいよ」

「ハツハツハ、まあ夜に女部屋に行ったり男部屋に行ったりしない限りはオレもうるさく言いたくないし、水を差したくないからな」

「そんなことしませんヨ」

「そうですよ」

「怪しい…が現行犯以外は目をつぶる

まあ高校の修学旅行は一生に1度だ、楽しめよ若者」

あつぶねー……

「戻りましょうか」

「そうだな」

素直にオレは大和が寝ている部屋に戻るために小恋とは階段で別れようとした

「それじゃまた後でな」

「待ってください」

「ん？」

「えっと……こんなところであれですけど

キスしたいです」

聞き間違いじゃなければ小恋はオレとキスしたいらしい

ふむ、キスカ……キス？…キス!?

キスってあれだろ？チューだろ!?

「ダメ…ですか？」

「ダメじゃない……けど……」

オレ恥ずかしながらキスしたことないから上手くないかもしれない  
「いい」

「あたしもしたことありませんから」

キスする!!大人の階段のワンステップ!

小恋の肩を軽く抑えて顔を近付けると、小恋も目を閉じて少し顎を上げた

ヤベー鼻息荒くなってないかな……唇力サカサじゃないかな

そう思っているうちにオレと小恋の唇は重なった

「エへへへ」

「なんだよ」

「なんだか嬉しくって笑っちゃいました、上手とか下手とか分かんないですから、あたし達はあたし達のペースで行きましょうね」

そう言っただけ階段を駆け上がる小恋の足取りは軽そうで、後ろ姿だけでも嬉しそうにしているのがよく分かった

多分そういうオレも今の顔は絶対に変わってると思う

## 修学旅行く沖繩く2日目

★大雅side

「だからよ、謝ってんだろ？」

「謝って済むと思ってるのか？団体行動だからこそ君らの軽率な行動が連帯責任でオレにまで迷惑がかかると自覚してほしい」

「バレてねえんだし良いだろ」

「バレた、バレなかったという問題じゃない

全く……昂からも言っちゃってくれ」

「良いんじゃない？エへへへへ」

昂のやつ様子がおかしいな、これはオレと六花が寝てる間に何かあったな

後でどこまでしたか聞いておく必要があるそうだ

多分最後まではしてねえと思うけど、あの胸くらいは揉んだんだろうな、ていうか揉んでなきやあそこまで顔が緩まないはずだ

「聞いているのか!!」

「あー分かった分かった、とつと朝飯食ってこようぜ」

こんなところで無駄な時間は過ぎしていらねえ、今日は午後から海に行けんだからな

他の奴に六花の水着姿を見られるのはちよつと嫌な感じもするけど、それくらい妥協できる

朝食を終えて、午前の糞みたいにつまらないグループ課題を済ませていざ海へ

「なんで大和はブーメラン履いてんだよ、気持ち悪いな」

「トランクスタイプの海パンなんて履けるわけ無いだろう」

「大和は身体が意外とがっちりしてるから似合ってるんじゃないのか？」

「そういう問題じゃねえだろうが」

早速嫌なもん見ちまった……

「おい大雅！海スゲー青い!!」

「それが売りたいなもんだからな」

「御昴達はまだ来ないのか？」

「なんで大和が六花のこと気にするんだよ」

「そりや未来のオレの嫁だからな」

「おいおい、いくら温厚なオレでもいい加減怒る……」

「お待たせいたしました」

もう大和なんてどうでもいい！

声のする方向を見るとデカイ胸!!!

それがバインバインと動く動く

「思った以上に良いモノをお持ちで……」

「てめ！なに見てんだよ!!」

「いいだろ別に、減るもんじゃねえし」

「何か見えないものが減る気がするんだ！」

「ど、どうでしょうか昴くん」

「スゲー可愛い!!もう他に目がいかなくらい」

「あ、ありがとうございます」

勇気を出してこれに決めて良かったです」

なーんかあいつらはいつらでいい雰囲気になっちゃったし、水を

差すのは流石に悪いか

「なあ小恋ちゃん、六花はまだ来ねえの？」

「あたしもいるよ」

その声に身体がビクツとした

オレとしたことが小恋ちゃんの胸を見ていて六花の存在を上書き

させてしまっていたとは

おっぱいとは時に恐ろしいものだ

でも水着姿が楽しみなのは本当だ

「なんで、Tシャツ着てんの?」

しかもTシャツには『北の国から』とだけプリントされた訳の分からないTシャツ



「大雅つてば小恋のおっぱいばっかり見てるんだもん  
ならあたしのなんて見たくもないでしょ」

これはヘソを曲げているのか……ちよつと可愛いな  
「大雅最低だな」

「はい、あたしでもそれはちよつと無いかなって思います」

「だから御昴を幸せに出来るのはオレだけと言っているだろう」

なんだこれ…、こういう位置にいるべきキャラクターはオレより昴  
だろうが

「まあいいや、小恋と比べられるのは初めてじゃないし」

少しふくれながらも六花はパラソルの下へ向かって行った

「大雅くん、六花ちゃんをもつと誉めてあげてくださいね」

「そうだぞ大雅！」

……？こいつらにそんなこと言われるなんて末期か？

「分かってるよ、大和がぼっちになるからお前ら3人で遊んでろ、オレ  
も六花連れてすぐに戻るから」

そう言うと3人は迷うことなど一切せず海へと走っていった

「なあ六花」

「なに？」

「水着見たいんだけど」

「あたしの貧相な身体見てどうすんの？」

「胸なんておまけだろ、六花は括れもしっかりある綺麗な身体してん  
じゃん

小恋ちゃんの胸を見てたことは謝るからさ」

「へえ、そこは認めるんだ」

「認めるけどオレは何よりも六花の水着姿を楽しみにしてたんだよ、  
それは嘘偽りなんてないから」

六花は嫌そうな顔をしながらTシャツを脱いで椅子に座った

ブラーッック!!

小恋ちゃんを見た後だとなおさら小さく見えるな

「小恋と水着買いに行った時に何て言われたと思う?」  
「え?」

「姉妹で水着を選びに来たんですか?」

「お姉さんの方は胸を強調したこちらがお似合いですよ、それと妹さんにはこちらがお似合いだと思いますーって」

ピンクのヒラヒラが付いたワンピースタイプの水着を店員に持ってこられた」

ちよつと想像しただけでその姿が一瞬で脳内に広がった

「寄せても谷間なんて出来ないし、パット4枚くらい入れたら不自然になるしで屈辱的だったよ」

多分小恋とは2度と服の買い物には一緒に行かないと思う」

なるほど、だから無理してでもこういう大人っぽいタイプのを選んだってことか

「オレはそういう六花もいいと思うぞ、少し大人びたエロスを感じるからな」

それにオレはどんな六花でも受け入れられるからな」

「なにそれ」

口調は変わらずとも表情は少しだけ柔らかくなっていた

「オレもあいつらのところ行くからさ、六花も行くこうぜ」

「どつちにしても無理」

「なんで?」

「泳げないもん」

「.....」

何でも出来そうなのになまきか泳げないとは、初めて知ったな

「なら浅瀬だけでも行こう、せっかく海に来たんだからさ」

3人には事情を話して目に見える程の距離の浅瀬に二人で来た  
「こんな浅くても魚いるんだな、ほら六花見てみるよ」

「珍しくはしゃいでるね」

「六花と一緒だからな」

六花も六花で手を海につけて何かを捕まえていた

「何か捕まえたか?」

「ナマコ」

黒くて太いものを六花は驚掴みにしてオレに見せつけてきた、そのとたん全身に鳥肌が立ったのが分かる

「オレそういうのはダメだ、どっかに捨ててくれ」

六花はニヤツと笑うとオレにナマコを投げつけてきた

「イヤアアアアアアアア、やめるんだー六花ああああ」

そんなオレらを見ていた小恋ちゃんが運悪く近付いて来て、六花の投げたナマコが小恋ちゃんの谷間へとホールインワンした

「キヤアアアアアアアアアアアア!!」

「ど、どうした小恋?! 大雅にセクハラされたか?」

「そうなのか!? 大雅最低だな!」

「なんでそうなるんだよ!!」

「ごめんごめん、悪気は無かったんだけど」

六花は躊躇なく谷間に手を入れてナマコを取り出した

「ナマコの方が大雅のより大きいんだから、ナマコにセクハラされたんだよ」

ナマコ以下って何か聞こえ悪いな

「なんてことするんですかあ!」

「ナマコー」

約半日海で遊んでいたオレらはホテルに戻ると昨日とは真逆ですぐに眠ってしまった

## 修学旅行く沖繩く3日目

### ★六花side

なんだろう、眠いダルい疲れた動きたくない

まだまだ若いつもりだったのに中学の時とは違うようだ  
これから海とかプール行くときはもつとのんびりしよう

「六花ちゃんいい加減起きてください」

朝ごはん遅れちゃいますよ」

「いらない、寝てる……」

「そんなこと言っていないで、今日は他のクラスの人と班になって国際  
通り回るんですから」

「行かない」

くるまっていた布団を小恋に無理矢理抜き取られた

「わがまま言わないで下さいね、友達の輪を広げるチャンスなんです  
からね」

なんだいそれは、あたしに友達がいなみたい言い方じゃないだ  
ろうか

「1つ言っておくよ」

あたしは友達がいなじゃないの、必要以上に友達を作らない  
の」

「それは友達がいな人が言う台詞です」

「なら小恋は幼稚園とか保育園の時の友達と今でも連絡をとりあつて  
いるの?」

「それは無いですけど」

「そういうこと、高校時代にたくさん友達がいても時間が過ぎれば自  
然消滅するんだよ」

どうこう言いながらも結局着替えて小恋の後をついていった

朝食もほとんど手をつけなくて割り振られた班のところへと向  
かった

「ランダムなのに御昴と同じ班なんて運命だと思わないか?」

「思わない、ていうか山田ウザイ」

「山田じゃねえよ！大和だよ！！二階堂 大和」

「あー…そんな名前だったね、で？他のクラスの人は？」

「まだ見えないけど、名前が竹虎……」

修学旅行の冊子を見ながら二階堂さんがそう言っている人多分本人が現れた

「いやー悪い悪い遅れちゃった

えつと？君が六花ちゃん？」

「そうだけど？」

「やっぱり！大雅の彼女だよな

オレ竹虎たけとら 桜龍おうりつていうんだけど中学の時は大雅とよく一緒につるんでたんだぜ」

なんとなく大雅と同じ匂い？がするタイプだから驚きはしないけど

「桜龍く先に行くとかひどくない？」

「お前らも見ってみろよ、こいつが大雅の彼女」

「えー大雅のこと結構気に入ってたのにく」

「こんなチンチクリンが彼女とか大雅も落ちたねく」

「てめえら好き勝手言いやがって」

「まあまあ、大雅の好みなんだしオレらがなに言っただけでしょうがねえだろ

せつかく沖縄来たんだし楽しもうぜ」

上手く話を纏められた

あたしからしてみればここでいざこざを起こして謹慎くらいになつてくれた方がありがたかったのに

ヘッドフォンを取り出して周囲の音を遮断したまま彼らの後を追うように国際通りをただ歩いた

「……」

「おーい！」

ヘッドフォンの片耳を浮かされて急に耳元で呼ばれた

「なに？」

「うつわ凄く迷惑そうな顔だな」

「だからなに？」

「みんな便所とか行ってるうちにさ、二人で抜けちゃおうぜ」

答える時間も与えられることなく腕を掴まれてその場から離れて行った

「心配すんなよ、あいつらにはLINE入れてあつから

それに大和のことあいつら意外と気に入ってるみたいだしな」

「それとあたしとあなたが離れる理由はイコールじゃないでしょ、離してよ」

少し強引に腕を振りほどいて足を止めた

「全くつれないねえ、オレみたいなイケメンと二人で旅行気分味わえるんだぜ？」

普通なら予約制だつていうのにさ」

「あなたと大雅が少し雰囲気似てると思っていただけだと思いますよ  
いだつたよ

あたしはあなたに興味なんてない、だから余計な事はしないで」

「余計な事ね、オレはお前に用がある」

「あたしには無いから」

「本の虫」

その一言で戻ろうとしていた足を止めた

## 修学旅行く沖繩く3日目

### ★六花 side

「御昴なんて珍しい名字だからさ、オレなりに色々調べたんだよね  
そしたら中学の時に本の虫なんてあだ名が付いていたこと知って  
呼んでみたんだけど、本当だったみたいだな」

「あつそう、懐かしい響きだったから足を止めたんだけど、言いたいこ  
とはそれだけ？」

「は？からかってんだよ、つーか本の虫のくせに大雅にすり寄ってん  
じゃねえ」

「大雅とあたしについて他人が口出さないでくれる？」

それともあなたに何か関係あるの？」

「関係あるから言ってるだろうが」

爪先から頭までジロジロ見られて肩に手を置かれた

「女の子達から雰囲気変わったとかかわいくなったりか聞くけど、よ  
く見りゃたいしたことねえじゃん」

「はい？」

「大雅も物好きだな、今まではオレですら羨ましいって思えるような  
女と遊んでたのに、今じゃこれだしな」

肩に置かれた手を軽く振り払った

「離してよ」

「はいはい、まあこれじゃ大雅もすぐに目を覚ますだろうしな、オレか  
らどうこう言う必要もねえか」

「つまり何が言いたいの？」

「大雅はオレがもらう」

.....

うん、まあ世の中にはそういう人種だっているんだから可哀想って  
思わないようにしてあげないと

「可哀想な奴を見るような目をするんじゃないやねえよ」

「見るような目をしてるんじゃないやなくて、そう見てるの」

「違うからな、オレは女の子が大好きだ

昔から女の子達に囲まれるのは大好きだ、だが満たされない、もつとたくさんの女の子に囲まれたい」

「バツカじゃないの……それで？」

顔が良い大雅と組んでもつとたくさんの女とイチャイチャした  
いつてこと？」

「そういうことだ、大雅だってオレといるときはそれなりに色んな女  
と遊べて今以上に楽しんだと思うぜ」

「昔の話でしょ、あたしは今の  
大雅しか知らないし、昔のことよりこれ  
からのことを知っていききたい

無理させてるのであればまたそれは考えるよ」

「大雅はオレみたいに自由にするのがベストなんだよ、無理してるか  
どうかなんてお前より長く付き合ってるから分かってるつもりだ」

六道さんから話を聞いていた時の印象は色んな女性と遊んでる人、  
それがあたし一人に絞ったのが無理をさせているということ？」

「ほら向こう見てみるよ、大雅のやつ他のクラスの女の子と楽しそう  
に歩いてんだろ」

視線の先には本当に楽しそうに女の子に囲まれて歩いている大雅  
がいた

「大雅はオレと同じなんだよ、内心ではもつと女の子に囲まれていた  
いんだ

まだ自由時間あるんだし、大雅のことだからホテルにでも入るん  
じゃねえの？」

こういう時どんな顔をしたら良いのか分からない  
なんて言い返せば良いのか分かっていないのに出てこない、自信が無  
い、頭のなかがいっぱい  
で気持ち悪い

大雅に気付かれる前に来た道を走って戻った

★六花 side out

★昴 side

はああああん小恋と沖繩デートしたいいいいいい！



LINEで合流しようって送ったけど断られちゃったしなあ

そりや他のクラスの奴等と仲良くするのも良いけど……一生に1度きりの高校の修学旅行くらい好きな人と好きなだけ回らせて欲しいもんだ

「なあ六道、あそこにいるのお前のクラスの御昴じゃね?」

「あー?御昴がなんだって?」

「だから、あそこに座ってる女の子だよ」

班別行動のはずなのに1人座ってスマホを弄っているのは間違えることなく御昴だった

単独行動するとはあいつめ……オレだってこんな奴等と回るより遠くからでも小恋を見てる方が充実するんだ!

御昴だけ好き勝手やらせてたまるか

周りに確認をとって小走りで駆け寄った

「1人でなにしてんだよ」

ふつと顔を上げた御昴を見て思わず口にした

「お前……なんつー顔してるんだ」

一瞬見間違いかと思うほど御昴の顔は迷いと悲しみが混ざったような表情で歪んでいた

「あ、うん……ごめん何でもないよ」

そう口にした時にはいつも通り人を見透かすような表情に戻っていた

「そっか、大丈夫そうならオレも戻るわ」

班に戻って少しだけ話をした

時計を確認すると後2時間程自由時間はある

「どっころらしょっと」

御昴の隣に座ると今度は驚いたような表情でオレを見てきた

「あいつらには御昴が1人で心配だからって話したから

一応お前は親友の彼女なんだからよ、大雅の事で何か困ってるなら話くらいは聞いてやるよ

お前が小恋にしてくれたように」

「六道さんバカなんだから話したところで解決には繋がらないと思うけどな」

「バカとはなんだ、いいから言ってみろよ」

「あたしって大雅と不釣り合いなのかな」

何を言い出すんだ？大雅と御昴なんて羨ましいくらいイチャイチャしてんじやん

「口に出てるよ」

「嘘!?マジでか!？」

「うーそ」

「……………」

お前らはちゃんとカレカノしてんじやん、それで良いんじやねえの？」

「そうかな、大雅ってあたしと付き合う前まではたかさんの人と遊んでたみたいだからさ、あたしが足枷になってるんじやないかって思えるんだよね」

「あいつは確かに会うたび連絡とるたび違う女と一緒にたけど、大雅のやつ付き合い初めてからずっとお前の話ばかりだぞ？」

話してるときは嬉しそうで足枷どころか二人三脚でスキップしてるみたいだな」

「なにそれ」

あ、笑った

「ありがと、少しだけ楽になったよ」

六道さんのくせにあたしの役に立つなんて生意気だけど」

「ちよい待ち！」

立ち上がって移動しようとした御昴を止めた

「オレの班の奴等みんな行っちゃったし、この際残り一緒に回らないか？」

「それこそ小恋に見られたら困るの六道さんでしょ」

「オレが1人取り残されたら迷子になるだろうが!!」

「分かったから、ただしフオローはしないからね」

約2時間程だったけど久しぶりに御昂と二人の時間を過ごした  
一応後報告だけど小恋にも説明はちやんとした

## 修学旅行くLastく

### ★大雅side

おかしい、何がおかしいって六花の様子がおかしい  
いつもより淡白な返事だし、いつもより表情に変化がない  
といってもいつも淡白であり表情を表に出さないんだけど

……

「なあ大雅、夜オレらの部屋に来いよ」

「あー…桜龍、お前六花と同じグループだったよな

今日何かあったか？」

「それも含めて教えてやつからよ、23時に待ってるからな」

六花に聞いても何でもないの一点張りだし、大和に聞いても途中からはぐれたって言ってるし一体何があったんだよ

そう思いながらも23時に桜龍の部屋に行くと、既に男女複数人で盛り上がっていた

「やつと来たかよ」

「随分盛り上がってんじゃん」

「そりや最後の夜だしな♪」

空けてもらったスペースに移動すると少しアルコールの匂いがした

「そんじや大雅も来たところまでえ」

罰ゲーム付きのゲームでもしますかあ!!」

「おい桜龍、オレはそんなことするために来たんじやねえぞ」

「固いこと言うなよ、白けちまうだろ？」

「少しくらい付き合えよ、な？」

「しようがねえな、つか酒飲んでる奴等にどんなゲームだろうが負ける気はしねえぞ？」

「チョロいと思っていたはずが負けて飲んでを繰り返しているうちに少し酔いが回ってきた」

「それじゃあ次は最下位と一位がキスをするー」  
そんなの一位と最下位にならなきゃ良い……

「なん……だと……?!」

「ウハハハ、大雅連敗だな♪」

「そんじゃキース♪キース♪キース♪」

「キース♪キース♪キース♪」

手拍子でオレを煽るなか、隣に座っていた女子がオレに迫ってきた  
約5センチ程の距離まで来て言った

「オレには彼女がいるっつーの!」

「罰ゲームなんだしき、彼女だつて許してくれるよ」

そんなことより楽しまなきゃだよ? 雰囲気壊すつもりなの?」

唇が触れる瞬間に自分の口を手で抑えた

「罰ゲームだろうが六花を裏切ることとは出来ない

雰囲気悪くさせちまって悪かったよ、オレ戻るわ」

部屋を出て少しすると桜龍が追いかけてきた

「随分と彼女のこと可愛がつてるみたいじゃん

今日結構ダメージ与えられたし、大雅もそのまま墜ちれば良かった  
のに」

その言葉を聞いて桜龍の襟ぐりを掴んで壁に押し当てた

「六花に何をした?」

「昔の大雅に戻そうと思ったんだよ」

考えてもみる、1人の女の子と遊んで重みを背負うよりかたくさんの  
女の子と適当に遊ぶ方が楽しいだろ?」

「確かにそう思っていたこともあったけどな、六花はオレにとってた  
くさんの女の子よりも遥かに大切な人なんだよ」

「はあ? 意味わかんねえよ」

お前が1人とダラダラ遊んでるうちにオレは2, 30人の女の子と  
遊んでるんだぜ?

つまりお前の数十倍は楽しく過ごせてんだよ、どうしてわかんねえ  
のかな」

「オレには六花の笑顔だけでその数倍楽しくいられてるからな、だから六花を傷付けたくないんだよ」

手を離すと桜龍は軽く服を正した

「それがわかんねえって言うってんだよ!!」

「そこまであの女に執着する理由がどこにあるっていうんだ」

「オレの家柄知ってんだろ？」

そういうのを目的として近寄ってくる女もいなかった訳じゃないし、それを知って離れていく女だった

そんなオレをオレだけを見てくれてるんだよ六花は」

「そんなん離れていくのもほっときゃ良いだろ、近寄ってくるのだから少し遊んで捨てりやそれで良い

オレと大雅二人揃えば抱けない女なんて居やしねえんだからさ、二人でハーレム完成させようぜ」

「オレはもうそんなガキじゃねえよ

桜龍がしたいことだつて分かっててつるんでたけど、一人を大事にする事だつて悪いことじゃ無いぜ？

それじゃオレは見付かる前に戻るわ、六花のことはオレで解決するから桜龍の話は聞かねえよ」

桜龍が追いかけてくることはなく、階段を下りるとそこに六花が座っていた

「六花!？」

「こんばんは」

「1人でこんなどこに来てどうした？」

珍しく六花からオレの手を握ってきた

「少しだけ甘えさせてほしいって言ったら迷惑？」

「迷惑なもんか、オレの胸は常に六花の為に空けてあるからな

「つか大丈夫か？戻ってきてから様子がおかしかったぞ？桜龍に何か言われたか？」

「ちよつとだけ大雅のこと不安になつてた

あたしじゃ大雅の全部を受け止めきれないんじゃないかなつて、

もしそうなら別れた方が大雅の為なのかなって、それなのに大雅のとどんどん好きになっただけって」

少し震えてる？

「あたし大雅が好き」

「六花」

繋がれた手を引いて六花を軽く抱き締めた

「不安にさせちまってごめん、でもオレだって六花に負けたくないくらい六花が好きだ」

「安心したけど、まだこのままでいさせて」

「オレもまだ離れたくない」

「こらー!!そこにいる生徒!!」

消灯時間過ぎてるぞ!!」

「やっべ!!逃げるぞ!!」

ちくしようにめ!こんな良い雰囲気の人に空気読めよ糞教師!!

「逃げなくても良いよ」

「へ?」

「九頭竜と御昂か、修学旅行最後の夜くらい部屋でおとなしく出来ないのかお前は」

あれなら何とか逃げれただろうに……

「お前らとりあえず反省文な、それと二人はオレの部屋で最後の夜を過ごすこと」

なるほど理解

「ん?まさか九頭竜、酒とか飲んで無いだろうな」

ビクツとした、言い逃れなんて出来ねえぞ、下手したら停学なんじゃないか?

「これですよセンセ」

六花は酒入りの生チョコレートを取り出した

「全く、そういうのはお土産用だけにしろって言ってるだろうが、まあそれくらいなら多目に見てやるから、他の教師にばれる前にとっ

とと行くぞ」

とりあえず助かった……

何であんなの持ってたのかと後々聞くと、酒は口を滑らかにしてくれるからだと答えてくれた

逃げなかった理由は教師の部屋に行けば理由ありで二人でいられてるかららしい

★大雅 s i d e o u t

★六花 s i d e

最後の夜が明けて飛行機に乗り、相変わらずの六道さんのビビリ具合を見て笑った

新幹線を待つ間は大雅とずっと手を繋いでいた

「そーいや何で六花の荷物そんなにすくねえの？」

「もう家に送ったから、明日には到着すると思うよ」

「なるほどな、オレもそうすりゃ良かったわ」

「六花ちゃんに大雅くん、昴くんを見ませんでしたか？」

「六道さん？知らないけどトイレとかじゃない？」

「あいつなら平気だろ、オレの側にいりゃ昴だって気付いて飛んでくるさ」

そう言いながらも辺りを見渡しても六道さんの姿は見えずに新幹線が先に来た

「とりあえず先に乗ってようぜ」

入り口前で少し待っていると階段を駆け上がる六道さんが見えた

「おーい昴ー！はやくしろー」

あたし達に気付いたのか走りながら手を振り始め、見事に転んでお土産等が散らばった



「しようがないね」

新幹線から降りて拾うのを手伝い振り替えるとドアが閉まって新幹線は走り出してしまった

「ま、待てー！ー！！」

追いかけてやうとする六道さんの裾を掴んで止めた

「待つわけないでしょ、次のに乗れば良いだけだし」

「そ、それもそうだな」

時計を確認して次の時間を見ながら大雅に電話をして、教師にその種を伝えてもらったのだが

少し待って別の新幹線が来たとき六道さんは何を考えているのか急いで乗り込んだ

「おい御昂！早く早く！！」

「ちよつと六道さん、その新幹線……」

手を引かれて無理矢理乗せられて新幹線は走り出した

「いやー危なかったな……」

「はあ……」

「なんだよ、方向あつてるだろ？」

「あやし達の降りる駅は通りすぎるけどね……」

「はあ!?なんでそれを先に言わねえんだよ!!」

「六道さんが無理矢理乗せたんでしょ？」

再び大雅に電話をしてまた理由を説明してあやし達の降りるべき駅を通りすぎるのをただただ見ていた

## 巻き込み

### ★昴side

「多少近くまで来れたけど完全に電車が終わった……」

「向こうから来たからーってなにも考えずに乗るからでしょ、しかも一度ならまだしも3回も」

「しようがねえじゃん、こんなにホームがあるのは予想外だったんだし、それに御昴が途中から電車にしようって言ったじゃんか」

「確実に戻るには電車乗り継いだ方が良いつて思ったのに六道さんがあたしが調べ終わる前に暴走してたんでしょ」

「言い返せない……」

「とりあえず駅付近のホテルにでもあたしは泊まるから」

「ならオレも」

「お金あるの？」

「無いです……」

「スマホの充電も無くなるし金も無いし……」

「な、ならちよつとだけ待っててくれ」

「……市だろ、実家が車で一時間ちよいくらいだからさ」

「それで？」

「スマホ貸してくれねえ？」

「あたしだって充電切れてるし」

「それじゃあ誰かにスマホ借りて電話すつから」

「親が来るまで一緒に待ってほしい」

「一応公衆電話を探しつつも帰り途中であろう人に電話をさせてほしいと頼み続け、ようやくと携帯を借りることができた」

「もしもし、昴だけど……」

『おめ！先生から新幹線に乗り遅れたって電話あったけど、今どこでなにしとん!?!』

「それが……」

「という訳で、金もってここまで来てほしいんだ」

『わかったから、お父さん向かわせるから駅前になさい』

「どうもごめんなさい」

貸してくれた人にペコペコ頭を下げて御昴のところに戻ろうとすると見事に絡まれていた

「いやー、お兄さん方、こいつに何か用ですか？」

「んだよ男連れかよ」

「可愛い大事な彼女ならちゃんとして側に置いとけよ」

「助言ありがとなー」

簡単に引き下がってかれて良かった…

「で？何で絡まれてたんだ？」

「そんなのあたしが可愛いからでしょ、あの人達も言ってたし」

そう言いながら缶コーヒートを投げ渡された

「つと、サンキューな」

「後でお金返してね」

「金取るのかよ!!」

「嘘に決まってるじゃん、とらないよそれくらい」

それでご両親は来てくれるって？」

電話した内容を要約して話すと淡白な返事が帰って来た

それからほとんど話すことなく御昴は街灯を頼りに本を読んで時間を潰している

「なんつーかそういう姿カッコいいな」

「あたしもそれなりに格好つけてるからね」

「なんだよそれ」

静かだった空間に少しだけ笑いが生まれた

それからしばらく大雅のことや小恋のこの話をして時間を過ごした

クラクションの音がして車から降りてきたのは予想通り親父だった

「なにしてんだおめーは」

一発殴られた、まあ覚悟していたし一発で終わったのは良かった

「それじゃあたしはここで」

「おや？そっちのお嬢ちゃんは？」

「同じクラスの御昴、こいつはホテルに泊まるみたいだから」

「なーに言ってるんだ、御昴ちゃんもはやく乗りなあ

こんなめんこい娘が1人こんなところに置いてくわけにいかん  
だろ」

「あー、いえあたしは大丈夫で…」

「いいからいいから」

まるで誘拐のように御昴は車に乗せられてオレもなにも言えずに  
車に乗り込んだ

まさかオレの実家に御昴を連れていくことになるなんて、最初に実  
家に連れていくのは小恋だと思っていたのに

## とつげき！・昴家

### ★六花 side

「あの、あたしは本当に適当なホテルで大丈夫ですから」

「遠慮すんな、それに二人一緒だと先生に伝えておけば先生も安心するんだろ」

「無駄だよ昴、オレの親父言い出したら聞かねえからな」

「それは六道さ……昴さんとお父さんはそつくりなようで」

「似てねえー！」

「おらあ昴みてえにバカじゃねえからな」

「オレだって親父みてえにアホじゃねえ！」

「親に向かつてアホとはなんだ！」

「親父こそ息子にバカとはなんだよ！」

いやそつくり

何だかんだで話し込んでいるうちに六道さんの家まで到着した

「風呂は沸かしてあるから、今日は風呂さいつて寝れ

他ん家族ももう寝とる、寝間着は昴のきれいなもの使わせてやり」

そう言われ半強制的に風呂場まで案内されたけど、正直なところありがたい

六道さんの暴走で結構嫌な汗かいたからお風呂には入りたかったし

ゆつくり湯船に浸かっていると六道さんが扉越しに話しかけてきた

「オレの中学ん時のジャージ置いてくからそれ着てくれ、3年の時に買ったやつだからきれいな方だと思っしよ」

「ありがと、どうせだし六道さんも一緒に入る？」

「バ、バカなこと言っつてんじゃねえよ」

「そうだよねー、あたしみたいな女の子とお風呂一緒に入ったら六道さんまた暴走しちゃうだろうし」

「誰がお前みたいなのペタンコみて欲情するか!」

うわー、ストレートに嫌なこと言われた気がする

そりゃ小恋と比べたらあたしなんて雲泥の差があるかもしれないけど、一般的に見れば普通……………

自分の胸を両サイドからお肉を集めて寄せながら揉んでみたけど、ただ虚無感だけが広がった

谷間なんてものは出来上がらないで出来上がったものは

「隙間かあ……………」

「隙間?」

「うるさい」

ちよつと慌てた返事と一緒に急ぎ足で離れていく足音が聞こえた

もう少しだけのんびりさせてもらってお風呂から出ると六道さんのお母さんらしい人が遅い時間だというのに、ご飯を準備してくれていた

「昴から話は聞いたわ、ごめんなさいねバカな息子のせいで、親御さんとか心配してない?」

「はい大丈夫です、あたしもひとり暮らしですので」

「心配いらぬならいいのだけど、それより昴はどう?」

「どうって…………昴さんは、まあ面白いですし、空気読めないところもありますけどいざという時はそれなりにしっかりしています」

「あらあらそうなの、呆れられちゃったと思ったけどそれじゃこれからも仲良くお願いね」

「多分勘違いなさっていると思いますが、あたしは昴さんの友人であるだけで、恋人ではありませんよ?」

六道さんのお母さんはその言葉でフリーズした

「でも安心してください、あたし以上にふさわしい人と昴さんは付き合っていますし、お互い好き合っていますから」

「あら!あの子ったら連絡も寄越さないと思ったらそういうことだったのね、昴の恋人ってどんな子なの?」

「そうですね、胸が大きいです」

「昴は昔からおっぱい好きだったからねえ」

「スマホに写真ありますけど今充電切れているので、明日見せてあげますね」

「楽しみにしているわね」

食事をとりながらも話をしているうちに六道さんもお風呂から出てきた

「あれ？オレの分は？」

「無いわよ」

「なんでや!!」

「当たり前でしょう、人様の大事な子をこんな遅くまで連れ回した罰なんだから」

空き部屋に布団準備してあげてあんたも寝なさい」

ぶつぶつ文句を言いながらも素直に言うことを聞いている六道さんを見て、少しだけ羨ましく思った

用意してもらった部屋でスマホを充電して電源を入れているうちにあたしはそのまま眠ってしまった

## 昴家での1日

### ★六花 side

朝かあ……そんなにゆっくり寝ていられなかったな

そう思いつつもスマホの電源を入れると着信履歴がすごいことになってた

「もしもし?大雅?」

「六花ー!!昴の野郎から聞いたけど今昴の家にいるってマジなのか!」

「成り行きでね、でも安心してよ

部屋も別々だし、今日か明日には帰れるから」

「早く帰ってきてくれないとオレ寂しくて死ぬかも」

「そう言っついていられるうちは大丈夫だよ

それよりなんか気だるそうな声だけど平気?」

「六花が心配で一睡もしてない」

「早く寝なさい」

電話を切って部屋を出ると誰かにぶつかった

「つてえ……」

「それはごつちの台詞でしょ」

「………昴<sup>すばるにい</sup>兄が女になった!」

「起きてるなら脳も覚醒させなよ」

そう言ったのにも関わらずその人は急いで階段を降りて行き、それについていくように階段を降りると懐かしいような匂いにつられて他の部屋に入った

「あら六花ちゃんおはよう」

「おはようございます」

「今朝<sup>けさ</sup>ごはん準備してるから顔洗ってらっしゃい

ほら五十鈴<sup>いすず</sup>、六花ちゃんを洗面所まで案内してやって」

先に椅子に座っていた六道さんを少し小さくしたような男の子は嫌な顔しながらもあたしを洗面所まで案内してくれた



「なあ、お前って昴兄の彼女なん？」

「そんなわけないでしょ」

「じゃあ何でウチに来てんの？」

「君のお兄さんがお馬鹿だからかな」

「馬鹿なのは否めない」

「でしょ」

「なーに二人でオレの悪口言ってるんだよ」

「馬鹿が起きてきた」

「お馬鹿さんおはよう、はいじゃんどうしたの？」

「久しぶりにこっち来たし釣りでもするかなって思ったんだよ」

「ええ？ 昴兄オレの勉強見てくれよ」

「オレが誰かに教えられると思うか？」

「御昴に見てもらえよ、こいつ頭良いんだぜ？」

「オレより小さいやつに勉強教わるとか何か嫌だわ

だって中2くらいのやつに高校受験の勉強教わるとか格好悪いし」

「あたしもごめんだね、六道さんの弟でしょ？ 馬鹿に決まってるじゃん

参考までに聞くけど、どこか入りたい高校あるの？」

「うっせーな、昴兄と同じところだよ」

あたしの高校ってそこまで偏差値高くはないと思うけどな、六道さんですら入れるくらいだし

「五十鈴じゃ無理だっつーの」

「昴兄でも受かったんだからオレだって何とかなるだろ」

「わざわざ遠くの学校に何で？ 地元で良いじゃん

お兄さんに会えなくて寂しいとか？」

「どうだって良いだろ！ 昴兄が見てくんなくてもオレ勉強すつから邪魔すんなよ」

弟くんは朝ごはんを食べずに部屋に戻っていった

六道さんと六道さんのお母さんから話を聞くと大雅に憧れている

ようで、1年だけでも大雅と同じ学校に通いたいらしい

「昴が勉強みてあげられればねえ」

「だからオレが教えられる立場にあると思うかよ」

視線が痛いんですけど

「わかった、今日と明日は修学旅行明けで休みだから弟くん勉強のやり方くらいは教え込んであげる、それで良い？」

「あらあら、ありがたいわあ」

「一宿一飯の恩義ってやつだな」

あとでまた大雅に連絡しておかないと……

## 昴家での日②

### ★六花 side

弟くんのテストも見させてもらったけど多分大雅と同じくらいだ  
と思う、勉強してこれくらい出来てるのであれば入試なんて簡単にク  
リアできると思うけど

弱いところはなんとなく理解できた

「なんであんたがオレの部屋にいんだよ」

「お母さんにまで頼まれちゃったしね、引き受けたからには教えられ  
るところは教えるよ」

「あのババア……」

「それに学園トップクラスのあたしが教えるんだからありがたいと思  
いなよ？六道さんに教わるより何倍も価値ある時間にしてあげるか  
ら」

疑うような目をしながらでもしつかりと机に向き合っている、彼の  
集中力がどれくらい持つのか時間を気にしつつ要点をまとめて教え  
込んだ

「なあ六花」

「年上なんだからそれなりの呼び方しなよ」

「年上に見えねえよ、えっと六花ねーちゃん」

「まあそれでもいいか、なにかわからないところでもあった？」

「昴兄とどういう関係なんだ？」

付き合ってるわけでもねえんだろ？」

「主従関係かな」

「主従!？」

「そ、あたしはあの人の弱味をいくつも握ってるから何でも言うこと  
を聞かせられるの」

「あの昴兄が……」

「まあ嘘だけどね」

「嘘かよ!!」

「ただ部屋が隣で同じクラスの人、それ以上でもそれ以下でもないよ」  
「そういうことか、つーか六花ねーちゃん指輪してるってことは彼氏  
いるんだろ？中々マニアックな趣味してるやつだろうな」

「言い忘れてたけどあたし大雅ともう1年くらい付き合ってるよ、写  
真見る？」

写真を見せると絶望に近い顔をされた

「た、大雅さんとあんたがあー!？」

大雅さんは色んな女の子とたくさん遊ぶすげえ人だろ!?それなの  
になんであんたなんかと付き合ってるんだよ!」

「悪かったね憧れの先輩があたしなんかと付き合ってる」

「うらな笠さんだっているのに……」

「笠さん？」

「あんただって知ってるだろ？大雅さんが金持ちなのは」

「そりゃね」

「だから大雅さんには婚約者がいるんだよ」

「それも知ってるけど名前は初めて知ったかな」

「知ってて付き合ってるのかよ……あんた見かけによらずすげえんだ  
な」

本当にどうしようもなくなったときは、あたしは素直に退くと思う  
けどまだ今は大雅の優しさに甘えていたいし退く気もない

「さて、話が脱線したね勉強に意識戻そうか」

その後も中々途切れない集中力はあたしですら感心した

絶対に六道さんの弟なんかじゃないと思えるくらいに

お昼になるとわざわざ部屋まで呼びに来てくれて、一緒に食事を  
とった

「すげえんだぜ母ちゃん、六花ねーちゃんが教えてくれると何で分か  
んなかったかが分かんねえくらい分かるんだ」

「五十鈴がそんなこと言うなんてめずらしいこと」

「彼は馬鹿ではないようですから、視点を變えて説明するだけでどん  
どんと頭に入っています」

「な？オレは頭良いんだよ」

「だから昴兄と同じところ受けても良いだろ？」

「そうは言ってもねえ……」

「なんでそんなに嫌なんだよ、昴兄はひとり暮らししてんのに！」

「家賃が6〜7万、食費1〜2万、光熱費1万、通信費1万、雑費や娯楽に2〜3万」

最低見積もつても11万1ヶ月に必要なになってくるんだよ、それが昴さんときみ二人分はかなりの出費になることも汲み取って考えないと」

「そうなのよ五十鈴、ひとり暮らししてとつてもお金がかかるの」

「じゃあ何で昴兄は良いんだよ！」

「あの子は小学生の頃から大雅くんと仲良かったから、高校生になったら絶対に一人暮らしするって決めてずっとお金貯めていたの、今だって月の仕送りの半分は自分の貯金から下ろしてるのよ」

六道さん意外とそういうこと出来るんだ

そういえば何だかんだで質素な生活してるような気がする

「ならオレだって……」

「五十鈴はどんどんお金使っちゃってるでしょ」

「バイトするし！」

「ひとり暮らしでバイトに明け暮れる人は絶対に学業が疎かになるよ、あたしはオススメしない」

「六花ねーちゃんまでなんでそんなに否定すんだよ！」

そう言つて逃げるように自分の部屋に行つてしまった

「はあ……六花ちゃんもご両親に感謝しながら生活しているのね」

「感謝なんてしていませんよ？」

祖父母の反対を押し切ってひとり暮らししていますけど、名義以外は全て自分でやりくりしていますから」

両親ではなく祖父母と言ったことを気にしたのか謝られた

「気にしないで下さい、多分弟くんは昴さんでも出来ているから自分でも出来るって思っているのだと思います」

だからこの話は昴さんに任せるべきではないでしょうか」

「そうね、昴にも話してもらえるように伝えておくわ」

その後食器を洗うのを手伝いながら気分を変えるように別の話をした

「六花ちゃんのお洋服乾いたと思うけどもう着替える？」

「そうですね、いつまでもノーパンノーブラじゃ変な感じですよ」

少し苦笑に近い笑われ方をされながらも干されていた服を取ってもらってすぐに着替えた

「あたしまた弟くんの部屋に行きますね、それと最悪兄弟で同じ部屋に住まわせるという手もありますから少しくらい彼の意思も考えてあげてください」

そう言って部屋に向かうと見て分かるほどいじけていた

「なんだよ、ひとり暮らし出来ねえんならもう勉強なんてしねえぞ」

「今してる勉強なんて将来そのうちの1割程度しか必要にならないしやらないならそれでいいじゃん」

「へ？オレを勉強させるために来たんじゃねえの？」

「しなくて良いことをする必要ないでしょ」

それよりコンビニでも行かない？なにか奢ってあげるよ」

「まじで!?嘘じゃないよな!?!」

思ったより食い付きが良かった

気分転換程度に誘ったつもりだったのに、急いで着替えられて何故か急かされた

「お小遣いなんてあつという間に無くなっちゃまうしき、ほしいもんも買えねえんだよな」

「それは使い方の問題でしょ?」

コンビニに入るとすぐにカードゲームの所へ向かっていった

「なにそれ？」

「今クラスで流行ってんだよ、強いカード欲しいしき」

「へえ」

「でもレアなカードは一箱のうちに何パックしか入ってねえんだ、それを引けりゃ良いんだけど」

「それが分からないところはギャンブル制あるね」

数パック手にとって見てみると少しだけ違いに気付いて聞いてみた

「レアなカードっていうのは特別な加工がされたりしてるの？」

「加工？それに近いかもな、全体が光ってたりするし」

「なるほどね」

それを聞いてそこにあるパックを全て手に取り仕分けを始めた

「なにしてんだよ」

「多少重さが違う」

「重さ？」

「そうだね、なにかと加工されてるなら少し重くはなると思うから、あたしが持って少しでも違和感があるものを抜き出してるよ」

彼はあたしが抜いたパックを手にとっていたがよく分かっていない様子でいる

「本当に違うのか？」

「なら買ってみよっか」

仕分け終わったパックを元に戻してよく分からないカード5パックとアイスと飲み物を買ってコンビニを出た

「はやく開けさせてくれよー」

「はいはい」

買ったカードを手渡すと嬉しそうに開封し始めた

「すげえ！全部レアカード当ててんじゃん！！」

「どうやったのか教えてくれよ」

「だから重さだっつてば」

「オレも分かるようになるかな」

「それだけ好きなものに熱中できるなら出来るでしょ」

アイスと飲み物の入った袋を渡して少し前を歩いた

「大雅みたいになりたいのってどうして？」

「そりゃ、大雅さんかっこいいし、モテるし、絶対に楽しいだろうから、大雅さんみたいになりたいんだよ」

「小さいね」

「はあ？六花ねーちゃんのほうが小せえじゃんよ」

「いや、考え方の問題」

「そんなこと言われたって分かんねえよ」

「弟くんは大雅じゃないから大雅にはなれない」

「コピーにだってなれはしない、自分に合わない生き方して、無理して、心配させられる」

「そんなのやってみなきや…」

「分かるよ、弟くんは大雅とは違う、やっぱり六道さんの兄弟だもん」

「よくわかんねえし」

「まだ分からなくて良いよ」

それじゃ帰ろうか、それでもう一度話してみなよ

今度はしつかり向き合って逃げないでさ、男の子なんだから出来るよね?」

「う、うるせえな!年下みたいな癖に男の子なんて言うなよ!」

「ならあたしと対等になれるくらいがんばりなよ」

あたしからすれば弟くんは六道さん並みにガキだからさ」

ガキガキと言いつつ合いながらも家に戻った

### ★六花 side out

### ★昴 side

これはなんていう状態なんだ?

釣りして帰ってきたらお袋と五十鈴と御昴が向き合って座ってんだけど

「あら、丁度良かったわ、昴もこっち来なさい」

「まず説明くらいしろよな」

「あなたの意見聞かないとまとまらないこともあるのよ」

渋々空いてる椅子に座ってとりあえず五十鈴の方を見た

「なあ昴兄、来年から昴兄の部屋にオレも住んで良い?」

「は?」

「ウチには二人もひとり暮らしさせられるお金なんて無いって言って



るのに五十鈴ってば聞かないのよ

無理しない程度にバイトもするって言い出すし」

「なるほどな、けどオレの部屋で男二人は狭いぞ?」

「昂兄が良いならオレだって我慢するから」

「なら良いんじゃないやねえの? オレは反対しねえけど」

「まあ六道さんならそう言うと思った」

それまでに壁の穴を何とかしとかねえといけないのは確かだけど、五十鈴だって都会に憧れてるんだ

兄貴のオレだけが良くて五十鈴がダメなのはかわいそうだしな

「全く昂も五十鈴に甘いんだから」

「まあまだ受験まで日はあります、それまでに弟くんの気持ちが変わればこっちの高校を受ければ良いと思いますし、気持ちが変わらなければあたし達と同じ高校受ければ良いかと思います

それにあたし達の通っている高校は兄弟で入学すると入学金や授業料が少し安くなったりするようですから、デメリットだけではないですよ」

「あら? そうなの?」

「え? そうなのか?」

「それを狙っていたんじゃないの?」

.....

御昂はオレ達にいくらくらい安くなるのかを3年間分だいたい計算を出してくれた

「あらま、こんなに変わるなら五十鈴もあっち行っても良いかもね」

「気が変わるのはや!!」

「大体での計算ですけどそのくらいは免除されるはずですよ」

「ありがとな! 六花ねーちゃん」

「お礼なら賛同してくれた昂さんに言いなよ

あたしは少し休ませてもらいますね」

御昂は縁側の方へ勝手に向かって行ってしまった

それからは親父が帰ってくるまでお袋と五十鈴と高校についてしばらく話していた

「たでーまあ！六花ちゃんと昴送るぞー！」

「了解、御昴呼んでくるわ」

親父が帰ってきたことを確認して縁側の方へ行くと御昴は体を丸めてスウスウと寝息をたてている

前にも思ったことだけど静かにしてりや可愛いんだよな

頬をつついてても猫のように頬を少し擦るだけで起きる気配がない

オレって御昴にたくさん迷惑かけてたな

なにかあるたびに頼ってばかりだったし、今のオレがあるのも御昴のお陰みたくないものなんだよな

「サンキューな」

外側に跳ねている髪を抑えるように軽く頭を撫でていると御昴の目は開いていた

「うお!？」

「何についてのありがとうかな？」

「いつから起きてたんだよ！」

「さあ」

クスクスと笑いながら体を伸ばして座り直しオレに頭を向けてきた

「な、なんだよ」

「もう一度感謝の気持ちを込めて頭を撫でなさい」

くそー起きてると本当に嫌なやつだな

「あー、たくさん迷惑かけて、それに毎回付き合ってくれてありがとう  
な」

適当に撫でていたつもりだったのに御昴は目を細めて少し嬉しそうにしていた

「もう良いよ、ごめんね、ありがとう」

「そうか？」

御昴が先に立ち上がると再び口を開いた

「あたしやっぱりまだ六道さんのこと好きかも

大雅には体も許したけど最初に根付いた感情はそう簡単にクリア

出来ないね」

「残念ながらオレにはラブリーマイエンジェル小恋がいる」

「知ってるよ、それでもこれ以上何かしてもらったら本当に心が揺らいじゃうから」

「御昂を敵に回したくねえし、親友の彼女と付き合ったりなんかした日には大雅と顔向け出来ねえからな」

オレもそう言いながら立ち上がったのだが、直接的に御昂から好きだと言われたことは初めてだったから内心ドキドキしていた

「親父帰ってきたしき、オレらも帰ろうぜ」

御昂はお袋と五十鈴に何か話した後すぐに車に向かってきた

「それでは色々とありがとうございました

弟くんも来年待つてるから、絶対に合格しなよ」

「つたり前だし」

「んじや行くかあ」

帰りにオレと御昂が何も話すことはなくアパートの前に到着した

「それじゃまた明日ね」

「お、おう」

玄関に入った瞬間オレは御昂に好きだと言われた瞬間を思い出して頭を抱えた

オレだって御昂か小恋か本気で迷ってた、オレが小恋に告る前に御昂から告白されていたら間違いなく御昂を好きになってたと今でも思う

「今さらそんなこと言うなよ……」

## すれ違い強化

### ★六花 side

「おやおや、おはよう六道さん」

「お、おは→よ」

「なに変な発音させてるのか知らないけど

もう少しシヤキツとしたら?」

「んなこと分かってるよ」

アパートを六道さんと一緒に出ると小恋と大雅がアパート前で待っていた

「六花!」

「昴くん!」

小恋はあたしを見ること無くすぐに六道さんに飛び付き、大雅は両腕を広げて待機している

「あたしが胸に飛び付くような性格に見える?」

「やっぱりそれはねえよなあ、おかえり六花」

「うん、ただいま」

それからは以前と変わらずに四人で登校した

「昴に変なことされなかったか?」

「されてないって、学校に来る途中と同じこと聞いてくるね」

「だってよお……」

「そんなにあたしのこと信用できない?」

「心から信じてるけどよ」

何だか煮え切らない返事から少し間が空いて再び大雅が言った

「六花、ちよつと屋上行かないか?」

時計を見るともうすぐHRも始まるというのに、何だか焦ってる様子でもある

「良いよ」

一応スマホと財布を持ち大雅と屋上に行き、ドアを閉めた途端に大

雅から強めに抱き締められた

「本当はめちやくちや心配してたんだ」

「大丈夫だよ、あたしはここにいるから」

「それでも昴に取られんじやないかって思って

心のどこかでその不安がずっとあつたんだよ」

「大雅……ちよつと苦しい……」

「それでも離れたくない、六花に昴の匂いがついてるのが許せないんだ」

そつとネクタイを緩められてワイシャツのボタンが上からゆつくり外された

「いつまでも昴の匂いさせてるんじやねえよ

六花はオレの彼女なんだから」

首筋から鎖骨辺りまで軽く口付けをされた瞬間大雅を突き放した

どうしてそんな行動をとったのか自分でも理解が出来ないし、大雅もなんとも言えない表情であたしを見ている

「ごめん、そんな気分じゃないの」

それなりに考えて答えをだしたつもりだったのに、その答えが出るまでの時間はそう長くはなく、少し目を反らしながらワイシャツのボタンを閉め直した

「1日昴とただだけでこんなかよ……」

「今はそんな気分じやないってだけでしょ、六道さんは関係ないから」  
多分嘘をついている、六道さんに頭を撫でてもらったあの時間・あの感覚を少しでも長くあたしだけのものにしておきたいって心の底ではそう思っているのかもしれない

「じゃあ何で昴のこと好きなんて本人に言ってるんだよ

六花と昴が帰ってきた夜に昴から電話があつたんだ、六花に好きって言われたってな」

「完全に好きだって言ったわけじやないから、まだ好きかもしれないって言ったの、それは大雅だって理解してるでしょ」

「頭では分かっているけど、やっぱり許せねえんだよ!」

「じゃあなに? あたしがここで大雅に流されて好き放題されたあげく

に股を開けばあたしを信用してくれるの?」

「そうじゃねえ! 六花の心の中にまだ昴が残ってるのが嫌なんだよ」

「だからそれも承知の上でしょ?」

それにあたしはちゃんと大雅のこと好きでいるから」

「ならオレだって他の女の子とイチャついてようが何しようが六花が好きでいればそれで良いのかよ」

「大雅がそうしたいならあたしは止めない」

胸の奥が締め付けられるような痛みを感じながらも、それを大雅に悟られないよう意識してそう返した

「そうかよ、六花にとつてオレなんてそんなもんなんだな」

「なにそれ、どういう意味」

「本当に好きでもねえ男と付き合つて昴を諦め……」

無意識に大雅の頬を叩いた

「何すんだよ!!」

「最低……」

ならあたしは好きでもない人とキスして、処女まであげたつてことじゃん」

もうダメかな、頭の中ぐちゃぐちゃでどんな顔して良いのかわかんないし、それどころかどんな顔してるのかもわかんない

「待てよ六花!」

声は聞こえていたのに振り返ることも出来ずに屋上から逃げるように出ていった

★六花 side out

★大雅 side

頭に血が上つたからつてなに言つてんだよオレは

六花が昴のこと好きだつてこと分かつて付き合つてたんじゃねえのかよ

追いかけてねえといけないのに足が反応しない、六花の母親とその旦那を見たときとなんら成長しちやいねえつてことかよ……

それに少し見えただけど六花泣いてた  
自分で自分の足を何度も叩いて六花を追いかけるために走り始めた

「お？九頭竜、腹は大丈夫か？」

教室に戻ると教師からその一言、ちらつと昴の方を見るとすぐにそう言われた意味が分かった

「あーすんませんね、もう大丈夫っす

クソデカいの捻り出してきたんで、糞だけに」

「下らないこと言っていないでとつと席つけ、それで御昴はまだ戻ってこないのか？」

六花はまだ教室に戻ってない？鞆はあるのに

最初の授業が終わると昴と小恋ちゃんがすぐにオレの所にきた

「六花ちゃんはとうしたの？」

「ああちよつとな」

「もしかして喧嘩か？」

お前のせいでもあるんだぞこの野郎……ってそんなこと言ってもしょうがねえな

「ちよつと電話してみるわ」

電話をしても分かっていただけど出ることはない

休み時間の度に校内を走り回ったのに六花の姿も見えず、さらに六花を見た生徒すら捕まらなかった

「まだ御昴見つかんねえのか？」

「ああ」

「とりあえず飯食おうぜ」

嬉しそうにしているかと思えば昴の手には弁当箱が握られていた

「お？これか？」

これはな、小恋が作ってくれたんだ、デユへへへ」

「別に聞いてねえよ

で？肝心の小恋ちゃんは？」

「先に便所行ってから来るってさ、大雅は購買行くか？」

「それもそうだな」

ふと六花の鞆を見たのを気付かれたのか昴は六花の鞆を勝手に開けた

「おい何してんだよ！」

「ほれ」

手渡されたのは弁当箱だが

「これ六花の昼飯だろ？」

「じゃあ何で2つも入ってるんだよ、どう考えても1つは大雅の為に作った分だろ？」

朝から良い匂いしてたから何となく分かってたんだけど言わなかったんだぜ？」

「悪いな、今日は二人で食べてくれ

オレ六花探さなきや」

昴は少し笑うとオレの背中を叩いた

「はやく見つけてやれよ、あいつ縛られるの嫌いそうだけどき、しつかり掴まえとかなきやどこか飛んで行っちゃもう羽根みたいな奴だから」  
「分かってるよ、それと昴

六花はお前よりオレの方が数倍…いや数百倍好きなんだ、変な勘違いすんじやねえぞ」

「しねえよ！」

校内にはいないことはもう分かってる、散々聞いて回って走り回ってたんだからな、なら……

校舎を飛び出して久しぶり全力で走った

六花の家に行くまでの六花が寄りそうな店も全て見て回ったが六花を見た人は見つからなかった

六花の部屋の前まで到着して呼吸を整えてインターホンを押したが反応がなかったのだが中から微かに音が聞こえていた

インターホンを再び押しても反応は変わらずドアを開けようとノブに手を掛けると鍵もかかっていない

勝手に入るのは少し悪いと思いつつ通れるギリギリまでドアを開けて中に入ると、玄関入ってすぐに六花のスマホが落ちていた



スマホを拾いそのまま部屋に入ると最初に目に映ったのは乱雑に制服を脱がされて倒れている六花だった

周りを見ずに飛び出すと六花の部屋を漁っている男がいた

「あ？なに勝手に入ってきてんだよ小僧」

こいつ…前に六花の母親と一緒にいたやつ

ならあの女も一緒にいんのか？

「お前こそ何してんだよ」

「あの女と別れてから金の回りが悪くなったからよ

こいつに借りようと思ったのに頑なに断りやがったからな、何回かぶん殴って一発やった後に自分で金探してんだ

お前もこいつに金でも借りにきたのか？」

頭の中で何かが切れるような感覚と共にその男に飛びかかった

「つぎけんじゃねーぞクソガキ!!」

「てめえこそふぎけんな！六花に何すんだよ!!!」

最初は揉み合いになっていたのに経験の差からか一方的にどんどんと殴られはじめ、終には後ろに回られて首をきめられた

「お前こいつの男か？」

嫌がってた割には良い締めまり具合だったぜ

まああまりにも抵抗してきたから殴って気絶させちまったんだけ

どなあ」

「ふ……ふぎけんな……」

「そろそろお前も寝てるよ、そしたら拉致ってこいつに有り金全部持ってこさせるからよ」

「はっ……残念ながら今日限りで別れるかもしれねえからよ、そんなことしても無駄だと思うぜ」

そう言い終わると同時に首を締める腕に更に力が加わり

意識を持つていかれそうになる感覚までした

「はい、そこまでー」

オレと男を簡単に引き剥がされ、少し咳き込みながらも大きく深呼吸を繰り返した

「今度は誰だおい!!」

「あ？オレはくそうだな、正義の味方だ！

ちなみにオレにとつての正義は六花にある」

「なに訳わかんねえこと言ってるんだよ!!」

殴りかかろうとする男を新しく来た男は簡単に受け止めた上に、何  
度も顔面を殴り返している

「さあ部屋が汚れんだろ、表出ようぜ」

オレまで部屋の外に引き摺り出され黒い何かを突き付けられた  
それが何か理解できるまで時間はかからず思わず口に出した

「本物か？」

「ああ、海外から持ってきたばかりのホンモノよ

サイレンサーもついててなんとお値段1500ドル」

「そんな脅しを通じるかよ……」

顔面ボコボコになりながらもそう言い返す男の方に銃口は向けら  
れて躊躇なく引き金が引かれた

テレビやゲーム、漫画等とは違いサイレンサーが付いていてもかな  
りの音を隣で感じると同時に撃たれた相手を見ると壊れた何かの様  
に震えている

「さてと？てめえら二人は六花の部屋で何してた？

そんで何で六花が倒れてるのか説明しろ

まずはおっさんの方からだ」

「お、オレはあいつの母親の元旦那で、そんで……」

「あーもういい、次はてめえだクソガキ」

「オレは六花に謝りたくて六花の部屋に来たんだ、そしたら鍵が……」

「よしわかった、悪者はおっさんだな」

銃口を相手の額に押し当てて胸ぐらを掴んでそいつは言った

「次六花の視界に入ってみる？脅しじゃなく殺してやるからな」

銃を離すと吸っていたタバコを額に押し付けた

「はやく消えろよ、それとその目印は六花に伝えとくからな、一生逃げ  
回りたくなければどっか遠くに行け」

「わ、わかりました……」

雰囲気理解したのはこの男は殺すと言ったら殺す人だ

怯えながらも逃げていくのを見て次はオレかと心臓が飛び抜ける  
気持ちでじっと待った

「で？お前何で六花に謝りに？」

「え？」

その男は再びタバコに火を付けると煙を吹きかけてきた

「こんなところじゃなんだな、部屋入んぞ」

ずかずか部屋に入り込むと六花の服を脱がしはじめた

「な、何してんだよ!!」

「何ってあのおっさんの体液洗い流すんだよ

こんなの見りや何があつたかなんて一目瞭然だろ

ほれ、お前も手伝えや」

脱がしながらもその男は六花の微かな反応をしつかりと見ていた

「気絶してるだけだろうし、シャワー任せるわ」

そう言いながらも流しに捨てたタバコを見るとフィルターが強く  
噛まれている痕跡が残っている

オレだつて気持ちは分かる、両頬やこめかみは赤く腫れていて唇か  
らも数ヶ所血が出ている

どこまでやり返せたか分からないし、100%やり返せたとしても  
気が収まらない

六花の身体の隅々までシャワーで洗い流しているうちにとんでも  
ないことに気付き、六花に適当なTシャツを着させて抱き抱え急いで  
部屋に戻った

「てめえは誰なんだよ！」

「あ？言つてなかったか？」

「何も言われてねえしそれどころか銃突き付けられたわ」

「六花の本当の親父だよ」

「嘘つけ」

「はあ？何でそれが嘘になんだよ」

「あつたとしても兄貴だろ」

「なら六花が起きたら直接聞いてみるよ

「そんで？お前さんは六花の何なんだ？」

「六花の彼氏だ」

「それこそ嘘だろ」

「本当だつっーの！これだって見ろ、六花とお揃いのペアリング」

「お前さんは六花のストーカーか何かか？」

「そんなに疑うなら六花が起きたら聞いてみろし」

「あーそうさせてもらう」

それから六花が目を覚ますまでそう時間はかからなかったのだけど、オレと父親と名乗る男は互いに六花の良いところを挙げ続けていた

「いつ……」

「六花!」

ベッドから起き上がった六花の側にすぐに駆け寄った

「大雅……？」

「ああオレだよ」

「ちなみにオレもいるぞ？」

「お父さんまで？」

六花がお父さんと言ったことにたいして物凄いドヤ顔でオレの方を見てきた

上半身を起こして座り直した六花はオレの顔を見て安心したかのように笑った

「なにその顔、ボロボロじゃん」

「六花だっておんなじようなもんだろ」

少し笑い合いながら六花はいつもの表情に戻って言った

「お父さん、ちよつと外してもらえるかな」

大雅と話がしたいの

「いいぞ」

軽い返事をしながらもオレと六花を残して外へ出ていった

「えつとさ……」

あの人って本当に六花の父さんなのか？」

「そうだよ、見えないでしょ？まだ30代前半だし」

30代前半ってオレくらい歳の子ども作ったってことかよ

「そ、そうなのか……」

謝るつもりで来たのになに他のこと聞いてんだよオレは

「そんなことよりも六花、今日は……」

「ごめんなさい大雅」

「え？」

「大雅を不安にさせたこともごめんなさい

汚されちゃったこともごめんなさい」

うつむいていて表情はよく見えないけど、シーツを握っている手は力が入っているのが分かる

「ごめんなさい……」

謝り続ける六花の肩に腕を抱こうとして一瞬躊躇ったが、呼吸を整えて強く抱き締めた

「オレの方こそ悪かった

昂に嫉妬して、六花の気持ち考えないで酷いこと言っただけで、六花を守れなくて本当にごめん」

「ダメだよ大雅、あたし汚いから」

「汚くなんかねえ！」

ベッドに押し倒した六花は泣いていた、憤りと悲しみが混ざったような顔をしていて、すぐに顔を隠した

「オレにとって六花はただ一人オレを本気で好きにさせた女だ、誇りを持ってよ、自信を持ってよ！」

そうじゃねえとオレが惨めじゃんか」

「ならこんなあたしにキス出来る？」

「何度だって出来る、今から明日の朝まで唇がふやけるまでもしてやる」

「あんなおっさんに抱かれた身体でも良いの？」

「あんなおっさんより数百倍良い夢みさせてやる」

「まだ六道さんを諦めきれなくても？」

「それはちよつと悔しい……」

六花は泣きながらも笑ってくれた

「だけどオレは六花に必ずオレで良かったと思わせるって言っただろ？」

「うん、覚えてる」

「だったらそれはまだ有効だ、オレはもう六花を離さないからな

どうしても昂じやなきやダメってんなら相談はしてくれ、本気で考えるから」

「ズルいなあ大雅は」

「多少ズルいくらいが男も女も丁度良いんだよ」

六花の髪を軽く撫で下ろしてそつと唇に触れた

「キスして良いか？」

「うん」

「やー、話はすんだか？」

突然開かれた扉からは六花のパピ

「つと……これからもうーラウンドだったか、悪い悪い空気読めないくって」

重ねていた唇を離してすぐにベッドから降りた

「やっべー！撃たれるのか!?オレ死ぬのか!?!」

「本当に空気読めないお父さんだね

流星にあたしはこれ以上疲れたくないからえっちするなら別の日にするよ」

「なんだよつまんねえな

男の性欲っていうのは無・限・大★なんだぜ？

なあ坊主、せっかくならやりてえよな？」

「六花がしたくないなら、我慢しようかなと……」

「そしたら家で自家発電だろ？」

「相手がいるなら頼み込んでみるよ」

「そんなことよりお父さんは何でこっちに帰ってきてんの？」

「実は1ヶ月前に帰ってきてただけど、オレのbarがあの子に乗っ取られてるわ、あの子はあの子で六花から金取ってるって小耳に

挟んだからな

どうなつてんのか色々調べてたんだよ」

「それで？結果は？」

「このありさままだ、元凶を叩かねえとな

オレと六花が接触し始めればあの女は必ず六花の前に現れると考えて今日六花の部屋に向かった」

「なるほどね」

「なあ六花、オレと一緒に海外で暮らさないか？」

「は？」

「英語くらい話せるだろ？ならこんな」

「おい、ちよつと待てよ」

思わず口を挟んだ

「おいおい、これは親子の会話だぜ？部外者が口を挟むなよ」

「海外に連れていかないでほしい、六花はオレが必ず守るから」

「今回守れてねえだろ」

「っ……………」

反論なんて出来なかった、実際に六花の父親が来なきやオレだつてボコボコにされて終わつてた

「実際に決めるのは六花だ

「この中に飛行機の子ケットが入ってる」

渡された子ケットを六花はすぐに返した

「次からは大雅が守ってくれるんでしょ？ならそれで良いじゃん」

「流石オレの娘だ、血は譲れねえのな」

「好きな人と離れる方がよっぽど辛いから、ごめんねお父さん」

「まあ六花がそれで良いなら良いんじゃないやねえの？」

オレも暫くは日本にいるし」

「なら何で飛行機の子ケット渡してんの？」

「向こうに知り合いがいるからな、預かってもらおうと思つて…………つと

オレはそろそろ仕事だ」

六花の父親は紙に住所と電話番号を書いて六花に渡した

「何かあれば連絡してこいよな

それと彼氏じゃねえってうたがって悪かったな

名前だけ教えてくれねえか？」

「えっと、九頭竜 大雅です」

「九頭竜……？九頭竜 大雅……」

あー、うん分かった分かった、九頭竜家のボンボンか」

「ボンボン言うな！」

笑いながら部屋を出て行って、派手なバイク音を鳴らしながらア  
パートから離れていった

「なあ六花」

「なに？」

「エツチしたい」

「しないってば」

「ほら、無限大って言ってただろ？」

「何でそんなに元気なのか逆に聞きたいところだね」

「そりゃ六花が大好きだからだろ」

「なんか最近の大雅って六道さんに似てきたんじゃない？」

「そんなはずねえよ、オレはオレだ」

「そお？」

六花は布団に潜り始めた

「とりあえず疲れたから寝させて」

「一緒に寝て良い？」

「うん」

一緒にの布団に入ると、反対方向を向いて丸くなってる六花はボソツ  
と言った

「来てくれてありがと」

「当たり前だろ」

後ろから六花を抱くようにオレも疲れていたのかすぐに眠ってし  
まった



変わらない幸せ

★大雅side

「どうだった？」

「うん、大丈夫だったよ」

怪我等の具合は全て良好だったらしく、怪我もほとんど治りきっている

「オレより治りがはやいのな」

頬に手を当てると六花はクスクスと笑った

「見た目以上にひどくなかったからだよ」

手を繋いで病院の外に出ると小学生くらいの女の子が六花を指差して言った

「ねーママ、あのおねーちゃんあたしのクラスのお友達よりちっちゃいよー」

「人に指差しちゃいけません！

ごめんなさい……」

多分母親だろう人がペコペコ頭を下げてオレらの横を通り過ぎた

「別に子どもの戯れ言なんて気にしないから」

気にしてないって割には顔が笑ってないのはなぜだろうか

オレの胸の辺りまでしか身長無いんだよな、というと30cmちょい小さいってことか

「なに見てんの？」

「いや別に」

「じゃあはやく行こう、テスト勉強するって言い出したのは大雅達なんだから」

「お、おう」

図書館で待ち合わせをしているため、少し急ぎ足で向かった

「待っていたよ六花」

「何で大和がいるんだよ」

「ここで偶然二階堂さんにお会いして、同じクラスですし一緒にどうかなって思いました」

「大和は頭良いからな、オレもオツケーした」

「こいつら……」

「まあオレもそろそろ出番が欲しかったところなんだ

さあ勉強をみてやろう」

六花が大和に心揺らぐはずないだろうし多目にみてやるか

それから1時間……オレと昴は完全に燃え尽きていた

「ちよつと小恋、休憩しないか？」

「オレもだ……50分の授業で集中力が切れるオレには1時間は辛い」

「だらしないな二人とも」

「あたしも少しだけ疲れました」

小恋ちゃんは腕を上には伸ばして自分で自分の肩を叩いた

「肩凝り？」

「あ、はい、前屈みで勉強していると少しだけ肩がしんどくなるんです」

まあそんな立派なものぶら下げてりや肩も凝るだろうな

「そういえば御昴」

「なに？」

「小恋は150cmくらいあってオレがそろそろ180行きそうなんだけどよ

御昴って身長どんくらいあるんだ？

小恋と比べても結構ちっさいよな」

それオレも聞きたかったやつ！流石昴だ、空気の読めなさは世界1前に測ったときに142cm」

案外普通に答えてくれたけど予想以上に低かった、145はあると思ってたんだけど

「やっぱりちっせーのな

ちやんと飯食ってるのか？」

「六道さんみたいに夜中にラーメン食べるようなことはしないけど、適当に食べてるよ」

「どれだけ小さくてもまな板でもオレが六花を好きなのは変わらないさ」

「大和は黙ってる、オレの彼女を口説くな」

それに昴もコンプレックスになってそうなことを簡単に聞くなよ」

「そうなのか？小さいって女からしたら武器になるんじゃない？小恋はそう思わない？」

「えと…えつと…」

小恋ちゃんだつて困るよな、そんなこといきなり振られても

「小さくて良いことなんてほとんどないよ」

電車のつり革に届かないし、満員電車に埋もれる、高いところも届かない、ジーンズも必ず切らなきやダメだし、服なんて子供服以外見れないから」

「でも小さい子が高いところの物を必死で取ろうとしてる姿って可愛いよな」

「あたしもそれ思います、六花ちゃんあんまり頼ってくれないからピョンピョン跳ねながら物を取ろうとしてるとき可愛いなあって思えますもん」

「あたしの話はどう良いでしょ、飲み物買ってくる」

「オレもついて行くよ」

席を立てて先に歩く六花を急いで追いかけた

やつべえなこれ多分少し不機嫌な顔だわ

「オレもさ、必死で頑張ってる六花結構好きだぜ」

「急に何言ってるの？」

「あー、いや、特別深い意味なんて無いんだけどさ」

「高いところの物を取るときどんなこと考えてるか分かる？」

「そういえば客観的に見てるだけで本人の心情はわかんねえな」

「分からないって顔してるね」

六花は一度咳払いをして自販機の上を指差した



六花の表情もなんだか少し冷たい気もする

「どこでそれを?」

「どこでも良いでしょ」

「笠は……ヤバい」

「ヤバい?」

「自分の言う通りにならないのが嫌いな奴だ」

「面白そうな人じゃん」

「どこがだよ!!」

「大雅がそこまで怯えるくらいの人ならば是非会ってみたいものだと思うよ」

まああたしは誰かに言われて何かするようなタイプじゃないから馬が合わないと思うけどね」

六花の反応は思った以上に淡白な返事だった

オレとしてはもっと妬いてほしかったりしたんだけど

人数分の飲み物を持って昴達の所へ戻ってまた勉強会を再開したが、六花の口から笠のことは出てこなかった

「なあ六花、今日泊まっても良いか?」

「別に構わないよ?」

「そこは断れよ!!男と女が1つ屋根の下なんて究極破廉恥だぞ」

「何言ってるんだよ大和、御昴と大雅付き合ってから結構経つんだし泊まるくらいすんだろ」

「なら昴!君は西城さんを家に泊めたことがあるのか!」

「お、オレと小恋はプラトニックだからな、純情なんだよ!」

「何いってるんだか六道さんは、小恋ももっと攻めなきゃ」

「御昴!小恋に変なこと言うんじゃない!!」

「えっと、あたしもお泊まりして良いのかな!」

おー?珍しく小恋ちゃんから積極的じゃねえの?

六花と何話したか気になるけど……

とりあえず昴には親指を立てておいた

「ならオレも!!泊まったっていいよな!」

「はあ？無理に決まってるじゃん」

「そうだそう！大和はとつとと帰れー」

「流石にオレも今回は御昂と大雅の味方だわ」

「あたしも、それは無いかなーって思います」

大和は涙を浮かべながら全速力でオレ達とは逆方向へ走っていった

「それで？本当に小恋は六道さんの部屋に泊まるの？」

「えつと六道さんが良ければですが……」

「オレは大丈夫!!」

「それではお父さんに電話しますね」

少し赤くなりながらも電話し始めた小恋ちゃん

正直に言えばうらやましい!!けしからん!!あのおっぱいを昂は揉んだり舐めたり挟んだり出来るんだから

断られれば良いとまで思ってしまう

決して六花が不満な訳じゃないんだけど

男はみんなおっぱいがすき。byたいが。

「苦戦してるね」

「そうっほいな」

電話で小恋ちゃんは友達の家としか言っていない

多分彼氏の家なんて言ったら100%無理なのは承知の上なのでろう

「ねえ小恋、家族にあたしのこと話した？」

小恋ちゃんは少し戸惑いながら頷いた

「代わって」

六花は小恋ちゃんのスマホを勝手に取って電話を変わりスピーカーにした

「勝手にお電話代わってしまい申し訳ありません

私は同じクラスの御昂六花です」

『ああ、君が小恋のよく話す六花さんか』

「ええ、まだあいさつにも行けずいきなりのお電話でいささか恐縮

ではございますが、本題に入らせて下さい」

『ん、あ、ああ、なんだね?』

「今日図書館で一緒に勉強をしていたのですが

小恋さんは頭が良く教えるのも上手なので、今日だけで構わないので私に勉強をもっと教えて頂きたいのです

それでもダメでしょうか?」

『勉強なら泊まりでやる必要はないだろう』

「それでは次のテストで教えられてどれだけ点数が取れたかお教えいたします、小恋さんのお陰で良い点数が取れたと

それに小恋さんは将来教師になりたいと伺いました、誰かに教えるというのは立派な体験だと思いますが」

『小恋が教師に……』

そ、それでもダメだダメだダメダメダメ!!

小恋が家にいないと寂しいんゴンツ……』

『ごめんなさいね、あの人小恋を溺愛してるから』

「それより大丈夫ですか?」

『ええ、多分気絶してるだけだから』

お母さんはお泊まり賛成よ、それに自分からそんなことを言い出せるなんて、小恋が成長したってことじゃない』

「ありがとうございます」

近いうちに私の方からごあいさつさせていただきます」

『そんな硬くなくて良いのよ、小恋のことよろしくね』

電話は向こうから切れた

それにしてもよくもまああんなことを無表情でペラペラと話せるもんだ

「えつとありがとう」

「良かったね小恋」

それから結局オレは昴の、小恋ちゃんは六花の服を借りることまで決まったのだが

「あたしの服って結構ダダボなの多いのに……」

六花が見て分かるほど落ち込んでる

「ど、どうした？」

「ほら小恋、もう一度言っただらんない？」

「あの……あの……」

少し苦しいなあって……」

六花はオレと昴の前で小恋ちゃんを押し倒して胸を揉みしだいた

「これかあー！これが邪魔なんだな？」

ならあたしがねじ切ってやろう」

「ん……ちよつと六花ちゃ……ん」

ふむ、これはこれで悪くない絵だ

「やめろっつーの」

昴は六花を猫掴みのようにして小恋ちゃんから剥がした

「はふうふう……」

酷いです六花ちゃん！」

「相変わらずだったよ、さあ！六道さん」

「さあ！じゃねえよ、アホかつつーの」

「いやいや、六道さんほどアホじゃないよ

さて、適当にご飯作るけど六道さんと小恋はどうする？」

「御昴の料理か、悪くないな」

チヨロすぎだぞ昴

「あ、あたしだって料理できますから！」

「ならあたしらは部屋に戻るよ、それじゃ後は楽しんでね」

「オレからの饞別だ、受けとれ」

とりあえず昴には六花から貰ったパイナップルのゴムを1つだけ渡して六花を追うように部屋から逃げた

「それじゃあたしらは蕎麦とか簡単なので良いよね」

「ん？オレは六花の出してくれるもんなら何だって構わないぜ」

「そういうのは嬉しいけどさ、一番難しいんだよ

これ作って喜ばせたい、あれ作って喜ばせたいって感情が無くなっ



「ちやうからね」

「そんなつもりで言ったわけじゃねえよ」

「知ってる」

「こういう時の顔がやっぱり可愛いんだよな」

「いつもみたいな笑い方じゃなくてなんつーか、こう……」

「考え付かねえし思い付かねえ!!」

「台所に立つ六花を後ろから抱き締めた」

「ねえ大雅?」

「ん?」

「流石に危ないんだけど」

「そう言いながらも包丁を動かす手は全くといって良いほど止まらない」

「大雅ってば」

「振り向こうとした六花にそのままキスをした」

「六花はオレだけのものだ……」

「少し長めのキスをしている最中、六花に腕をつねられた」

「いっただだだだだだだだ」

「だから危ないって言ってるでしょ?」

「だってさあ……」

「だってじゃないの、せめて時と場合は考えて」  
「最も過ぎる意見だ、反論の余地がない」

「そんなところではっきりしてないで」

「することないならお風呂先にどうぞ?」

「うん……」

## 近くに居たい存在

### ★六花 side

後は麺を茹でるだけ……つと

そう思っていると隣の部屋からシャワーの音が聞こえてきた

六道さんってシャワー使わない人だったよなあ、普段ならザツパンザツパン音聞こえてくるし

六道さんの部屋に繋がる穴に上半身から突っ込むと正座したまま固まってる六道さんがビクツと反応した

「な、何だよ御昴!!」

「ねえ、六道さんは小恋と離れてても愛し合える自信ある?」

「急に変なこと聞くんじゃねえよ!」

「いいから教えて」

少し間が空いて六道さんは目を反らしながら頷いた

「そつかそつか、うん、そうだよね普通は」

「お、お前だってそうじゃねえのかよ」

「どうなんだろうね、自分の心が1番分らないや

あたしにとつて普通つて……いや

普通なら……」

なにを六道さんに言おうとしちゃったんだろ

ちよつと話の路線がずれるところだった

「御昴?」

「なんでもないよ、小恋が出てきちゃう前に戻るよ、また誤解されたくないし叩かれたくもないからさ」

「そーかよ、でも大雅なら何でも聞いてくれるだろうよ

それでも何だか落ち着かないならオレだって話くらいは聞いてやっから」

「アハハハ何それ♪」

「煮え切らない顔してっからだろ」

へえ、意外と見てくれてたんだ

なんだろう、嬉しいのかな？胸の辺りが暖かい気がする

「もしもの場合は頼るかも、それじゃあね」

顔が見えなくとも六道さんから「おう」とだけ返事が聞こえてきた

★六花 side out

★大雅 side

よし！そろそろ出て飯食わせてもらおうか

少し長風呂してたけど六花が「お背中流しまーす」なんて言っ  
入ってくるはず無いしな

湯船から立ち上がった瞬間、風呂のドアを急に開けられた

「六花!？」

履いてない………というか生えてない!!

「あんまり見られると流石に恥ずかしいんだけど」

「悪い………っつーか何でまた急に入ってくるんだよ」

「別に良いでしょ」

急いで湯船に戻ると六花は軽く身体を流してオレの前に入ってきた  
た

「二人だとやっぱり狭いね」

「そりやそうだろ」

やべえ………なんか背中見てるだけで抱き締めなくなる

でも抱き締めちゃダメだ抱き締めちゃダメだ抱き締めちゃダメだ  
抱き締めちゃダメだ

そういうつもりで入ってきた訳じゃないかもしれないねえし

第一今ここで抱き締めちゃったらオレが止まらない

「良いじゃねえか、六花だってそのつもりで入ってきたんだぜ？やっ  
ちまえよ」

何を言ってるんだデビルタイガー！

「そうですよ、ゴムも無いのにこんなところで暴走するわけにはいきません

抱き抱えてベッドインしましょう」

そういうことでもねえんだよエンジェルタイガー!!

頭の中で天使と悪魔がオレに語りかけてくる最中に六花はこつちを向かないまま口を開いた

「あのさ」

「ん？」

「あたし達別れよっか」

完全に聞き間違いなんかじゃなかったのに、聞き間違いだと思いたかった

混乱してるはずなのに冷静に反応することができた

「オレのこと嫌いになったか？」

「その逆だよ

大雅のことは凄く好き」

「だったら…」

「でも六道さんが消えないの、大雅を見てても一緒にいても何をしてても…

こんな中途半端な気持ちのまま笹さんって人が転校してきたら多分あたしは押し敗ける

ごめんね、あたしのためにこんなに時間を作ってくれたのに」

分かっていた、六花の瞳の奥にはオレじゃなくて昴がいるってことは…：分かっていただけ六花の中から昴はいつか消えて、オレだけを見てくれると思いつけてた

「分かったよ」

「うん」

「そんじゃ風呂から出ようかね」

「大雅……」

「六花はもう少し浸かってろよ」

オレと一緒に立ち上がろうとした六花の肩を抑えて先に風呂から出た

こんなに昴が憎たらしいって思ったのは正直初めてかもしんねえな

六花と小恋ちゃんが喧嘩してた時だって確かにイラツとしてたけど、今はその比じゃない

オレの力不足が招いた結果か……

ドアの向こうで啜り泣く声が微かに聞こえた

オレだって泣きたい、つい数分前にキスして抱き締めてたのに

「なあ六花」

「……………なに？」

「オレさ、まだ六花のこと好きでいて良いんだよな」

「ダメって言っても割りきれないでしょ？」

「あたしがそうだったんだから」

「確かにな」

六花のことだ、泣き止むまで絶対に風呂から出てこねえだろうな  
昴達は上手くやってんのかな？

なんだかモヤモヤした気持ちをぶつけたくて昴の部屋に繋がる穴を通り抜けた

「大雅!？」

「大雅くん!？」

二人仲良く冷やし中華なんて食いやがって……

「なんだ？邪魔だったか？」

「六花ちゃんはどうしたんですか？」

「六花なら多分まだ風呂場で泣いてるよ」

その言葉を聞くと同時に小恋ちゃんの手は上に振り上げられオレ

目掛けて落ちてきたが

小恋ちゃんの手が止まった

「どういうことですか!? 何で六花ちゃんが…」

「何で小恋ちゃんまでそんな顔するんだよ……それに昴まで」

オレは完全に昴の部屋に入り込んで一部始終を話した

当然昴のことは伏せて話した

「御昴から?」

「ああ」

「大雅はそれでいいのかよ」

「そうですね、大雅くんはそんなに簡単に六花ちゃんを諦められるんですか?」

「うるせえ!!!」

六花が決めた事なんだよ……

オレには六花の胸に空いた穴を埋める実力が無かったんだ

だからオレだって素直に諦めたんだよ」

昴はオレにポケットティッシュを投げつけてきた

「なにが素直にだよ、かっこつけてんじゃねえよ!!」

ボロボロ泣きながら話して行くせに素直にだあ?

全然諦めついてねえじゃねえか!!」

そう言われて泣いていることに気付かされた

オレは本当に六花の事が好きだったんだ

多分六花にまで聞こえるんじゃないかと思えるほどの声でオレは泣いた

多分ここまで泣いたのは初めてじゃないかと思うほど

その日の夜は無理を言っ昴の部屋に無理矢理寝かせてもらった

次の日は瞼が真っ赤に腫れていて恥ずかしくて六花に会える顔じゃなかった

「そんじゃオレと小恋は出掛けるからな」

「おー……」

「こんな時何て言えば良いのか分かりませんが、気を落とさないでく

ださい」

「おー……………」

少し静かになりその日は昴の部屋で一日中寝ていた

そして次の日の朝昴に起こされ学校行く準備をして、六花の部屋を覗いてみると見たことのある男がくつろいでいる

「神出鬼没だな、六花の親父さんよ」

「親父さんとは失礼だな、お兄さんでもまだまだイケるだろう？」

辺りを見回しても六花は見えない

「六花ならいねーぞ？」

「どこか出掛けたのか？」

「いや、もうここには帰ってこねえよ」

「は？」

六花の親父はベランダに出てタバコに火をつけた

「どういうことだよ」

「そのまんまの意味だよ」

オレの親父……六花にとってのじいちゃんだけだな

頭におつきな障害を負ったんだよ、もう先が長くないらしい

オレが帰ってきた理由はオレの女のこともあるが、最優先は親父

だ、六花にその事は一昨日の朝方話してある」

「そんなこと六花は何も……」

「あいつは言わねえよ、それくらい分かんたら」

「まあオレがガキの時は散々やんちゃしてたしな、気苦労も絶えなかったせいでもあるんだけどよ」

六花はオレの実家に行ってる、残りの高校生活は向こうで親父達と過ごす」

急いで六花に電話をかけるとテーブルの上で六花のスマホがバイブしている

「教えろよ、六花の居場所」

「言えねえよ、それが六花の望みだ」

タバコの火を消して携帯灰皿にしまうとオレに何か渡してきた

「これは？」

「お前宛の手紙だよ

あとは？ 昴ってやつと、小さい恋……？なんて読むんだ？ これは……」

昴と小恋ちゃんにも？

急いで昴を呼んで昴から小恋ちゃんにも連絡を取り次いでもらった

六花の手紙

九頭竜大雅

『大好きです、私、御昴六花は九頭竜大雅のことが大好きです

なんだか文字にして書くのは少し恥ずかしいな

でも大雅の優しさが好き、大雅の声が好き、大雅の温かさが好き、大雅の匂いが好き

嫌いなどころなんて何も無い

黙って居なくなつたことはごめんなさい、大雅と一緒にいると多分

決心が鈍ると思って、黙ってた

それと、急に別れてごめんなさい

私のせいで泣いていたのは聞こえてたよ

最後に私を好きになってくれてありがとう』

六道昴

『私と隣の部屋で最悪って思ったことは何度もあつたと思います

初めての出会いは最低でしたね、思い出す度に笑いが込み上げてきます

実は壁の修理代はもう必要無いです

大屋さんにはこっそり無駄に高く設定するように相談して中々が追い付かないようにしていましたから

それほどまで私の心をかき乱した六道さん流石ですよ

今の私がいるのもここまで楽しかったのも六道さんのお陰かと思



います

そのせいでずっと六道さんが私の中から消えないのかもしれないかも  
れませ

ん  
責任とって下さいね』

西城小恋

『私が六道さんを落とすより早く六道さんの心を掴んだ小恋

よくよく考えてみると私が小恋より勝ってる所なんて殆ど無かつ  
たのかな

初めは嫉妬混じりだったけど小恋を知るうちに

六道さんが小恋を選んだこと何となくだけど分かった気がする  
やっぱりおっぱいかな

というのは冗談

小恋といるときの六道さんは私が見た中で一番良い顔してる

前に私と話してるときや、私の話をしてるときが楽しそうって言っ  
てた事があったね

こっそり聞いてた★

でもね、私だつてそう思うよ、小恋と付き合う前の六道さんは小恋  
の話に夢中だったから

ちよつとズルいかもしれないけど書かせて

私はまだ六道さんが好き

だけど私が一歩引き下がったんだからバッドエンドは許さない、  
ハッピーエンドになれないなら私が六道さんをハッピーエンドに導  
かせてもらおうから』

「御昴のやつ……そんなこと裏でしてたのかよ」

「最後まで六花ちゃんらしいですね」

「六花の友達でいてくれてありがとな」

「……ぎげんなよ」

肩に乗せられた手を振り払った

「ふざけんなよ!!」

なにも悟れなかったオレ自身に1番腹が立った

勝手に浮かれて勝手にいじけて最後は話すことなく居なくなる

「内緒だけだな、六花は××大学狙ってんぞ

約1年半会えねえだけだ

お前らが頑張れるならまた六花の友達になってやってほしい」

××大学……

名前を知らない人の方が少ないくらいの名門じゃねえか

「大雅さん……」

「やってやろうじゃんか……」

努力が嫌いなオレが死ぬ気で努力してやんよ」

「それでこそ大雅だな」

「ならあたし達も頑張りますよう昴くん」

「オレもか!」

「あつたりまえだろ? 死んだこと何てねえんだから

死ぬ気でやればオレらだって何とかなるって」

「良い顔すんじゃねえか

全く、良いものだな青春は」

親父のこと、笹のことと勉強一筋だけじゃねえし難しいかもしん  
ねえけど

目標つてもんが見付かったんだ

待つてろよ六花、オレが意外と諦めが悪いつてこと思い知らせてや  
るからな

## 六花のいない町

### ★大雅side

「最近六花ちゃん家に来ないわねえ

何かあったの?」

「ああ、言っただけじゃなかったか?オレら別れたんだよ」

「まあ!!ちよつとお父さん!また何か変なこと六花ちゃんに言ったんじゃないの!?!」

「わ、私は何も言っていない!!」

「親父のせいじゃねえよ

っつそさん、オレまた勉強すつから」

「大雅」

「んだよ」

「話がある、後でお前の部屋に行くぞ」

「わかったよ」

食事を済ませて部屋に戻り学祭の時に撮ってもらった初めての  
ツーショット写真を手に取った

オレは諦めねえからな……

× 大なんてオレの今の学力じゃ到底入れねえけど

昂や小恋ちゃん、それに六花の親父さんの前で死ぬ気で努力するつ  
て言ったんだ、やれるだけはやってやるさ

しばらくするとドアをノックする音に気付いた

「親父か?入れよ」

「ああ」

「で?何のようだ」

「本当にあの娘と別れたのか?」

「だからそうだって言っただろ、それにそうしてほしいって親父も

言っただだろ」

「それはそうなんだが……」

「んだよ煮え切らねえな」

「いや、お前は自分の価値がしつかり理解して見えてきているんだな  
と思っただだ」

別れて勉強に勤しみ、筈と結婚して私の会社を継ぐのが1番の幸せ  
に繋がる

もう高校2年も終わりになる今の調子で……」

ダン!!!

親父の言葉を遮るように机を叩いた

「オレがオレの価値を理解してる？」

オレが思ってる自分の価値なんてその辺の蟻以下だよ!!

それに幸せに繋がるだど!?

いいか、よく聞けよ親父……

オレの幸せはオレ自身の手で絶対に掴み取る!

オレ以外の奴、ましてや親父なんかにおレにとっての幸せなんて決

めさせねえよ!!」

「私は大雅のことを思っ……」

「余計なお世話だ!!そんだけならとつと出ていけよ」

思いの外言い返すことなく親父はオレの部屋から出ていった

しばらく机に向かっていてそろそろ日を跨ごうとする時間に突然

スマホが鳴り出した

「うっわ!!メチャクチャビびったな……」

公衆電話?この辺にまだそんなもの存在してたか?」

最初は出ないでやろうと思ったけど集中力も途切れたし、悪戯なら  
こっちがからかってやろうと思いなながら通話ボタンを押した

「誰だよ」

「久しぶり」

心臓が飛び上がったのが自分でも分かった

「…六花？」

「うん」

「えっと…なんだ…？半年ぶりくらいか？」

「元気してつか？」

「何言ってるんだよオレはくく!!」

「体のほうは変わらずって感じかな」

「大雅のほうは変わりない？」

「あつたりまえだろ？オレも昴も小恋ちゃんもみんな元気だぜ？」

「そっか」

「でもよ……」

「ん？」

「やっぱり寂しいとは思ってる」

「うん」

「もう戻ってこないのか？」

「うん」

「……っは……」

「まあそうだよな、でもオレが追いかけてやるからな覚悟してろよ」

「なにそれ」

「こつちの話、それにしてもよくオレの番号分かったな」

「だって1番に好きな人の番号だよ？」

「それなら電話帳がなくても11桁くらい覚えられるから」

「嬉しさのあまり失神するところだった」

「10円玉そろそろ無くなるから電話切るよ」

「まだ話したいことが沢山あ……」

「ツ……ツ……ツ……」

「切られてしまった」

「でも男って単純な生き物なんだな」

「声が聞けた、まだ好きでいてもらえただけでこんなにも頑張れる気がしてくるんだから」

「高校2年生は1番遊べるって思ってたのに後半は勉強浸けで過ぎていった」

『 』

大雅 side

「筮のことどう思ってる?」

「なんだよ急に」

「いいから答えるんだ」

「嫌いだな、あのタイプの女は」

「なるほどな」

「つか朝から何なんだよ」

「葛城から連絡があつてな、筮がこつちの高校に編入することになつた」

「そーかよ、まあ期待すんなよ」

オレは嫌いな女とは絶対に結ばれねえからな」

そのあと何か言っていたが聞くことなく家を飛び出した

「よっ

今日も仲良く登校とは妬けるな」

昴と小恋ちゃんの背中を軽く叩いた

「よう大雅」

「おはようございます」

3年になつてもこの関係は変わらない

ただただどうでもいい話をしながら登校する

1つだけ違うところは、いつも右隣にいた六花はもういないということ

「なんかお前やつれてね?」

「は?」

「大雅くん無理してない?」

「無理もなにも引きこもって勉強してるだけだよ」



「聞いてたんだけどどっ?」

「筮、もしかしてそんな言葉鵜呑みにしてんのか?」

「当たり前でしょ?あたしのお義父様になる人の言葉なんだから  
で?大雅の家目当ての小汚ない泥棒猫はどこ?」

「オレがぶちギレるより先に昴がキレて、筮の胸ぐらを掴んだ

「見もしねえのに適当なことほざいてんじゃねえぞ糞ガキ

家が優れていようがお前が優れてる訳じゃねえんだ

「1つだけ教えてやるよ、お前は御昴に何一つ敵わねえ」

「あ、あんたねえ!!あたしにこんなことして良いと思ってるわけ!?!」

「あ?関係ねえだろ

「オレはお前がどこの誰なんだか知ったこっちゃねえ

けどな、オレらの友達のことを悪く言うのは許せねえんだよ」

「いがみ合う二人に割って入った

「なんだよ大雅」

「大雅、あの下品な男はなに!?!」

「二人とも落ち着けよ、まずは筮」

「なによ」

「とつとと手続き済ませてこいよ」

「時計を指差し時間が無いだと合図を出した

「そうね、それじゃあまた後で会いましょ」

「小走りで校内へ入っていたのを見て昴の肩を叩いた

「サンキューな、オレがぶちギレる寸前だった」

「格好よかったですよ」

「えへ、そお?えへへへへへ」

「その顔が無ければな……」

「HR前二人には筮のことを話した

「はえー」

「親が決めた婚約者とか漫画の中だけかと思っただけど

「本当にそんなことあるんだな」

「オレは昔から断ってたけどな」



「どうしてですか？」

今は六花ちゃんのことを好きだからっていうのは分かりますけど、  
笹さんも可愛らしい子だと思いますよ?」

なんか女の子なら何でも良いみたいに思われてたのか? オレは

「親父の敷いたレールの上を進み続けるのがガキの頃から嫌だったんだよ、オレも兄貴もな

それに笹は……」

「ほらほら席につけー」

「つべ!!この話はまた後でな」

教師が来てすぐに自分の席へと戻っていく

「あー……ホームルームの前に3年のこんな時期だが転校生を紹介する、入ってきなさい」

頭がいてえ……

「みなさん初めまして、葛城 笹です」

男からの反応がかなり良いし、女の子からの反応も悪くはなさそう  
だけど

「大雅の婚約者のあたしが編入してきたからには

大雅に変な虫が付かないように致しますので」

一斉に視線がオレに刺さり、耐えきれずに教室から出ようとドアへ  
歩いて向かった

「もしかして葛城って四大財閥の1つの葛城グループ?」

「ああ、それなら九頭竜グループの大雅の婚約者っていうのも領ける  
よな」

「なにそれ、理想的」

「ウツホ……九頭竜大雅の尻、良い形してるぜ」

「庶民が狙える相手じゃねえよな」

何か1人変なこと言ってるやつ居たけど気にしないでおう

保健室で自習しながらお昼頃まで過ごしていると笹が入ってきた  
「いい加減諦めなさいよ、パパ達の決めたことよ」

「は？オレが誰を好きになろうが関係ねえだろ」

「いいえ、関係あるわ」

あたしと大雅が結ばれることで将来的に大きな利益となる  
それにあたしは大雅のこと好きだから」

「あつそ」

「なによその顔」

「別に、オレからしてみたらオレの親父の会社がどうなるうが、お前の  
会社がどうなるうが知ったこつちやねえんだよ」

それにまず第一にオレは笹のこと別に好きじゃねえから」

「昔のことまだ怒っているの？」

「そんなんじやねえよ」

ガキの頃おもちや壊されたくらいのこと今でも根に持つわけねえ  
だろ

オレは自分の好きなのにならないと嫌って考えるお前みたいな  
女が嫌いなだけだ

今まで抱いた女にそういうやつは一人もいねえからな」

「あら？あたしだって大人になっているの」

昔のままだと思わないでちょうだい

それとこれ、なんだと思う？」

取り出したのはA4サイズくらいの茶封筒

そこには『御昴 六花身辺調査』と書かれているのはすぐにわかつ  
た

「大雅が誰と付き合っているのかずつと調べていたの」

最後に付き合っていたのがこの子よね」

「ああ、そういうところも嫌いなんだよ」

中は気になるが素直に見せてくれって言って見せてくれるはずが  
ねえ

「どうすればいい」

「大雅のおじさまに、あたしと結婚するって言ったら見せてあげるわ」  
「ならいいわ、見ねえよ」

笹は苦虫を噛み潰したような顔をした

「大雅だって自分の思い通りにならないと嫌なんじゃない」

「オレだけじゃねえよ、大抵の人間は皆そうだ

だがな、お前は大抵の人間が踏みとどまるはずの線を越えてんだよ」

返事もなく茶封筒をしまうと笠は背を向けた

「まあもう会うことも無いでしょうし

でももし方が一を考えて手は打っているわ

急に勉強を頑張りだしてる様子だけど未来は変わらないの

大雅は社長椅子で偉そうにしてくれれば良いの

あたしと結婚をしてね」

笠はそう言って保健室を後にした

くそっ!!笠のことだ、六花がどこにいるのかも絶対に知っていて何かしてくる

こんな時に何にも出来ねえのがかなり悔しい

勉強に手がつかなくなったのは自分でもすぐに理解して、その日は早退した